68-492

改版に附する自序

曾て京都に在り、社會は余を要せず、余も亦た社會を要せず、余は獨り鴨河の水と語り、叡山の巖と談じ、頃刻にして朝鮮京城に於ける日本人の失態を飛報に接す、余は悲憤措く能はず、決然筆を執て起ち、叱呵鞭撻一週日にて成りしものを『時勢の觀察』と爲す、後之を『國民之友』雜誌に掲ぐるを得て少しく天下の賛同を惹きたりき。

明治三十五年一月 内閣文庫

余は余の思想を綴るの文を有せず、余は唯だ余

の見し事、聞きし事の有の儘を語り得るのみ、『流竄錄』亦た此類なり、余の當時の日記より謄寫せしものに過ぎず。

一の高貴なる目的を有せざりし日清戰爭の結果として我國に大文學の出でん事の到底望むべからざるは戰爭當時の余の宿論なりし、果して不幸にも余の豫言は適中して戰後五ヶ年の今日に至るも大文學は未だ邦人の中に出でざるなり、高貴なる思想は高貴なる行動に伴ふて來るべきものなり、日清戰爭は大軍艦を作つて大文學を作らざりし、是れ其不義の戰爭なりし十分なる證明なり。

日蓮上人は日本に於ける平民的宗教家の一人なり、余は彼の勇膽を愛し、堅信を慕ふ者、京都在留中彼の傳記を探つて大に余の孤獨を慰むるを得たりき、此篇を作るに方て余の友人なる牧師吉岡弘毅氏は尠からざる援助を余に與へられたり、茲に記して氏の厚意を謝す。

此書元と民友社の手に在りしもの、今その著者の手に歸れるを見て、余は母が其愛子を再び懷

にするの感なき能はず、兒は疑もなく豚兒ならん、然れども愛子は永く他人の手に托すべからざるなり、余は竊に彼の再生を祝し聊か感を述ぶること爾り。

明治三十三年五月端午の日

東京市外角筈村に於て

内村鑑三

警世雜著目次

時勢の觀察……一頁
其一、公德と私德の分離……二頁
其二、實益主義の國民……八頁
其三、自讃的國民……一三頁
其四、國民の罪惡と其建築物……二〇頁
其五、方針の定らざる理由……二三頁
其六、東洋の青年國……三一頁
其七、俗吏論……三九頁
其八、小なる日本……四五頁
流竄錄（一）……五五頁
白痴の敎育……五五頁

目次

流竄錄（二）……八七頁
新英洲學校……八七頁
流竄錄（三）……一二四頁
亞米利加土人の教育……一二四頁
何故に大文學は出ざるか……一三四頁
如何にして大文學を得んか……一四六頁
日蓮上人を論ず（一）……一六八頁
同（二）……一七五頁
同（三）……一八八頁
同（四）……一九九頁

警世雜著

內村鑑三著

時勢の觀察

〔義憤は韻文を叫ぐ〕 (Facit indignatio versum.)

自序

今や日本國民は上は博文侯より下は博文館主人に至る迄皆な悉く八方美人とは化しぬ、或は若し八方美人に非ずとするも少くとも四方美人又は半面美人たらざるはなし、此に於てか余輩の如き八方醜婦生の世に出るの必要は來りしなり、彼女の本職は病犬の如く何人にも何黨派にも嚙み付くにあり、梟の如き眼を以て暗中の穢れを探るにあり、彼女は敵とのみ爭はず、知人とも朋友とも拳鬪すべし、彼女は「愛國者」を嫌ひ「尊王家」を卑しむ、彼女の如きは實に「不敬事件」を釀すに足るべき人物なり。

日本國民の大教訓

往時米國の批評家トロー氏トマス、カーライルの「過去現在」なる書を讀で拍手大喝天を仰ぎて曰く「英國は仍ほ大なる未來を有す」と、英國を罵りしカーライルは大なり、然れどもカーライルを許し、カーライルに聽きし英國はカーライルより大なり、カーライルを有せし英國にして仍ほ大なる未來を有すとあらば八方醜婦生を有する日本も亦多少の冀望を有して可ならん。（明治廿九年七月京都新町便利堂借宅に於て）

其一、公德と私德の分離

醉枕美人膝、醒握天下權とは何時の頃何人に依て傳へられし福音かは知らねども日本國民が數百年來信じ來りし大教訓なるが如し、其實例を探らんと欲せば遠く延元平治の昔に溯るを要せず、明治の今日、明治廿九年の今日、吾人の目前に數個の好適例の供へらるゝあり。

吾人之を云ふは日本人は必ずしも理論上如斯背理を許す者なりと云ふに非ず、新聞記者が紙面に於て日本仁義國論を唱ふる時は大に政治家たる者の私行を誡しむる事あり、國會議員が議場に潔白を裝ふに際して公德私德の分離を歎ずる事あり、日本人は

日本人民は寛大なるかな

日本國の大實業家

理屈上私德の眞價を知る、然れども實際上敗德の政治家を許し、彼をして其位置を保たしめ、或は若し一時の恥辱に陷らしむる事あるも社會は躊躇せずして再び彼を迎へ、私德の欠乏の故を以て彼の社會上の勢力を奪はず、寛大なるは實に日本人民なるかな。

而して是れ政治家に於て然るのみならず、實業家に於て然り、文學者に於て然り、日本國に於ける大なる實業家とは能く金を儲ける人を謂ふなり、摩西（モセス）の十誡を以て蓄財術の秘訣と信ぜしロートシルド第一世の如きは我國の實業界に於ては馬鹿者なり、官人に諂ふも可し、軍夫に重き頭分稅を課するも問はず、能く短少時期に法律の明文に牴觸せずして財產を作るものあれば彼は我國に於ける實業界の英雄なり、彼に新聞記者の讃辭あり、社會は彼が如き者を挫くの勇氣と確信とを有せず。

日本人の大なる文學者とは二十年の長き貧と孤獨とを忍びしカーライルの如きを謂ふにあらず、又は「善人」たるを以て終生の目的となせしオルター、スコットの如きを謂ふにあらず、若し能く文を綴り得れば之を妓樓に於て爲すも可なり、文學者の敗德は

品性は日本の文壇に價値なし

彼等に二種の道德あり

彼の著述の賣上高に一つの影響を及ぼさず、品性は日本の文壇に於ては一文の價値なし。

由是觀之、四千萬口の日本人は擧て皆政治家なる事を、彼等に二種の道德あり、國家的道德と稱して政治上の道德其一なり、個人的道德と稱して私行上の道德其二なり、而して後者は前者の爲めに問はれず、大なる經綸を蓋ふるものは友に薄きも可なり、情に鈍きも問はず、曰ふ「大丈夫天下の事を計る何ぞ私事を問はん耶」と。

是れ實に驚くべき事實なり、吾人は外國に於ても二種の道德の區別なしと言はず、然れども試に グラッドストン氏が國家危殆に逼るの時に際して汚穢なる賣女を落籍せしと假定せよ、彼の政略の如何に適切にして如何に高潔なるに關せず、彼は一日も英國に於ける彼の位置を保つべからざるは明瞭なり、亦た英國民が擧て彼の職責を問はんとするあれば、彼の汚行は詰問の大條目たるは論を須たず、政治家の私行を政治問題外に撤去するは日本國民の一特徴なるが如し。

クロムウエルの大なりしは彼の强硬なる外交政略にあらずして彼の温和なる剛直なる私行にありし、ワシントンは勇なるよりは寧ろ直なりし、米人は品性の高潔なりしが故に種々の政治上失敗の中にリンコルンを信じたり、私行はモルトク、ビスマークの大砲壘なりし、米國の或る鐵道會社に於て酒を嗜む機關士は如何なる技量を有するも傭雇せざるが如きは今日の日本人の迚も信ずる事能はざる所なるべし。

公德は私德を離れて論じ得べき乎

然れども吾人は問はんと欲す、公德は私德を離れて論じ得べきものなる乎と、醉て美人の膝に枕する者は醒て天下の權を握り得べきものなる乎と、酒間客と共に禽獸的談話を樂しむ者に天下の經綸を議するの資格ある乎と、人間とは政治的機能と個人的機能との配偶より成りし二元的動物なる乎と、吾人の哲學にして恣らずんば ペルソナ(本身)は最も明白なるインディヴィジュアル(個躰)なり、個人的僞善者は又政治上の僞善者なり、私行上の虛言家は亦政治上の虛言家なり、政治は人類唯一の職業に非ず、政治的に大なればとて必しも大なる人に非ず。

人の眞價を定むるに當て政治的に國家的に密にして私行的に個人的に疎なる日本人の觀念を以て吾人は健全なるものと稱ふるを得ず。

確信と實行との分離

私徳と公徳の分離は確信と實行との分離を意味す、而して信ぜざる事を行ひ、義を名として利を求むるもの（國と人とを問はず）を吾人は稱して僞善者と云ふなり。紙上に天下の大義を唱へ、内閣攻撃を專門とするも、情に鈍く私節に脆き新聞記者は僞善者なり。著書に理想的人物を描き、自らは其理想を追はず、患者に藥を盛りながら自身不攝生を誇る醫士の如き文學者は僞善者なり。敕語に低頭せざればとて賣國奴の名を附して人を困しめながら、自身は賣女の眞像を以て充たされたる小説を嗜む學生は僞善者なり。國家の利益と稱して私利を營む實業家は實業家に非ずして虚業家なり。隣邦の獨立を扶植すると稱して干戈を動かし、功成りし後は自國の強大のみを計て終に屏弱國をして立つ能はざるに至らしめし國民は僞善者なり。即ち僞善者とは面を被る役者なり、彼は英雄の眞似をなす者なり、愛國者の人形なり、彼等は人生を歌舞伎座の舞臺の如くに見做す者なり、彼等は皆悉く團十郎菊五郎たらんと望むものなり、議會と新聞紙とは彼等の假面を顯はす所なり、嗚呼若しアスモヂユスの秘術ありて彼等の樂屋に入るを得るならば……

彼等は皆悉く役者

正義は口にあり、
政略は腹にあり、
義は名の爲に求め、
名は利の爲に貴ぶ。

身は黨則に縛られて自由を唱へ、
心は利慾に驅られて愛國を叫ぶ、
衆愚の聲に震へ、
寡婦の涙に動かず。

野の獸に斷あり、
彼に斷なし、
空の鳥に情あり、

彼に情なし。

風と共に飛び、
草と共に靡く、
僞善者の僞善者、
奴隷の奴隷。

蒙古人種の特性

其二、實益主義の國民

瑞西の地理學者アルノルド、ギョー氏曾て蒙古人種の特性を敘して曰く「彼等の腦髓は事物の實益を見るに敏にして抽象的眞理の攻究に及ばず」と、即ち蒙古人種は事物の眞價を定むるに當て實益上に現はるゝ其結果よりして其中に含容せらるゝ眞理に依らずとなり、即ち蒙古人種は實利の民にして主義信仰の民に非ずとなり、即ち蒙古人種は主義其物を評するにも其實益を以てして其原理を問はずとなり。

明治の日本人

余輩はギョー氏の此觀察を悉く當れりとは云はず、我等の祖先に主義の人ありし事は余輩の常に誇る所なり、補正成は少くとも主義の人なりし、彼は勝敗の赴く所を知りながら義務と責任とを避けざりし、大石内藏之助は主義の人なりし。彼は國法を犯しても彼の人生觀を實行せり、西鄕隆盛は主義の人なりし、彼は國家にまさりて正義を愛したり、然れども明治今日の日本人に至ては彼等は全く蒙古人種の本性を顯はす者と云はざるを得ず。

非科學的考究法

見よ如何にして今日の日本人が宗敎の眞僞を評する乎を、彼等は言ふ基督敎に眞理なきに非ず、然れども是れ國家に害あれば排すべしと、曰く佛敎に迷信多し、然れども國家に利益あれば保存奬勵すべしと、即ち彼等は宗敎問題を決するに於てすら之を治國平天下的即ち政治的に考へて抽象的探理的に究めず、而して是れ凡俗の依り賴む論法なるのみならず、其博士と哲學者とが此非科學的考究法を用ひて恬として耻づる所なきが如し。

宗敎哲學問題に於て然り、況や政治外交問題に於てをや、自由主義採るべし、之に

十露盤的に濟度せんとす

實益あればなり、保守主義擴むべし、之れ國家の實益なればなりと、故に憲法國を以て誇る今日の日本に於て政治家なるものは皆悉く政治屋にして、國家を十露盤的に濟度せんとする者のみ、一人のクローシャス、ホッブスの如きありて、宇宙の眞理に訴へ、恒星の配列に考へ、人性の原則に溯りて自由又は改進又は國權の大義を考究唱道する者なし、故に政黨の軋轢なるものは利益と感情との軋轢にして主義の討議に非ず、大義の爭論に非ず、故に議會の舌戰なるものは概ね黨人の小戰闘にして大義正論の發表に非ず。

一人の雄辯家なし

近來の外交に見よ

新聞記者は余輩に報じて曰ふ「日本の議會に未だ一人の雄辯家なし」と、是れ日本の政治家に大信仰を有する者なきの證に非ずして何ぞ、人、宇宙の大眞理に動く時にのみ雄辯あり、十露盤玉的政治家より天火の洗禮は來らず。

之を近來の日本の外交に於て見よ、同一の實利主義の實行を見ん、何故に朝鮮は救はざる可らざるや、曰く朝鮮の獨立は日本國の利益なればなりと、何故に支那を伐つべきや、曰く充分の勝算あればなりと、彼等は日清戰爭を義戰なりと唱へ、而して余輩の如き馬鹿者ありて彼等の宣言を眞面目に受け、余輩の廻らぬ歐文を綴り「日清戰爭の義」を世界に訴ふるあれば、日本の政治家と新聞記者とは心密かに笑て曰ふ「善哉彼れ正直者よ」と、義戰とは名義なりとは彼等の智者が公言するを憚らざる所なり、故に戰勝て支那に屈辱を加ふるや、東洋の危殆如何程にまで迫れるやを省みる事なく、全國民擧て戰勝會に忙はしく、ビールを傾くる何萬本、牛を屠る何百頭、支那兵を倒すに野猪狩を爲すが如きの念を以てせり、而して戰局を結んで戰捷國の位置に立つや、其主眼とせし隣邦の獨立は措て問はざるが如く、新領土の開墾、新市場の擴張は全國民の注意を奪ひ、偏に戰捷の利益を十二分に收めんとして汲々たり、義戰若し誠に實に義戰たらば何故に國家の存在を犧牲に供しても戰はざる、日本國民若し仁義の民たらば何故に同胞支那人の名譽を重んぜざる、何故に隣邦朝鮮國の誘導に勉めざる、余輩の愁歎は我が國民の眞面目ならざるにあり、彼等が義を信ぜずして義を唱ふるにあり、彼等の隣邦に對する親切は口の先きに止て心より出ざるにあり、彼等の義俠心なるものゝ淺薄なるにあり、或人は肥後人を評して「逃る敵を追ふに妙を得たる武士なり」と

余輩の如き馬鹿者

無數の新聞紙に徴すべし

曰へり、今日の日本人は皆悉く肥後人と化せしにあらざるなき乎！

今日の日本人の眞面目ならざるは其無數の新聞紙を以て徴すべし、新聞紙に自由主義、國權主義、改進主義、革新主義、實業主義あるは鳥に毛色、足輕に旗色あるが如し、而して彼等の或者は政府の失態を駁擊するを以て商賣となし、或者は改進黨巾着切を叫び、或者は自由黨變節を呼ぶ、然れども能く彼等を解剖し見よ、自由黨必しも自由の大義を信ずるに非ず、改進黨必しも改進の秘訣を守るに非ず、國權黨必しも愛國者に非ず、自由黨の變節は彼等の信ずる實益（國家幷に自黨の）より來り、非政府黨の合同一致も又同じく實益より生ず、主義と原理との爭に非ずして實益と之に伴ふ感情の爭なれば彼等を代表する新聞紙は反對黨を駁するを知て其他を知らず、日本人四千萬は其無數の新聞紙に依て政府黨幷に非政府黨の惡口を學ぶに止りて其他を學ばず、政府に過失あらんか、吾人は直に之を知るを得べし、責任派に過失あらん乎「日々」「東京」の類は其摘發に甚だ敏なり、然れども日本人全躰に過失あらん乎、無私公平を以て誇る新聞紙は沈默を守り、英國に「タイムス」あるが如く、罪惡は何處に潛伏するも之に

社會は其花主なればなり

日本今日の新聞記者

自讃ほど見苦しきものはなし

筆鋒を向くるに憚からざるが如きは日本の新聞に於て未だ曾て見ざる所なり。

そは他なし、社會は新聞屋の花主なればなり、伊藤內閣の憤怒を買ふも可なり、然れども輿論大明神の震怒に觸るべからず、新聞紙の實益は社會の讃賞を得るにあり、故に彼等は日本を譽め立て、日本人を盛り立つるを以て本職となす、反對黨を駁する是が爲なり、主義の看板を掲ぐるも亦是が爲なり。

然り今日の日本の新聞記者は昔時の猶太の僞預言者の如し、彼等は淺く民の傷を癒し、平和なきに平和々々と呼ぶものなり、彼等の多くは政治的藪醫者なり、彼等は興奮劑と甘露水とのみを以て國難を治せんとする者なればなり、彼等に信仰なし、勇氣なし、彼等は社會を詰責する能はず、故に社會の敎導者としては一厘の價値なし。

第三、自讃的國民

個人の品性に於て自讃ほど見苦しきものはなし、社會は自讃の人を信ぜず、君子は深く自讃を愼む、自讃は空乏浮虛の結果なり、深淵は躁がず、麒麟は角に肉有て猛き形を顯はさずとかや、自讃は謙遜の正反對なり、謙は默し自讃は饒舌（しゃべ）り、謙は公見を憚

り、自讃は盛に新聞紙に廣告す、自讃の人を認めよ、彼は高慢の人なり、虚榮を好む人なり、僞善者なり、パリサイ人は自讃の人なりし、ニーロ帝も自讃の人なりし、英雄に自讃なし、自讃は小人と惡魔の業なり。

社會に於ても亦然り

個人に於て然り、個人の集合躰たる社會又はinstitutionに於ても亦然り、自讃する商會の廣告を信ずる勿れ、そは彼等は僞物を鬻ぐものなればなり、自讃する學校に學ぶ勿れ、そは健全なる德義心の其中に存ずる事なければなり、自讃する新聞紙を讀む勿れ、そは彼等は虚僞を傳ふるものなればなり、廣告と自讃とに依らずして米國の讀書社會はホートンミフリン商會の出版物に劣作なきを知る、設立以來未だ曾て一回の新聞廣告に賴りし事なきアマスト大學は米國に於ける最も高尚純潔なる學校として認められる、「タイムス」新聞は自讃に依るに非ずして單に正直と勉强とに依て今日の勢力を致せり、今は自讃と廣告の世なり、個人と會社と政治家と新聞記者と博士と商賣人とは皆悉く廣告を利用す、曰く處世の秘訣は先づ第一名を賣るにありと、曰く某は名を賣りて已に財產を作れりと、嗚呼君子國、嗚呼仁義國、廣目屋の繁昌を見よ、廣告料の直上げを見よ、而して余輩に日本君子國の證跡を示せよ。

國家に於て亦然らざらんや

自讃已に個人幷に個人の集合躰に於て非德なり、國家に於て亦然らざらん乎、吾人が常に支那人を賤しむは彼等の國家的自讃の故に非ずや、曰く大清國、曰く中華の民と、吾人は常に彼等の非底蛙的無識を嘲けり、彼等の誇大を笑ふに非ずや、外國人の眼よりすれば支那人の國自慢ほど見苦しきものはなし、背後に豚尾を振りながら君子國を以て自ら氣取る、若し打拳一個を値するものあれば實に此國自慢の豚尾漢ならずや。「支那人に於て然り、日本に於て然らざらん乎、支那人の國自慢にして賤しむべくんば日本人の國自慢にして敬すべきの理あらん乎、國自慢若し愛國心ならば支那人は最も敬ふべき愛國者ならずや、然り余輩は信ず、支那人が國自慢を以て世界の侮慢を招きしが如く日本人も亦同一の理由に由て宇内の信望を失はんとしつゝある事を。

國自慢若し愛國心ならば

否な此に止らず、支那人の國自慢に敬すべき所あり、彼等は自國に於て誇るのみならず外國に於ても彼等の虚榮を張る事を憚からず、支那人は紐育に於ても倫敦に於ても支那人なり、支那人は國民としての虚榮家たるのみならず、一個人として又然り、支

家の前の痩犬

那人の自讃に勇氣あり確信あり。

日本人の國自慢に至ては全く然らず、東京に於ける日本人の國自慢と倫動に於ける彼の國自慢とに大差別あり、東京に於て傲然として日本國の武と文とを讃賞ずる者は必しも伯林紐育に於て同一の讃賞を述べ立つる者に非ず、東京に於て宗教と教育との衝突を述べし愛國的哲學者は歐洲婦人の前に於て日本婦人の缺所を摘發せし者なり、日本の「愛國者」に「家の前の痩犬」的の行爲多きは余輩の屢々目擊せし處なり、愛國若し唱ふ可べくんば何ぞ之を內國同胞人の前に於てせずして外國異邦人の前に於てせざる、余輩の見ん事を欲する者は伯林に於て獨逸文を以て出版されし「宗教と教育の衝突」論なり、曾てビーチャー氏がリベープールに於て爲せしが如き倫動に於ける日本人の英人駁擊演說なり、威張るならば外國に在て外國人の前に威張るべし、日本人の前に日本國を誇る、之をなん若し大和魂と稱するならば大和魂とは如何に卑怯未練なるものぞ。

余輩をして今少しく日本人の國自慢の理由を攻究せしめよ。

日本人の國自慢の理由

勤王自慢も亦訂正を要す

一、日本人は愛國心に富むとの自慢は已に前に述べしが如く拙し、國民の愛國心に訴へて强迫的手段を以て鑄鐵會社を起し、然る後輦轂の下に百萬の同胞を欺きし者も矢張り日本人なりし、國民擧て血と財とを供して隣邦の救濟に從事するに際し、軍夫募集を受負ひ、軍用品の供給に與かりて不義の暴利を掠めしものも矢張り大和民族なりし、外人の勝地買收を憤る「愛國者」あれば無數の大和女郎花は身を赤髯奴に任すあり、士重信義輕末利とのの東海散士の「我所思行」は余輩は橫濱神戶等の貿易場に於て日本人の爲めに高吟するを憚る。

二、日本人は勤王心に厚しとの自慢も亦た訂正を要すべきものならずや、上古の事は措て問はず、藤原氏政權を握りてより以來日本人は實に王室に對して忠良なりし乎、成る程將門を誅するに貞盛ありしに相違なし、清盛の暴逆を挫くに義仲賴朝ありしと云はん、然れども過去八百年間の日本歷史は王朝衰退武臣跋扈の歷史ならずして何ぞや、日本人は北條氏九世の長き如何に王室に侮辱を加へしよ、五百の忠魂が天下の輿論に抗し千早の城に籠りし時は八十萬人の日本人は賊臣高時の命の下に此等孤獨の勤

王家を壓伏せんと試みしに非ずや、楠氏の主從七百騎、七生の冀望を約して陣に臨むや、三十萬の九州人は亂臣足利直義の旗下に隸屬し、義人を湊川の邊に屠りしに非ずや、阿蘇山中に一群の忠士の潛むあれば少貳大友の輩を始めとして九州一圓は亂臣賊士の巢窟と化せしに非ずや、而して下て慶應明治の王政復古の時に際するも、全國民の勤王は征長の失敗、鳥羽伏見の戰捷の後に昉まれり、勤王を以て謗々たる明治維新後の日本人は高山彦九郎をして失望の極自殺せしめ、平野次郎を倒し、僧月照を海に沈めし佐幕黨の嗣子ならずや、湊川に詣し、四條畷に參し、楠公の名を繰り返すを以て宗教的義務の如くに信ずる今日の日本人の多くは楠公を殺せしもの〻子孫なる事を記憶せよ、高山彦九郎を賞し、平野次郎の爲めに石碑を建つる者は伏見の戰爭以前は勤王を口にする事をさへ懼れし者なる事を覺へよ、公平なる歴史的觀察を以て王室に對する日本臣民の去就を照らし見よ、吾人は勤王を謗るを止めて不忠を恥て地に哭す可きに非ずや。

三、我が歴史の萬邦の歴史に秀でゝ卓越なるに至ては余輩は之を悉く日本國民の忠勇

にのみ歸する能はず、日本の歴史は多分は其地理學的天惠の爲めなりと云はざるを得ず、陸半球の圓邊に横たはり、東方は一面の大洋にして外敵の防ぐべきなく、支那とは五百哩の海を隔て相對し、朝鮮半島は我に比敵すべき國民を造るの地に非ず、此天賜の要害地に在て二千年間の獨立は吾人の誇るべき偉業に非ず、歐洲諸強國の間に介し、西班牙に抗し、英吉利と爭ひ、些々たる小邦を北海の邊に定めし和蘭人は彼等の獨立を誇るも可なり、前面に墺の勁敵に當り、背後に露の侵畧に會し、一週年の血戰の後終に敵國に降りし洪牙利人は敗衂の故を以て世界に賤しめられず、亦國民自らも自尊の念を失はずして今は再び昔時の自由と獨立とを恢復せり、日本人は未だ血を以て其自由獨立を爭ひし事なし、元寇を博多に破り(颶風の援助ありしと傳ふ)、遼東に豚尾漢を追ひし外は未だ對抗的に外敵と鋒を交へし事なし、而して日本人挫折の例も亦尠なからず、英、米、蘭三國の爲めに馬關を擊破せられ、英艦に薩南の砲壘を碎かれしが如きは宜しく吾人を清醒すべき實例ならずや、未だ曾て英を卻けし事なく、未だ曾て佛を挫きし事なく、支那に硬にし露に軟なる日本人にして武勇は未だ以て誇るべ

國自慢を止めよ

きに非ず。

故に余輩は言ふ國自慢を止めよと、誇るは實力の消費なり、孱弱の民も謙遜なるが故に勇なる事あり、勇猛の民も尊大の故に怯なる事あり、過る二年間戰捷會を以て醉倒れし日本人は今や實に誠心すべき時に非ずや。

民心の腐敗は其事業に顯はる

其四、國民の罪惡と其建築物

不善を顯明の中になす者は人得て之を誅し、不善を幽暗の中になす者は鬼得て之を誅すとかや、然れども幽暗の不善にして終に顯はれざるは稀なり、民心の腐敗は其事業に於て顯はれ、待合茶屋の謀計は法廷の公判に上る。

シンセリチー

英語にシンセリチー(Sincerity)なる語あり、誠實を意味す、拉典語のSine(無し) Cera(蠟)の二字より成る、誠實とは「蠟の無き」事なり、一單語、能く其内に大教訓を含むあり。

そは羅馬の末世に當て國民の道德は支ふべからざる迄に墮落し、人は愛國を口にするも誠實を信ぜず、宗教は嘲弄され、德義は政治家と新聞記者と商賣人との玩弄物たるに及んで何事もゴマカシの世とはなりにき、而して羅馬政府は未だ其威權を保持しつつありし間に、其軍隊は海の彼邊に大功を奏しつゝありし間に、其詩人は拉典民族の榮光を歌ひつゝありし間に、其政治家は猶も膨脹を畫しつゝありし間に、腐敗は彼等の住する家屋に顯はれ、水道は水を洩らし、タイベーは河岸に溢れ、宮殿は外裝に美なるも基礎に鞏固ならざるに至れり、そは他なし、羅馬の建築技師と大工と左官とは時の社會の腐敗に感染し、築くに目前の利を以てし、建つるに外面の美を以てせり、建築の麁漏となり、石材の麁惡となり、終には白蠟を以て欠損せる大理石を塗藏し以て外觀の美と堅とを裝ふに至れり、此に於てか羅馬の市民は石屋を築かんとするに當て先づ請負大工と特約を結ぶに必ず無蠟の石材を用ふべきを以てするに至れり、是れより蠟なきことは誠實を意味するに至りしと云ふ、Sine cera、蠟の無き事、風雨に堪ゆる材、水力に堪ゆる鐵管、意義何ぞ深奥。

人の建築物を示せよ

人の建築物を示せよ、余輩は彼の人物を定めん、大坂城は大閤秀吉を表し、熊本城は加藤清正なり、國民の建築物を示せよ、余輩は其社會道德を卜せん、星霜七百歲を消

費してコロンの天主堂を建立せし獨逸人の德性や敬嘆敬慕すべきあり、和蘭人の剛氣と耐忍力とは彼等の驚くべき海水堤防に於て現はる、民心強固にして其土木事業は質素にして堅固なり、民心浮薄にして其土木事業は華美にして軟弱なり、兩者の相互的關係は決して謬るべきに非ず。

此定規を以て今日の日本人の道德的程度を測り見よ、其新聞紙は大膨脹を呼ぶに關せず、其愛國者は君子國を唱ふるに關せず、其教育家は西洋禽獸國を敎ふるにも關せず、其近來の建築物と土木事業とは民心の强固と正直と謙退とを示すものなる乎、横濱築港工事は日本は和蘭に優る君子國なる事を證するに足る乎、尾濃震災の結果に照らして明治の日本人は慶長明和の日本人に優る國民として誇り得る乎、洪水毎に洗ひ去らるゝ鐵道工事は鐵道會社其物の不義不德を暴露するものならずや、國民の愛國心に訴へて成りし鑄鐵會社の運命は今日我邦に於て高唱せらるゝ愛國心なる者の怪物の皮を剝きしものにあらずや、某鐵道會社の土方某が己れの築きし隧道は危險を懼れて決して通過せざるとの實談は能く今日の社會道德の眞相を穿ちし適例ならずや、「白く塗りし墓」とは昔時猶太亞に於て僞善者を形容せし語なり、「ペンキを以て白く塗りし家」とは今日の日本人を評するに最も適當なる辭句ならずや、何事も速成を貴び、何事も外觀を貴び、何事も今日を貴ぶ、眞堅を思はず、子孫と未來とを慮からざるは我國今日の土木事業なり。

ペンキを以て白く塗りし家

外交の方針なし

其五、方針の定らざる理由

現政府に確乎たる外交の方針なしとは反對黨の首領より田舍の村會議員に至る迄齊しく唱ふる所なり、而して少しく時事を解する者にして此不平を懷かざる者あらんや、明治政府は內を制するに嚴なり、能く新聞記者の筆を抑へ、能く在野政治家の口を箝し、能く學校教員の良心に制裁を加へ、能く學者の自由攻究(神道に關する)を妨げ、能く外敎を排して本願寺を助け、能く鑄鐵會社を成立たしめ、能く軍夫請負人に利益を供したり、其他內治に關する其事績にして見るに足るべきものは甚だ尠なからず。」然れども其外交政治に於ては一として余輩の讃詞を呈するに足るべきものあるを見ず、其以て天下に誇る所の改正條約なるものは未だ紙の上の成功に止て實行を見る場

合に至らざれば、余輩平民の眼よりすれば未だ之に與かりし外交官の爵位を增進するの要あるを見ず、千島艦の事、朝鮮の事、遼東の事、臺灣の事は皆以て現政府の外交的政策の好適例にして、余輩の如き素人の觀察を以てするも、之をビスマーク、チスレリーの手際とは信ずる能はず。

四千萬顆の頭腦中一として確固たる方針を蓄ふる者なし

政府に外交の方針なし、然らば民間の政治家にして大方針を有する者ある耶、若しありとするも余輩は未だ之を聞かざるなり、無數の新聞紙と三百の代議士と四千萬の「政治家」とは異口同音に政府の外交的方針を聞かん事を欲す、而して之を聽く能はずして慷慨し、政府を責むるに龍頭蛇尾を以てし、優柔不斷を以てす、然して余輩の常に怪んで止まざる事は四千萬顆の頭腦中一として確固たる方針を蓄ふる者なき事是なり、彼等は自己の空乏を政府に向て訴へつゝあるなり、彼等は彼等の常に賤視する彼等の政治家より彼等自身の有せざる大方針を求めつゝあるなり、オ、新聞記者よ、余輩は先づ汝より聞かん事を欲す、如何にして朝鮮を露國の羈絆より救ひ出さん乎を、オ、在野黨の策士よ、余輩に告るに此一島國を以て獨り歐洲の強と堅とに當るの途を以てせよ、何人も方針を求れども之を供する者は一人もあるなし、政府の方針を尋問すれば其男爵博士は答て云ふ、外交は秘密なり答辨の限りに非ずと、新聞記者に迫るに同一の問題を以てすれば彼は答へて曰ふ「吾人は正義を唱ふるも方策を語らず」と、無言と沈默とは今日の日本人總躰が金城鐵壁として頼む最上の隱れ場所ならずや、責任は內閣大臣のみならず今の日本人全躰が忌み避くる所ならずや、責任なしの榮華と權力とは今まの日本人が何人も追求する所ならずや、確固たる方針を表白する事は自己の弱點を敵に向て示す事と信ぜらるゝに非ずや、然り沈默……沈默は今の日本の社會に於ては成功と金儲けの秘訣に非ずや、政府が方針を語らざるは（若し有とするも）今の日本人の常識に則りつゝあるに非ずや……

沈默は最上の隱れ場

……方針の定らざるは國民と其政治家の中に存する道德念の欠乏に源因す、義にまさりて利を愛する者、天理にまさりて國を愛する者に大方針のあるべき筈なし、彼の利慾の人を認めよ、彼は新聞紙の物價表を見て彼の一身の方針を定め、紳士紳商の意嚮を窺

道德念の缺乏に源因す

ふて然る後に彼の方向を定む、彼に聖經を究むるの要なし、彼は永遠の策を講ぜず、彼は谷川の水の如し、抵抗の最も少き所に向て流る、周圍は彼を支配して、彼は周圍を化せず、彼は時の子供にして、境遇の傀儡なり、社會を導く者に非ずして、社會に引摺られつゝ行く者なり。

主義の人は之に異なる

主義の人は之に異なる、彼は教導を良心の壁に求め、古代の人なればとて聖賢の教を輕せず、彼は勘定の人に非ずして信仰の人なり、彼の國家を愛するは正義と人類との爲めなり、彼は海中に孤立する岩石の如し、滿潮と共に進まず、干潮と共に退かず、彼は恒星の示導に頼る船長の如し、海流氣流を利用する事あるも船を流動躰の變幻に任かせず、彼は山を穿つ事あり、彼は大河を潜る事あり、寡婦の涙に動く事あるも衆愚の聲に震へず、彼は時代の產にあらずして時代を作る者なり、彼の人世を通過するは彗星が長尾を率ひて暗空を過るが如し。

利慾の家

利慾の人なり、主義の人なり、利慾の政治家なり、主義の政治家なり、前者は諸强國の意嚮を窺ふて然る後に彼の外交的政策を定む、恰も風と潮流とに船を放任する船長の如し、彼は弱國に對して硬にして强國に對して軟なり、恰かも砂岸を押し流し得るも岩石に當て挫ける谷川の如し、彼は輿論と共に動き、西洋熱の盛なる時は舞蹈會を奬勵し、保守主義の反動に會すれば外教徒を迫害す、彼は恰かも波上に浮ぶ鷗の如し、水と共に動き風と共に飛ぶ、船舶彼の如きに御せられて破碎沈沒の恐れあり、國民彼が如きに導かれて痲痺睡眠を以て終らむ。

佛のリシエリア

佛のリシエリアは彼の類なりし、彼は第一に己れを愛し、己れの爲めにブールボン皇統を愛し、ブールボン皇統の爲めに佛國を愛せり、彼に主義の守るべきなく、方針の依るべきなし、彼は勤王を名として諸侯の兵權を王室に收め、治國を名として自由教徒を壓せり、然れども人心の收攬すべきあれば彼は國母を監禁する事を憚らず、獨逸國に於て自由教徒を援くるに吝ならず、彼は其弱きに乘じて隙を佛國從來の同盟國なる墺國と開き、其强きが故に敵國英國の好意を求めて止まざりき、彼は十八年の長き彼の無方針の政畧を續けたり、彼は一時の榮譽と平和とを以て佛國民を眩惑せり、然れども慘憺たる革命を佛國に供へし者は彼なり、佛國百年の恥辱と流血とを招きし者

主義の政治家は

は彼なり。

主義の政治家は宇宙自然の理に基るて國是を定む、彼は地理に依て天の攝理を察し、歴史に依て國民の天職を考へ、時と所に處するに彼の耳心と信仰とを以てす、彼は國運を恒星の示導に繫ぎ、成否を上帝の聖意に任かす、彼は詩人の大なる者なり、理想を衆生の口に謳ふ、彼は畫伯の秀なる者なり、雄志を地球面上に畫く、彼は正義の爲めに人類全躰の幸福を欲し、人類の爲めに國家を愛し、國家の爲に凡て國家に屬けるものを愛す、故に彼は爭鬪を愼しむも衝突を懼れず、公義を正すに敵の强弱を考へず。

英のコロムウエル

英のオリバー、コロムウエルは此種の政治家なりし、水の大洋を掩ふが知く正義の地上を掩はん事は彼の最大最終の目的なりし、彼は彼の愛する英國を以て上帝の定め玉ひし正義擴張の機關なりと信じたり、故に彼は大膽にも時の最强國なる西班牙に當り、ブレーク、モンテーグの猛將を指揮して其暴虐を挫きたり、彼はサボイ山民の虐殺を憤り、强く大陸の政治に干涉し、佛國をして彼の政府に免を乞はしめたり、彼は北方の弱國瑞典を援け、該國に於ける佛と墺との干涉を卻けたり、僅々五年間に亘る彼の强硬政畧は歐洲大陸を震動せしめたり、公平なる歴史家は曰ふ「コロムウエルは英國に於ける憲法政治の基礎を定め、其大膨脹の端緒を開けり」と、劒に血塗るに憚からず、國家の存在をも犧牲に供せしオリバー、コロムウエルは英國百年の榮光と平和とを來し、地球表面六分の一を英の領土に加ふるの開路者となりぬ。

蘭のオレンジ公

蘭のオレンジ公ウヰリヤムも亦此種の政治家なりし、摩西カルビンの美嚴なる理想を彼の愛する和蘭に實成せん事は彼の雄大なる志望なりし、故に彼は平和の切望者なりしと雖ども國運の强ゆるあれば大責任を彼の双肩に擔ふ事を辭せず、僅々一萬二千方哩の小國を以て時の世界の半を有せし西班牙に叛き、國家を累卵の危きに置て懼れず、百敗に屈せず、千劫に撓まず、終にライン下流沼澤の中に自由と博識の樂園を開きたり、後、雄を海上英國と爭ひ、日本に數倍する領土を東洋に得るに至りし和蘭共和國は此理想的政治家の雄圖に出たり、余輩は曰ふ、蘭の美術家レムブラントの作は其政治家オレンジ公ウヰリヤムの事蹟の絶妙絶美なるに及ばずと。

米のワシントン

政略家にあらず

西郷隆盛

米のワシントンも此種の政治家なりし、彼の理想は自由の佳境を人類の爲めに彼の愛する米國に於て開くにありし、獨のモルトケも此種の政治家なりし（余輩は彼を政治家と呼ぶ）、彼の理想は彼の愛する獨逸に強堅無比の武力を備へて歐洲の干戈を止めんとするにありき、其他チヤタム公なり、グラッドストン氏なり、彼等は皆今日我國に於て稱する政略家にはあらざりしなり、試に彼等の草せし政治論を繙き見よ、牧師の說敎を聞くの感あらん、彼等は詩人なり、理想家なり、彼等は天と自然に訴へて人に聽かず、彼等に大方針大政策ありしは是が爲めなり。

我の西郷隆盛も此種の人なりし、彼の左の一言は如何に巨人的にして如何にコロムウエル的なりしよ、

正道を蹈み、國を以て斃るの精神なくんば外國交際は全かるべからず。

是れ彼の內治外交に皓々雪よりも白き一定不易の方針ありし所以なり、余輩は信ず、彼の政策は今の御利口連の嘲ける所たるに關せず、若し日本にして復興の時機に會するあれば、必ず志士の服膺する所と爲らん事を、彼れ秋風と共に骨を故鄕の山に埋めて以來、日本國は彼の稱せる商賣國とは成りぬ、商賣國は客の足元を見て其商策を定む、朝變暮更は其免がるべからざる所、西鄕の復活を待つに非れば日本國の未來に冀望なし。

恥よ富士山と吉野よ

海東國あり青年國と名く

嗚呼信仰なき國民、嗚呼確信なき國民、嗚呼方針なき國民、嗚呼勇斷なき國民、富士山よ、恥よ、我等は漂流の民と化しぬ、吉野は芳香を放つを止めよ、詩歌と理想は我等を去れり、我等は利益に依て步み、不變の上に冀望を築かず。

其六、東洋の青年國

馬琴は彼の「夢想兵衞」に於て貪婪國少年國等の記事を載せたり、然れども可惜青年國を省きたれば余輩の拙を以て玆に彼の欠を補はんと欲す。

海東國あり青年國と名く、男子生れて二十歲、少しく筆を廻すの技倆に加ふるにエマルソン論集を少しく讀み了れば、彼は新聞記者となりて時事に喙を容るゝを得べし、批評家となりて何れの著述をも評し得べし、或は何々山とか何々川とか地理學的の名稱の下に小說を試みて多少の讀者を得るに難からず、會ふて是と談ずれば眇たる未熟の

一青年、然れども彼を紙上に窺へば中々の老先生なり。

彼れ或は認可法律學校を卒業し、政談演說會に臨んで少しくシセロ、デモセニスの句調を學べば、彼は田舍に歸りて政治家となるを得べし、彼の時事を口にする事は有志家の名稱を彼に附與し、彼はブラックストンを知らずして英吉利法律を唱へ、ベンダムを讀み得ずして頻りに最大幸福を叫ぶ、彼は時事を談じ、夜は宴席に連なり、政治學とは認可學校の三年を以て究め盡せしと信じ、新聞と雜誌を讀むの外は新たに大家の著書を購ふ事をなさず、奔走と稱して貴重の時間を訪問と遊說との中に消費す。

或は宣敎師學校の豫備科を卒業し、馬太傳と羅馬書とを少しく嚙り得ば、彼は憚からずして地方傳道と出掛け、田舍の閒暇人と懶惰書生とを驅り集め、神だとか宇宙だとか、愛だとか救だとか、出鱈目次第吹き散らし、以て傳道師を氣取るあり、而して彼れ漸くにして外國宣敎師の庇蔭を以て神學校を卒り得ば、彼は直に理想的ホームの組織に急はしく、社會改良を唱へ、敎會政治を論じ、未だ牧すべきの信者もなきに牧會の聖職を語り、未だ己れの給料さへも碌々仕拂へざる敎會に向て慈善事業を要求す、

青々然たり、綠々然たり

青年時期は終る

齡未だ二十を越ゆる三四に過ぎざるに彼は眼鏡的青白顏の敎導職となりて社會に現はる。

壯士芝居あり、基督敎徒青年會あり、自由黨青年團あり、青年文學あり、何事も青々、社會は恰かも晩春の野の如し、青々然たり、綠々然たり。

然れども彼等の青年時期は永くは續かざるなり、彼等の老衰するは甚だ速かなり、齡漸く三十を越へ、少しく信用の位置を得れば、彼等の青年時期は終りしなり、彼の書生論に換へて彼の實務論あり、彼の理想に換へて彼の處世秘訣あり、彼は勉學の習慣を忘却し、彼の思想的消化力は新聞紙の社說より固きものに堪ゆる能はざるに至る。」見よ如何に彼等の多くが彼等の學校時代に於て學び得し歐羅巴語を忘れ去りしかを、是れ彼等が智識の泉源に溯りて渴を癒すの慾望を絕ちし所以に非ずして何ぞ、故に此metamorphosis(變形)を經過せし後の彼等は反て青年の敵となり、青年を嫌らひ、青年を卻け、青年と會食するをさへ深く謹慎するに至る、青年國の戲劇は實に如斯面白し。

然れども青年國の華はドコ迄も青年なり、其政治家は之を知るが故に盛に彼等を利用

青年を目的として商賣をなす

す、曰く「諸君は未來の大臣なり」と、國會議員の當撰は青年の力に依らずして望むべからず、政治家の人望とは濁酒とビールとの灌漑に依て得たる壯士青年の評判と稱して可ならむ。

著述家と書店とは亦重もに青年を目的として商賣をなす、小說は必ず小女の彩色畫を挿まざるべからず、是れ青年を目的として出版するものなればなり、青年の嗜好に投ぜざる雜誌は失敗なり、著述は必ず青年の小使錢を標準として其價を定めざるべからず、而して偶々正直眞面目なる著述家ありて、彼の畢生の思考と觀察と實驗とを草して世に公にするあれば、青年文學者は之を評して曰ふ「吾人は如斯好讀物の吾人青年の爲めに供せられしを喜ぶ」と、斯くて著述とは全く青年の爲めにするものと信ぜられ、著者とは青年の幇間の如くに認めらる、余輩は曾て東洋の青年國に於ける批評なるものを詠じて曰く、

青年の幇間

涙もて綴りし文はのぼりけり
懶惰書生の筆のすさみに

學校に於て最も顯る

青年國に於ける青年の勢力は其彼等を教育(?)すると稱する學校に於て最も著しく顯はる、尊長主義とは彼等の口先の廣告に止まり、彼等は實際は生徒尊拜主義を採る者の如し、學校の管理とは生徒の感情を綾釣る事を云ふなり、薫陶とは青年の血氣を煽り立る事を云ふなり、學生の求むる所は半唖半醒の中に學士の稱號を得るにあり、學校の勉むる所は此涅槃的教授法を施さんとするにあり、故に業を授くるに必ず講義を以てせざるべからず、是れ勞を全く教師に移して生徒をして單に受動的たらしめんが爲めなり、生徒は質問反抗の特權を有して、教師に應答辨解の義務あり、生徒は常に攻戰的にして教師は常に守戰的なり、即ち引き出さるゝ者（拉典語の educatio）は教師にして生徒に非ず、青年國の學校に於ける薫陶鍛練の德澤は教師の受くる所にして生徒の受くる所にあらず。

生徒は御客樣

彼等の學校は智識の販賣所にして生徒は其の御客樣なり、嚴格なる課業を強ひ、嚴肅なる學則を施行せんとする學校は閉店の悲運を覺悟せざるべからず、見よ其教授課目の如何に完全にして如何に該博なるかを、教課書は歷史に於てはギゾーの文明史、數

學に於てはスミス、ショペチーの作、物理に於てはガノー、ダニエルスを下るべからず、僅々五年間に亘る尋常中學の課程を經過すれば東西兩洋の學理にして一として究めざるものなきが如し、余輩は知るギゾーの文明史は米國コロムビヤ大學に於ける最終學年の歷史教課書なる事を、然るに東洋の青年國に於てはスウヰントンの譯讀も未だ了らざるに直に此高等史論を繙くを得べし、歷史の事實は彼等の知らんと欲する所にあらず、ギゾーを讀みしとの名義、是れ實に彼等の切望する所なり。

下讀みなしの課業

殊に注意すべきは彼等の授業時間の多きに關せず彼等に閑暇時間の多き事是なり、余輩の米國に於ける經驗に依れば彼國高等普通學校に於る一週十六時間の課業は學生に日曜日を除くの外は殆んど時間の餘裕なからしむ、然れども青年國に於ける一週三十時間の課業も尚ほ多分の安逸を生徒に供し、或は學業の外に月琴尺八の獨聲古を嗜むあり、或は楊弓大弓の妙術を授かるあり、或は茶の湯花カルタに春宵の短きを歎つあり、下讀みなしの課業とは青年國に於ける外は余輩の未だ曾て聞知せざる所なり。

青年の勢力此の如し、學校の御客樣、文學界の主權者、政治界の活動力、青年國の智識界思想界は全く青年の跋扈する所たり、然れども彼等の爲めに固く門戸を鎖さるゝ一界あり、即ち金錢界是れなり、是れ老人の占領に歸して容易に青年の侵入を許さず、東洋の青年國に二種の階級あるのみ、即ち青年なり、老人なり、少年なし、中年なし、男子十二歳にして已に卷煙草を吹かし、三十歳にして早や己に勉學を放棄す、思想界は青年に屬し、金錢界は老人に屬す、一は他を省みず、後者は前者を賤しむ、青年に理想あるは彼は貧乏なるが故なり、彼の財嚢にして少しく滿たされん乎、彼は己に老人界に籍を移すなり、而して少しく彼れ青年の心事を穿ち見れば、彼が理想を唱へ、革新を絶叫するは彼が青年界を脱して老人界に受け納れられんとするの冀望に出るが如し、第一の維新とは元治慶應の青年が旨くも時の老人界を奪ひ取りし事を云ひ、第二の維新とは明治の青年が同一の掠奪を繰り反さんとするにあるが如し、羅馬の歷史は貴族と平民との爭鬪なりしと云ひ、未來の米國史は農民と製造業者との軋轢ならんと云ふ、東洋青年國の歷史は青年と老人との喧嘩にあらざるなき乎。

思想界は青年に屬し金錢界は老人に屬す

嗚呼、欲しき者は老青年と青年らしき青年

嗚呼、欲しき者は老青年ならずや、齡九十歳になんなんとするクラッ

ドストン氏が尙ほ毎朝三時間づゝの希臘古典學の攻究を怠らざるが如きは實に老青年の好標本ならずや、米國ウヰリヤムス大學前敎頭マーク、ホプキンス氏は曰へり「余の理想的學生とは十五分間の長き針頭に視線を集め得る者なり」と、學生とは一心不亂に學問をする者を云ふなり、尺八月琴に注意を奪はるゝ者を云ふに非ず。トマス、カーライル曰く「汝樽を被て二十五歲に至れ」と、哲人ダイオゼニスに倣て默思修養せよとの謂なり、人は語れば失ひ、述れば消る者なり、沈默に優る貯蓄法のあるなし、何故に青年國に浮虛輕薄の人多き乎、彼等は聞くに遲くして饒舌るに早く、蓄ふるに短くして散ずるを急ぎ、內部の富饒にまさりて外形の虛榮を求むればなり。

カーライルの言

青年の跋扈は國家進運の善兆なりと云ふを得ず、昔は豫言者イザヤ猶太國衰退の狀を述べて曰く、

民は互に相虐げ、各人その隣人を虐げ、童子は老たる者に向ひて高ぶらん、

チエルシー哲人も亦曰へり。

革新を唱へ之を指導する者は如何なる人物ぞ、法學生なり、新聞記者なり、熱頭未熟の狂信家なり、或は劇烈なる破產せる絕望家なり、彼等は衆の不平に乘じて彼等を煽り立つ、是れ吾人の注意を惹くべき今の時の現象にあらずや、青年……時には童子……が人世の時事に關して斯の如き勢力を得るに至りし事は未だ曾てあらざるあり、之れSenior(長老)なる語を以てLord(尊者)に應用せし時代に比すれば如何なる變化ぞ。

其七、俗吏論

俗吏或は屬吏に作る、普通判任以下の官吏を指すの語なり、然れども余輩の目的は學術的に博物學的に俗吏の特質を研究せんとするにあれば余輩は此通俗的定義に滿足する能はず。

何者か俗吏と云ふ

何者をか俗吏と云ふ、此の緊要なる問題に答へんとするに當て余輩は先づ其實例を擧ぐるの便と益とを感ず。

余輩の知人に二十年の長き某縣廳に奉職する屬官某あり、余輩は曾て久濶の後彼に會し、彼の健康を祝すると同時に、彼に問ふに彼の斯くも長く彼の位置を保ち得るの秘

訣を知らん事を以てせり、時に彼は口を啓て曰へり、

君知らずや、人は苦味を嫌ふと同時に亦珍味玉食の持長に堪へざる事を、鰻魚に

醤味ありと雖とも誰か三度の食として蒲燒に堪ゆる者あらんや、吾人が米を常食

となして終生倦厭たる事なきは之に特別の珍香佳味の無きが故なり、余の如きも

意志のなき人

亦然り、全廳前の縣廳にあらず、縣知事去り、課長去り、同僚去り、殘るは余一

人なり、君の知る如く余は旨くなし亦不味くもなし、是れ余が持長に堪ゆる理由

なり、

機械と變じし人

と、余輩は彼に聞て始て屬官の眞相を悟り、俗吏の定義は稍や明瞭なるを得たり。

俗吏とは何ぞや、意志のなき人なり、或は意志を使用せざる人なり、或は意志を抑壓

する人なり、余輩は俗吏は獸類なりと曰はず、そは獸に虎あり獅子ありて人類の有す

るが如き撰擇的意志を有せざるも其我慾を貫徹する點に至ては全く俗吏と性質を異に

すればなり、俗吏は人なり、人の機械と變ぜし者なり、人に躰力あり、智能あり、意

志あり、第三者を取り除きて見よ、彼は甘味もなき苦味もなき者となりて亦最も便利

人間ほど便利なる機械あるなし

地理學的配布

なる機械と變ずるなり。

馬は車を曳くに便なり、然れども吾人は令して馬を使役する能はず、馬を馭するは獨

り歩むよりも難し、瀛關車は能く重量列車を運ぶ、然れども彼は無感にして指導に便

ならず、然れども人力車に至りては便の最も便なるものなり、一令の下に市街の屈曲

を走り、乘者は眠りながらにして其目的地に達するを得べし。

天工の中に人間ほど便利なる機械あるなし、故に大政治家が世に出て政治機關を運轉

せんとするに當て、屬吏の制度を定め、萬物の長たる人間を捕へ來り、彼を馴致する

に彼の自由意志の壓抑を以てし、終に彼をして唯々諾々馬車馬の最も便なる者となら

しむるに至りし事は決して怪むに足らざるなり。

俗吏若し人間の機械と化せし者ならば余輩は彼の地理學的配布を探ぐるに當て必しも

下等判任官の區域内に於てのみせざるべし、機械的人物の存する處是れ俗吏の存する

所なり、彼の官等を問はず、彼の爵位を論ぜず、天賦の自由意志を利用せずして、草

の風に靡くが如く、小舟の波に漂ふが如く、周圍と頭上の威力とに全く支配せらるゝ

者あれば、彼は余輩の定義に從て俗吏なり、又俗吏は必しも官海に游泳するを要せず、夫の自由人權を唱道する在野の黨派に於ても、自己の意見を黨議に任かし、或は衆愚の愕々の爲めに其心の志嚮を變ずる者の如きは皆な俗吏として博物學的階級を定むべきものなり、或は定價を約して御味方新聞の社說を請負ふの類、或は佛敎徒を後楯として敎育と宗敎の衝突を叫ぶの哲學者、或は其屬する敎會の爲めに信仰を左右せらるる基督敎の牧師傳道師、是等も亦俗吏の標札を附して社會の博物場裡に陳列すべき者なり。

四千万、多分は是れ俗吏なり

爰に於て讀者は余輩に問て曰はん「若し汝の定義にして眞ならんには日本國民何人か俗吏ならざらん乎」と。

然り、余輩も時には斯く信ぜざるに非ず、或人曾てトマス、カーライルに問ふに英國民に關する彼の判斷を以てせしに、カ氏は之に答へて「二千七百萬、多分は是れ白痴なり」と曰へり、余輩も時には日本國民を評して「四千萬、多分は是れ俗吏なり」と言ふ。ほしき事なきにあらず。

汝も何ぞ其一人たらざる

然れども余輩の觀察は多くの意志を有する人物を日本臣民の中に見るなり、夫の山間僻陬の地に蓬舍を結ぶ農夫を見よ、岩を碎き蕪を排し、荆棘の中に小樂園を造り、仰ぐに日光と膏雨あり、賴るに兩腕の筋肉あり、自然に生命の糧を得て、心に上天の默示に接し、菫花は彼の爲めに笑ひ、野鳥は彼の爲めに吟ず、瀑布斷壁に轟て濁思を壓し、溪水山谷を洗ふて信念淸し、政治を問かず、社說を讀まず、株式に手を出さず、貴族の門に出入せずして獨立生涯を營む者は蜻蜓洲中未だ全く跡を絕たず。

嗚呼讀者よ、汝も何ぞ其一人たらざる、知らずや男子一人の正直なる勞働は八人の家族を養ひ得べしとは普通の計算なる事を、此地球小なりと雖ども五千二百万方哩の地面を有す、是を其人口十五億に分配するも尙ほ一人に付き二十三ヱークル（二萬七千六百坪餘）の容地あるに非ずや、太陽は輝て未だ止まざるなり、春雨秋霖の尙ほ未だ吾人の勞働を援くるあり、吾人若し俗吏たらざらんと欲すれば能ふなり、自由は北海の野に存す、何ぞ行て耕さゞる、海面至る所束縛なし、汝の斷を待つや久し、若し又筆に自活を求めんとする乎、必しも書記生又は新聞屋の丁稚となるの必要はなかるべ

俗吏は必用物なるか

君子の政治に俗吏の必要なし

し、社會の眞意に訴へて見よ、社會は未だ全く誠實を見捨てず、汝の正直なる聲は聞かるゝなり（遲かれ早かれ）、ゴマカシと虚飾とを歇め汝の眞實を語りて見よ、社會は終に汝の直筆の爲めに酬るに至らん。

尙は一つの面白き問題の余輩の爲めに殘るあり、即ち俗吏は社會の必要物なる乎と。」若し然らば自然は特別に意志なき人間を造りしものを、意志を有せざる人とては政治家の之を製造するにあらざれば自然に存在せざるを見れば俗吏の存在は國家生存の爲めに必要にはあらざるが如し。

然り君子の政治に俗吏の必要なし、エリサベス女王、オリバー、コロムウエル、上杉鷹山の如き政治家を見よ、彼等は俗吏の要を感ぜざりき、感ぜざりしのみならず彼等は其下僚に自由と意志とを供したり。自由の念は責任の念に伴ふて來る、故に責任を知るの政治家は必ず自由を重んず、我の天賦の特技を認め、我を信じて我に我の天職を授くる者は我に自由を供する者なり、此時に當て我に妾宅の穿鑿を命ずる者なし、我は人間として指導せらるゝにして幇間として使役さるゝに非ず、如斯政府に於ては何人も總理大臣（彼の責任區域内に於て）なり、余輩は言ふ、余輩の理想的政府は俗吏の存在せざる政府なりと、即ち俗吏の存在し得ざる政府なりと。

日本の小は其面積に於て見ん

地理學上の位置に於て見ん

其八、小なる日本

人は皆齊しく日本の大を稱ふ、余輩は惟り其小を唱へんと欲す。

日本の小は其面積に於て見ん、吾人の稱する大日本なるものは亞細亞の東岸に横たはる十五萬方哩餘の群島より成る、是れ世界の陸面の三百五十分の一にして、疊一疊に對する婦人の絲絡（いとまき）一枚の比例なり、或は日本にして若し菊版大ならん乎、世界は十八疊の坐敷にして其陸面は尙ほ五疊敷の廣さに亘る、英國は世界の六分の一を有して日本の六十倍なり、露國は世界の七分の一を有して日本の五十倍なり、米國合衆國は三百六十萬方哩を有して日本の二十四倍なり、吾人の誇る大日本なる者は米の一州アイダホたるに過ぎず、其テキサスは殆んど二個の日本帝國を容るに足る。

日本の小は其地理學上の位置に於て見ん、陸地の中心は倫敦巴里の間に有り、若し倫敦を以て中心點となし、地球の周圍九十度を以て半徑となし、圓環を地球面上に畫け

耕地の少きに於て見ん

土性の瘦瘠たるに於て見ん

は是を陸水の二半球に分つを得べし、而して日本の位置は陸半球の邊端に在て世界の田舍の位置にあり、日本の如き不便なる位置を保つ者は濠洲と南亞米利加の南端を除けば地球面上他にあるなし。

日本の小は其耕地の少きに於て見ん、耕耘に堪ゆる面積とては其一割五分に過ず、是を佛蘭西の六割一分に比し、英吉利の六割四分に較ぶれば彼我の優劣自から明かなり

ミシシピ河の水盤は日本の七倍に亘る一面の膏田なり、支那の黄土、露西亞の黑壤は共に日本に數倍するの沃壤なり、加奈太に日本に十倍するの豐饒無比の麥畑あり、恒河の兩岸は日本に三倍するの膏腴の地なり、生産的日本は世界の陸面二千分の一に過ぎず、是れ實に小なる蒲萄牙の面積にして其産出力は伊太利の半に及ばず。

日本の小は亦其土性の比較的に瘦瘠たるに於て見ん、其稻莖の矮小なる是を印度柴棍の産に比すれば僅に三分一に過ず、我の麥穗を以て米濠の産を評する者は寸を以て尺を量る者なり、亞米利加の蜀黍畑に叢林の如き觀あり、牛豚其内に沒して是を索る難し、濠木大の印度産の棉花草は矮々たる我の産を恥かしむるに足る、甘蔗は竹林の如きを稱ふなり、我の中國の産の如きは艸莖の稍大なる者たるに過ず、日本にファーム(Farm)なし、日本の田畑は皆悉く菜園たるに過ぎず。

山嶽

日本人は皆悉く富士山を以て誇る、言不得名不知と、勿論其世界の名山の一なるには相違なけれども、是に優る名嶽大山あるを知らざるが如き感を懷くに至ては井蛙的の譏は免れざるべし、見よ布哇は我の四國に及ばざる小邦なるに一萬三千尺以上（富士よりも高き事一千尺）の秀峯二個を有するに非ずや、メキシコのオリザハは一萬七千尺の高きに聳えて火山の最も威嚴ある者と稱せらる、各二萬尺の高きに達して三對の偉觀を呈する南米のコトパキシ、シンボラソ、アンチサナは吾人の想像に上りし事あり、ダージルングよりガウリサンカーを望むにあらざれば大山の何たる乎は知るを得じ、人は彼の崇拜物より大なる能はず、富士よりも高きを望むにあらざれば日本人の志望は知るべきのみ。

日本に大河なし

日本に大河なし、其三大河なる者は黄河楊子江の細支流たるに過ず、坂東太郎何者ぞ、僅かに小舸を浮ぶるに足るのみ、騎して之を渡るを得べし、泳で之を横ぎるを得べし、

港灣の廣狹

松江（スンガリー）の小なるも尚ほ能く滿洲一圓の通路たるを得べし、ラインは大河たらざるも永く大國の防衛として存す、日本人は未だ川を知らず、アマゾンの洋々として東に流るゝ所、ミシシピの混々として海に注ぐ所、是れ木曾に誇り、天龍を讃する者の豫想の外にあり。

國の大小は其有する港灣の廣狹を以て量るべしとは地理學の恒則なり、大國に大港あり、小國に小港あり、上海は支那の廣を示し、紐育は米國の大を證す、横濱の規模の小なるは其小邦の關門なるを表白し、神戸の狹隘なるは其一地方の輸出港なるを露はす、函館は北海の投錨地たるに過ず、長崎は西海の避難所たるのみ、河口を溯る百哩にしてカルカッタは大船を泊するに足る、桑港に世界の艦隊を悉く泊し得るの餘地あり、英吉利は小なれども其倫敦は世界の中心市場たり、白耳義の小なるも其アントウエルプは今や大陸の關門たらんとす、香港桑港に檣林の壯觀を見て横濱に寂寞たる埠頭に接する日本人の心さびしさよ。

小なる日本國、小なる日本人、彼の躰格は蝦夷土人の躰格にも及ばず、支那人の鈍愚なるも其筋骨は吾人の羨むべきあり、北英山民の側に立たしめば日本人は侏儒（ピグミー）なり、

悲歎すべき

コサック兵に鐵筋石骨の如きあり。

矮少なる必しも悲しむに足らず、ナポレオンは偉漢にあらず、而も彼の志望は寰宇を呑めり、小國なる必しも歎ずるに足らず、我の北海道大なる希臘は最大文明を世界に供せり、悲歎は思想の狹隘なるにあり、慾望の拘制せらるゝにあり、理想の低きにあり、目的の卑しきにあり。

余輩の觀を以てすれば太閤秀吉を除くの外に日本國に抱世界的の英雄なし、征服すべき邦土の盡きし故を以て流涕せし歴山王の如き、歐亞各半を斫り從へて尚ほ不滿を訴へしチモールの如きは日本人中未だ曾て其類を見ず、日本人の最大志望は東洋の盟主たらんと欲するにあり、未だ馬を恒河に飲まし、旗を比麻拉亞嶺頭に建てんとするの圖謀を懷きし者なし、朔んや亞を呑み歐を併するの大斗に於てをや、日本人の天下とは絶東一連鎖の島嶼を稱ふに過ず、是に羈たるを得ば心願此に盡き、小心翼々とか稱して蝸牛殼大の邦土内に踞まり、瑣細の情實に搦まれるを以て志士の本分を盡せし如

日本の美術に偉大なる事なし

く信ず。

政治家然り、美術家と文學者とも亦此島國的根性を去る能はず、日本に特種の美術ありと言はん、其極美と絶妙とは世界の賞讃を博するに足るとせん、然れども日本の美術に偉大なる事なし、能く桃殼に猫や狸を刻み得るも、能く大理石を鐫りて「摩西」「ローレンゾ」を彫み出すの富想なし、畫けば花下の美人なり、山端の明月なり、皇天怒て霹靂山嶽を擊つの狀は彼等の撰ぶ畫題にあらず。

日本の詩歌は彼等の有する自然にも及ばず、其富士山を詠ぜしものを見るに庭園の築山として是を詠ぜしものに過ずして、其威嚴と畏敬とは彼等の詩感に觸れしことなきが如し、八景を石山の秋月に求めて、美を淡海の怒濤に探らず、須磨明石の小景は萬句を呼んで、鳴戸に詩神の聲を聞かず、其淺間と霧島とは惰夫の痴情を動かすに止て、阿蘇に地中の鍊火を窺はず、優柔ならざれば悲憤、東山の軟花と志賀の漣、自然を皮相に解して其心髓に入らず。

美術的に小なり、詩歌的に小なり、倫理的に宗教的に小ならざるを得んや。

彼等は日本的倫理を稱ふ、如何なる背理ぞ、世に英國的數理なるものありや、佛國的究理なるものあるを聞かず、宇宙の理なればこそ是を理と稱ふなれ、理に翳すに日本なる形容詞を以てす、此事已に狹を示し小を表はす。

モハメットの妄誕なるも彼の宗義を以て萬邦の服膺すべき教理なりとし、是を世界の民に課するを以て彼の天職なりと信ぜしに非や、彼は說くに亞拉比亞的倫理を以てせず、宇内を亞拉比亞化せん事は彼の圖謀にあらざりしや明なり、彼は上帝の最上最終の豫言者として世に出たり、宜なり彼の領土は一時は文明世界の半に亘り、今尙ほ二億の生靈は西は大西洋の沿岸より東は直隷灣頭迄彼の教徒として算せらるゝや。

所謂日本的倫理なる者は世に稱する西洋倫理なる者に對する反抗主義たるに止まれば、其効果たる全く消極的なり、其敵愾心となりて國民を刺擊するや、支那兵を滿州の野に破り得しも、仁慈の情となりて隣邦の獨立を扶植するに適せず、慷と慨とを學生に傳へて謙と遜とを養ふ難し、外敎を排するに力ありて佛敎の腐敗を防止するに足らず。

一人の大慈善家を見ず

日本に富豪尠からず、而も一人の大慈善家を見ず、一人のスチーブン、ラードの如きありて巨資を孤兒の教育に投ぜし者あるを聞かず、一人のジョンス、ホップキンスありて獨力大學を設けし者あるを知らず、一人のリビングストンありて異邦の民の爲めに鞠躬盡瘁せし者あるを見ず、一人のジョン、ハワードありて監獄改良に從事せし者あるを耳にせず、二百萬の人口を有する東京の大都市に於て幾干の慈善事業は行はれつゝありや、盲啞院は官立の者唯一個あるのみ、慈善癲狂院あるなし、養老院あるなし、白痴院あるなし、産科院あるなし、余輩は都城に抵る毎に、其兵營の巍々たるを見て、其官廳の峩々たるに接して、其貴紳の壯屋を眺めて、是に比對する博愛的事業の欠乏を意ふて未だ曾て嘆息せざるはなし。

年々五千萬圓の巨額を其慈善事業の爲に消費する倫敦は禽獸國の首府なりと云ふを得ず、該事業の完成を以て世界に名高き米國のヒラデルヒヤは特別に米國的倫理を以て誇らず、然るに仁義國を以て騒々たる日本にして其博愛事業に一として見るに足るべき者なし、仁、誠に仁なる乎、或は廣告的の仁なる乎。

小なる倫理小なる宗教

眞理は國家より大なり

小なる倫理、小なる宗教。

迷信にあらざれば冷淡、導くに政略的牧師僧侶あれば、從ふに妄信的信徒あり、其神學者と教導師とは信仰の功力を讃し、是を衆人に勸むる事あるも自身は信仰だも信ずる能はず、宗教を以て僅に社會改良の具なりと信じ、治國平天下の機關なりと惟ふ、故に宗教の繁盛とは俗世界の贊同を意味し、政治家の奬勵を云ふに過ず、宇宙的の性を有すべき宗教を國家的範圍内に壓縮し、終に宗教をして宗教の用を全くなさしめざるに至る、彼等の海外傳道なる者の成功せざるは是が爲めなり、深沈防壓すべからざる人類的同情より來りし者に非ずして、或は政治家の策略を助けんが爲め、或は國家的虛榮を張らんが爲めにする者多ければなり、日本的倫理なし、日本的宗教あるべからず、眞理は國家より大なり、眞理に順服せずして眞理を利用する者は終に眞理の捨見となる、日本人は宗教を利用する事を勉めて是に歸服する事を卑しむ、彼等の宗教的觀念に貧乏するは全く是が爲めなり。

誇るべきは何物か

東山の美妓を以てか東海の八方美人を以てか

叙し來り叙し去れば日本の誇るべき者は何物か、吾人の有するものにして世界の有せざるものあるなく、吾人の有せざる者にして世界の有する者多し、日本は猶太印度の如く大宗教を世界に供せず、日本は希臘の如く大文學を有せず、日本は羅馬の如き大法典を編みし事なし、日本は西班牙の如き大探見家を生まず、日本は和蘭の如く人權自由の爲めに戰はず、日本は白露（ペルー）の如き高山を有せず、日本に露西亞の如き大平原なし、嗚呼吾人は何を以てか誇らむ、東山の美妓を以てか、東海の八方美人を以てか。

* * * * * * * * * * * * * * * * * * * *

這裡赤心元可重　由來藍面亦何憎

（村上佛山の西瓜に題する句）

米國行の目的

國詩一首を餞せらる

流寳錄（一）

白痴の教育

去る明治十七年の秋、余は奇異なる目的を以て米國に赴けり、そは他なし、余は不幸にして早くより基督教を信じ、實行的慈善事業に顯はるゝ基督教の結果を其本國に於て見んことを欲したりしなり。

余の費府に至りしや、慈善事業を目的とする余の囊中僅に四週日の糧を餘すのみ、宗教の名を以ては食物を求めざるべしとの余の決心は余をして四週日後の食を得るの道を知らしめざりき、況んや余の目的とする視察事業に於てをや、青年の爲す所概ね如斯くならざるはなし、其目的の高尚勇壯なる、其思慮の淺薄なる、余は家鄕三千里を去て後に始めて余の無謀に驚きたりき。

然れども余は失望せざりき、余の親父は余を横濱の埠頭に送りて左の國詩一首を余に餞したり、

聞しのみまだ見ぬ國に神しあれば
行よ我子よなに懼るべき

余は余の守護として此一首を身より離さゞりき、余は何處にか暗夜に道の開かるゝを知れり。

費府を去る事西南十二哩にしてミヂヤの一市あり、デレウェヤ郡衙のある處、綠蔭の裡、小邱の上に立てる一市街なり、此處に余の知友の知友ありと聞き余は大膽にも彼處に赴けり、彼は尠からざる親切を以て漂泊の一外人を待遇せり、余は一夜々彼の家の四階樓上、雜貨の堆積せる內に過せり、明日の配慮は明日に讓り、余は萬里の旅の疲勞に依つて平安なる一夜を彼の屋下に過ごしたり。

翌朝東天を望むに一窪地を經て彼方に石造の大厦巍々として羅列するあり、病院か、學校か、或は天主教の寺院ならんかは知らざれども、何れにしろ一見舞を與ふるの價値あるものと信ぜり、余は知らざりし此建築物こそ余に海外在留四年間の保護を與へ、爾來十年一日の如く彼が死に至る迄余の親友辯護者たるべき人を宿せし所なれとは。」

此建築物こそ

カーリン氏

朝飯後余は友人と共に對谷の大厦を訪へり、是なん即ちペンシルバニヤ州の州立にかかる白痴院にして其院長ドクトル、カーリン氏なるものこそ神經病學專門家として、病院組織の先導者として米國刀圭社會に錚々の名ありし人なりけれ。

余の彼を訪ひしや初冬寒未だ嚴ならざるも薄雪已に近郊を覆ふの時なりき、院長は執務中の故を以て余に乞ふに暫時應接間に於て彼を待たんとを以てせり、然れども彼は緩々余と共に談ぜん事を欲すれば余の友人は先づ余を遺して去るべき事を傳へたり、余の友人は去りぬ、余は獨り廣間に遺されぬ、事の如何に成り行かん乎、余は配慮して止まざりき。

暫くして踏音高く應接間に人の近づくを聞けり、戶を開いて入り來りし人を見れば五十歲前後と覺しき一紳士にして唇邊に溢るゝばかりの愛嬌を含み、余に近づき握手して余の能く彼を訪問せしを語り、然る後余の手を取りて南窓の下に橫はりし長椅子の上に導き、彼も直に余の左に座し、右手を伸して余の肩を抱き、然る後余に語りて曰く、

君は何の目的を以て我國に來りしや

と、余は涙ながらに告ぐるに實を以てせり、彼は余の面を見詰ながら不完全なる英語を以て語れる余の來歷を聞けり、而して曰く、

君今別に居るべきの家なからん、クリスマス祭已に近きにあり、君先づ一週間余と共に居れよ、君の荷物は直に馬車を遣して取寄すべし、君は此處に居て可なりと、余は彼の親切に奪はれたり、余は「イエース」の語より外に彼に返すの語なかりき。

余は彼の親切に奪はれたり

茲に於て余は彼の客となりたり、余は直に鍵一箇を授けられたり、そは院則として人猥りに院内を彷徨するを許さず、役員に限り鍵を持するを得るなり、而して新客の余に此特權を附與せられしは其内に或る意味の含有せらるゝ事と覺へたり。

日本よりの珍客

夕飯の席に院長余に語て曰く「曾て貴國の敎育視察官田中不二麿氏當館を訪はれたり、其時本院の寫眞一枚を呈したりき」と、以て頗りに同情を我邦の敎育に表せり、食終て彼は余を就眠前の「讃美會」に導びき行き、入院者四百餘名の前にて日本より珍客ある

を告げ、行儀を正して外賓を迎へん事を以てせり、是れ實に一貧生の受くべからざるの待遇、余は夢の如きの感ありて惟心に耻づるのみなりき、斯くして余は數日彼と共に留まりき、余はクリスマスの饗筵に與かりたり、余は略ぼ院規を悟るを得、已に余の目的の一部を遂げしを歡べり、院長一日余を事務室に擁し、問ふて曰く

君は本館の雇人たるの意なきや、君は云ふ君は曾て日本政府の役員なりしと、然れども君の目的の如く君若し慈善事業を學ばんと欲せば先づ最下等の位置より始むるの覺悟なかるべからず、君は此位置に下るの謙遜を有するや

と、余は答へて曰へり、

是れ余の最も欲する所、下賤の業を採るに於ては余の豫め期せし所なり、閣下にして余を使役せらるゝの意あらば余の幸福之に勝るなし

意志の存する處には途あり

と、依て即時に余はペンシルベニヤ州白痴院の雇人となれり、意志の存する處には途あり、余をして爰に至らしめしもの、嗚呼之を天とや稱はん、神とや稱はん。

慈善院の組織

余は爰に慈善院(Institution)組織の一斑を述べざるべからず。

院政は商議員會(Board of Trustees)の手に在り、是れ全責任を有する一團躰にして州中(殊に費府近傍)の有力者にして慈善事業の熱心家を以て組織せらる、有名なる慈善家ドクトル、エルウヰンの如き、富豪サムエル、コローザルの如き、日本最負を以て有名なりしウヰスター、モリス氏の如きは過去三十年間名を委員簿より絶ちし事なし、以て人民共同事業なる此慈善院の基礎堅固なるを知るを得べし。

院長

如斯獨裁者ありとは

院長は商議員會の指名する所、彼は直に此團躰に對し責任を有す、彼は院務全躰の總理にして院内に於ける無限の權力は彼の掌中にあり、彼は實に院内の船長なり、自由を以て世界に誇稱する米國に於て如斯獨裁者ありとは余輩東洋人の推測し能はざる所なり、彼は院内雇人百有餘名の進退黜陟を自由にし得べし、彼は豫算の許す限りは院領一千エークルの地面を如何に變更するも可なり、院内一千有餘名の生命は實に彼の手中に在りと稱するも不可なきなり。

院母

院長に次で勢力あるものを院母なりとす、彼女は女子部の總理にして全院の母なり、彼女の權内に宏大なる洗濯室あり、裁縫室あり、衣類、靴、帽は悉く彼女の檢閲を經ざるべからず、彼女の意に逆ふは危險なり、院長彼自身も時には彼女の譴責を蒙ることあればなり。

助手

院長の下に助手(醫士)二名あり、院務を分擔す、未來の院長多くは此助手より成る、故に薄給にして事務多端なるも忍んで十數年間を此卑賤なる位置に過すもの多し、現任院長ドクトル、バー氏は余の在院の時は下役の一醫員なりしなり。

アッテンダント

會計、書記、敎員等役員の最多數は婦人なり、惟り「クラーク」(番頭)のみ男子にして重に食糧品の調達に從事す。

以上を稱して役員となす、彼等に特種の待遇あり、膳部を異にし、各自房室を給せらる、以下を總稱して「アッテンダント」と云ふ、普通病院の看病人の如きもの、監獄署の押丁と彷彿たり、彼等の職は直接に入院者に接するにあり、衣食の世話、寢室の氣付け、患者の頭巔より趾尾に至る迄に注意す、故に普通敎育を有するものにして此職にあるものは稀なり、多くは愛蘭人にして正直一方を除きては他に取るべきなきもの

白痴とは

の從事する所たるを見たり、看護人大凡七十名あり、入院者十名に付き一名の割合なり。

以上は病院組織なり、然れども白痴其物が余の讀者最多數の解せざる所ならんと信ず、白痴とは吾人の通常「馬鹿」と稱するもの、歐洲に於ける古來の定則に依れば單數二十以上を算へ得ざるものを以て白痴となすと云へり、然れども是れ必ずしも然るにあらず、勿論數理的觀念の欠乏は白痴の最大特徴なるに相違なし、最下等の者の中に四より以上を算へ得ざるもの多し、其最上等と稱する者の中に簡易なる分數を解し得るものあり、三桁以上の除算は餘程困難なるが如し。

佛國有名の白痴病專門家なる故エドワード、セグウヰン氏は白痴病の原因を以て神經機能發育の阻碍に在りとせり、而して其阻碍たるや或は內部よりするあり或は外部よりするあり、或は聽、視、觸等の特別感能に止まる事あり、或は神經組織全躰に及び全身の不能を生ずる事あり、故に白痴病なるものは其區域を定むる事甚だ難し、ユークリッドの第一書を自明理として解せしアイザック、ニュートンより見れば吾人普通人間も白痴患者の內に算入せられしやも計るべからず、普通智能を有せざる人……生來の愚人……人間の廢物……是れ白痴なり。

今入院者二三の狀を記さんに、

クラーレンス

一はクラーレンス某なり、啞なり、年十六にして其智覺は五歲の小兒に及ばず、彼の感覺は甚だ鈍なり、唯一感能の銳敏傍人を驚かすあり、則ち彼の食慾なり、腹滿ちて彼の顏貌常に喜樂あり、飯鐘響き渡りて人の食堂に向ふを見るや痴鈍なる彼に敏捷制すべからざるあり、彼は眞正の製糞機械たるに過ぎず、彼を制するの道單に彼の食を減ずるにあるのみ。

ヲスカー

二はヲスカー某なり、啞なり、年十八九にして身の丈け十年未滿の小兒と見ゆ、彼の食慾はクラーレンスの及ぶ所にあらず、彼の食机に對するや先づ兩手を以て自己の部分を喰ひ盡し、少しも之を咀嚼せずして呑下す、胃腑滿つれば之を嘔吐し、嘔吐して後直に隣人の食に及ぶ、其猛烈なる眼光は余輩看護人をして戰慄せしむるに足る、然れども彼は全く愚ならず、彼に一の道樂あり、即ち女の衣服より留め針を盜み來りて

ハリー

手の甲を刺し以て出血するを見て樂しむにあり、故に彼の看護人は常に目を注で彼の留め針を得ざらん事を勉む、然れども毎夜靴を脱して床に就かしめんとするに際し彼の靴下を檢するに四五本の留針のあらざるはなし、余は數回彼が留針を得るの術を傍觀せり、彼は看護人の目を盜み白痴の女子にして最も軟弱なるものを目掛け、徐かに背後に至り、急に彼女の襟元を攫み、直ちに其胸間の留め針を奪ふなり、其手際の迅速なる、被害者の聲を擧げて援を乞ふ時は獲物は已に小强盜の掌中にあり、彼は院中の魔鬼なりき、彼が食物澁滯の爲め終に死に至りしや、余輩は攝理が早く彼の苦痛を去り又彼の同胞を累はさゞるに至りしを感謝したりき。

三はハリー某なり、可愛の一少年、彼を知らざるものは彼を以て白痴と認むるものなし、彼の數學は分數の雜題を解するを得べし、彼亦音曲の技に富み、能く群童を導くの才あり、然れども彼は白痴なりし、彼は普通道德を解するの力を有せざりき、即ち盜む事を以て惡事と信ずるを得ざりき、盜む事は罰を彼の身に來すを知るが故に看護人の目前に於ては盜まざりき、然れども人目の達せざる所に於て一物の盜むべきあれ

ルーシー　アンニー

ば彼は盜までは止まざりき、彼の病は盜むにあり、彼は其惡事なるを解する能はず、彼は反つて盜むを以て惡事と見做す普通人間を疑ふて止まざりき。

四はアンニー某なり、十三四の可憐弱思の一少女、其無害なる一も院内に止め置くの必要なきが如し、只見る時々人に面して彼女の心情を語るに際し、此世の罪惡に沈淪し人類が上帝に捨てられしを以てし、只未來の救濟あるのみを歎ずるを聞くに及んでは、彼女自身が人類墮落の實證なるを以て聞くものをして坐ろに衣を霑さしむ。

五はルーシー某なり、十六七歳肥滿の女子、其面相は般若の化身と稱するを以て最も適當ならん、彼女の兩眼は釣り上りて西洋の畫工の手に成りし日本人の眼の如し、彼女の口は裂けて耳より耳に至り、其稀薄淡色の毛髮は中央より別れて左右に垂る、殊に彼女の全躰より一種異樣の臭氣の發するあり（余は日本の味噌の腐敗する臭氣なりと覺えたり、白痴患者に此臭氣を發するもの甚だ多し）、彼女の氣質に亦忍ぶべからざるものあり、彼女の心緒一たび亂るれば三人の看護人は彼女を制する能はず、其罵詈の聲は全院に響き渡り、其醜狀は見るものに嘔吐の感を起さしむ、世に醜婦てふも

のあれば彼女は是なり、然れども「ルーシー」全く不生產的にあらず、彼女の氣分定かなる時は彼女は洗濯室に於ける有用なる助手なり、彼女亦た愛嬌なきにあらず、余は偶々新英洲より歸る、「ルーシー」は余を記憶せり、彼女は余を洗濯室の階下に擁して曰ふ「內村君よ余は君を懷ふ久し、余は君に向て數回の書狀を發せしと思ふ、君何故に余に返辭を賜はざりしや」と、余は曰ふ「ルーシーよ、余の不注意を免せよ、余は以來は汝の厚意を酬ゆる事を怠らざるべし」と、「ルーシー」得々然たり、抱腹絕倒の內亦た無量の涙なき能はず。

是れ入院患者三四の例に過ぎず、如斯きもの七百、一大家族となりて一院四棟の內に集まる、其日常の景況想ふべし、無限の悲嘆、無限の滑稽、院內亦一種異樣の快樂なきにあらず。

* * * * * *

白痴院の目的

白痴院の目的は三なり

一、是等神經機能發育の防阻せられし者を取り、特種の方法を以て此防阻を排除し、

二、是等人類中の廢棄物を看守し、一方には無情社會の嘲弄より保護し、他方には男女兩性を相互より遮斷して彼等の缺點をして後世に傳へざらしむるにあり。

三、是等社會の妨害物を一所に蒐め、一方には社會を其煩累より免がれしめ、他方には適宜の訓導の下に彼等をして其資給の一部を補はしむるにあり。

余は先づ看護人として本院に雇ひ入れられたり、余の職務は白痴二十二名を預かり、之に衣食寢浴の世話を與ふるにありき、而して余が白痴教育の原理に達せんが爲めに院長は余をして獨逸婦人某の助手たらしめ、彼女と共に最下級生（即ち單數四個以上を算へ得ざるもの）四十餘名を分配して教授なさしめたり、余は明治十八年一月一日より此聖職に就けり、而して爾來三ヶ月間は余の未だ嘗て味はざる生涯の苦戰なりき。

余は先づ教授上の實驗より談ずべし、教授の課目は大凡左の如し、

一、行狀—重に靜肅なるを敎ふ、そは彼等は五分間と同時に平靖なるを得ざればな

り、彼等をして十五分間手を組みて靜肅ならしむるの敎師は熟練のものと云はざるを得ず。

二、色分け—青黃赤白黑の別を知らしむるにあり、白と黑とは容易に別つを得べし、然れども青と黑とは稍や難きが如し、紫と青との如き、黃と橙色との如きは最も難題なり、之を敎ふるに色鈕を以てす、彼等をして同色のものを一糸に繫がしむ。

三、算數なり—最下等のものは四を超ゆる能はず、最上等のものは阻滯なしに二千迄算へ得るものあり、書物を取りて其四隅あるを知らしめ、男女を兩別して互に其數を算へしむ、一時間を消費して先づ滯りなく十を算へしめたりと思ひ、尙ほ一時間を經て彼等を試むれば、八を五の前に置くあり、六を九の後に言ふあり、然れども疑惑は起すべからず、復た再び試みんのみ。

四、指先の鍛練なり—釘を平板に穿ちたる穴に差し込ましむ、女子部に於ては針の穴に糸を通すの法を敎ふるを以て專とす。

其他概ね如斯、其氣長の仕事たる察すべし、余の受持の級中余の特別の注意を惹きしもの二人ありき、一は前述のオスカー某なる留針狂貪食漢なり、他はハリー某なる猿猴的小兒なりき、余は非常のインテレストを以て此兒を研究せり、そは彼は猿が進化して人間となりしものにあらずして人間が退化して猿となりたるものなればなり、彼の面貌の猿猴的なるは一目瞭然たり、然れども彼の行爲に於ては尙ほ一層其然るを見たり、其床に就くや前方に身を鞠め、床衣を背部に纏ふを勉めて腹部に意を留めざるは慥かに猿猴的なり、彼の物を食するや先づ之を手にし、八方より之を眺め、然る後一意を之に注射して食するの狀も猿猴的なり、而して彼の擬似的傾向に至りては彼の全く猿猴族の親類たるを證するに足れり。

余は一日彼を試みんために余をして全く彼の自由に任したり、而して彼が如何にして余を處する乎を見たり、彼は先づ余の頭を撫でて頻りに余の靜肅にして彼の意に順ふを讃め立てたり、(余が常に彼に向て爲すの狀なり)、然る後に余を引立てたり、余は彼の命ずる儘に行けり、彼は余を伴ひて敎場の附屬室にして一日一回小兒に分與すべき

看護の職は容易の業に非ざりき

パン菓子の貯へある所に連れ行けり、彼は余に命じて曰へり「汝夫の箱を取り卸ろせ」と、余は彼の命に從へり、彼は亦た大に余の從順を讃め立てたり、曰く「ユー、グー、ボイ」と、彼は夥多の菓子を彼の兩衣囊の中に取込みたり、而して余に向て曰く「汝に此一個を給す、温順しくあれ」と、余は默して彼の爲さんとする所に注意せり、彼は面を余より反け、不知眞似して囊中の菓子を取出し將に一々之を平らげんとせり、時に余は聲を厲まして曰く「ハリーよ汝は盜賊なり、汝は之を食すべからず」と、彼は朱色を面に張らして發怒せり、恰かも淺草の奥山に於ける猿に與へんとする菓物を轉じて與へざりし時の狀に少しも異なる事なし、余は試驗を終りたり、怒れるハリーは沫を吹きながら彼の席に歸れり、而して彼の不氣嫌は終日に渉りたり。

* * *

余の看護的職務は授業的職務の如く學術的趣味を有せざりき、二十餘の自己を顧みざる人間を取扱ふは決して容易の業にあらず、彼等は朝夕口を嗽ぐの要と快とを知らず（彼等大概十五歲以上なり）、故に傍に付き纏ひて一々口中を檢査せざるを得ず、彼等は糞尿を床中に遺すも若し他人の注意を加ふるにあらざれば何日たりとも之に安ずるものなり、故に毎朝嚴しく彼等の寐臺を檢めざるべからず、彼等は無理に浴中に投ぜらるゝにあらざれば何年間なりとも自己の垢に安ずるものなり、故に彼等を浴中に押し込み、刷子（ブラッシュ）もて彼等を擦らざるべからず、而して無責任なる彼等にして看護人の不注意より疾病に罹るものありとせんか、其責は皆吾人の頭上に來りて彼等に到らず、

眞正の耐忍を要す

朝夕房内の寒暖を調和せざるべからず、空氣の流通に注意せざるべからず、蚤虱の征伐に從事せざるべからず、看護人は彼等の奴隷なり、彼等若し普通の病者にして身躰不自由の爲に病床にあるものならんか、吾人は能く彼等の爲に忍ぶを得ん、然れども彼等は强壯なる一人前の人間なり、彼等の病は只に責任を知らざるにあり、於是てか眞正の耐忍は要せらるゝなり、於是か論理的の德義も宗教も無用に歸するなり、此場合に於て益を得しものは彼等にあらずして余自身なりき。

院則として院長の許可なくして笞杖的譴責を入院者に加ふるを得ず、故に如何に無禮を加へらるゝも、靴もて蹴らるゝも、唾吐かるゝも、余は小羊の如くに忍ばざるを得

道德的感化力

白痴看護事業の希望

戰爭は最始の三ヶ月

ず、責任を知らざるものを感化するに道德的感化力を以てせざるべからず、殆んど無理相談と稱して可なり、然りと雖も道德的感化力は彼等に於けるも最大勢力なり、而して院則の此に出しものは確實なる經驗に基きしものなり、戸府の瘋癲院長故キルクブライト氏は彼の患者に接するに常に君子の禮を以てし、瘋癲者なるの故を以て彼等に對し虛言を吐きし事なく、亦た彼の配下に立つ役員雇人等に至る迄皆悉く此規を固く守らしめたりと云ふ、白痴亦た然り、彼等の無智なるは彼等をして親切に對し無感覺ならしめざるなり、吾人一度彼等の依り賴む所とならん乎、彼等に優りて愛すべきものは余は未だ他に知らざるなり、是れ白痴看護事業に於て希望の存する處なり。

然れども彼等は容易に昵まざるなり、此故を以て本院の雇員にして三ヶ月以内に解雇を願ひ出づるもの多し、そは彼等は未だ其苦のみを知て其快樂を知るに至らざればなり、然れども三ヶ月以上を經て一たび白痴に愛せらるゝの快を知るに至らん乎、彼等は永く留まらん事を願ひて止まず、役員にして二十五年を院内に過ごせしもの尠なからず、看護人にして十年以上のもの亦た多し、戰爭は最始の三ヶ月にあり、是れ白痴

一個の大和男子

或日曜日の事

ダニーの不順

教育事業の皮切りなり。

讀者よ、一個の大和男子、殊に生來餘り外國人と快からざる日本青年が直に化して米國白痴院看護人と爲りしを想像せよ、彼は朝夕是等下劣の米國人の糞尿の世話迄命ぜられたりと察せよ、彼は舌も碌々廻らざる彼國社會の廢棄物に「ヨャップ」を以て呼ばれしと知れ、而して彼は院則に依りて、軟弱なる同胞に對する義務に依て、彼の宗教其物に依て、抵抗を全く禁止されしを想ひ見よ、余は自身も白痴にあらざる乎を疑ひたり、余は狂氣せしが故に醉興にも如此き業を選みしかと疑へり。

一日日曜日なりき、余の當直日曜にして三十餘名の最も御し難き白痴は終日看護の爲に余に托せられたり、余は手を換へ品を替へて此困難なる一日を消費せんと勉めたり、白痴を御するは羊群を導くが如し、全群列を正して歩を進むる時は一の難事あるなし、然れども一頭迷ひて規道を失はん乎、全群の混雜名狀すべからざるに至る、此日一見ありダニーと稱す、其不敬不順延ひて全級に及ぼし、終日錯亂を極めて已みぬ、余の憤慨亦た常の如きにあらず、余は窃に彼を近郊の林中に引出し人知れずして鞭杖を彼

基督信徒の本性に立返れり

斷食して責を引く

に加へんと思へり、然れど日は安息日なり、怒るべきの日にあらず、依て余は基督信徒の本性に立返れり、余は其日の混雜の責を余の身に引受け一回の斷食を行ふに決せり、依て全級に告げて曰く、

今日のダニーの行狀は嚴罰を加ふるに價値す、然れども此日安息日に當り余は彼を罰するに忍びず、故に余は彼の爲に今夕の食を斷ちダニーを許さん

と、白痴の全群一人として余の言を信ずるものなし、彼等は平常の如く食堂に下り、滿腹して歸り來り、ダヾをコチつゝ床に就けり。

然るに賄方の役員余の皿に手の付き居らざるを怪み來りて病の故を以て食せざるやを問ふ、余は答ふるに其然らざるを以てす、此事院母の耳に達す、彼女は料理を調へて余の房に至り食を勸めて止まず、余は固く辭して受けざりき、余は終に夕飯なしに床に就きたり。

翌朝に至り事院内の評判となれり、曰くダニーなるもの彼の看護人をして彼の爲めに斷食せしめたり、不埒之より大なるはなしと、ダニー密に余に來り余に問ふに其事實なりしやを以す、余は其然るを答ふ、彼の窮迫今は言はん方なし、忽ちにして余は白痴の一群が會議を開くを見たり、依て近寄りて其議事を聞くに余とダニーとに關する件なりき、彼等の一人「眇目(すがめ)のジョージ」は議案を提出して曰く、

白痴の會議

我等の一人ダニーは自ら罪を犯して彼の看護人たる内村氏に斷食せしめたり、我等は爾來如斯きものを我等の友と呼ぶ能はず、彼を院長に告訴し我等の級内より彼を放逐せんとするものは起立して同意を表すべし

と、全會一の異議なく總起立を以てダニー追放に議決す、彼等は「驢馬のエベン」と稱する一人を總代として議決の件を院長に奏せしむ、院長は直に之を受納し、即日ダニーを下級に落し、尚ほ一回の絶食を命じ、終に事の治まるに至れり。(米國人は白痴に至る迄事を議するに議院法に依るとを察すべし)、余の此一回の絶食は余が在米四年間のホームを造り出すの基なりき、白痴の統御は今は全く自由なるに至れり、「ヲヤッヂ」の名は全く止みぬ、余の命は悉く從はれぬ、余は命令の言のみを以て余の預かりし二十餘名の白痴を自由に指揮し得るに至れり。

白痴の統御は自由となれり

ダニーとの關係親密となる

然れどもダニーと余との關係は爾來實に親密なるものとなれり、彼は毎朝余の寢臺を掃はんが爲めに來る、彼は特別の注意を以て余の房を掃へり、彼は時々余に告げて曰ふ「渠の君をして斷食せしめし事余は未だ忘れず余は今尚ほ之を悔いて止まず」と、余は彼の行爲の上に大變動の來りしを見たり、余と彼とは親友となりぬ、四年を經て余が日本に向て出立せんとするの前夕余は彼に會せり、余の告別の語に對し彼の心情の如何に濃かなりしよ、一白痴、彼れ單一の犧牲的行爲に感動して爰に至れり、嗚呼白痴ならざる世間幾萬の學生にして師を思ふに切なる彼の如きもの幾千かある。

犧牲的行爲の感化

白痴教育の要

* * * * * *

白痴教育の要は周圍の活動と快樂とに依り彼等の内に睡眠し居る精神を喚起するにあり、彼等の意志の微弱なる勸説的に彼等を訓致する事甚だ難し、故に簡易なる手仕事なり、次序的機械運動なり、兵式躰操なり、音樂なり、智能發達の程度に徇ひ各々其特效あり、殊に手工教育に至りては其效益最も著し、故に白痴院なるものは病院又は學校と稱するよりも寧ろ白痴職工場と稱する方却て適當なるが如し。

四年間の利益

教育の精神とは

部に於ては教ふるに普通西洋洗濯、簡易なる裁縫、庖厨の事を專とし、男子部に於ては靴の修繕、帚、毛褥の製造、簡易なる指物細工、普通農業等なり、入院者總數名にして内三百名は何れにか多少の職を採れり、而して是等社會の妨害物も適當の指揮の下に使役すれば院内諸般の細事調達の外に一ヶ年三千弗以上の收入を來たし、彼等を維持する社會に對して同領の返禮をなしつゝあり。

余は出入り四年間を白痴院に消費せり、而して得難きの利益は余に與へられたり。

一　白痴教育は余に教育の原理を傳へたり、其精神、方法は是等下劣の學生の薫陶に由りて余に指明せられたり、即ち教育の精神とは眞實と耐忍と勉勵とを以て躰中に秘藏せられ居る心靈を開發するにあり、教育の目的必ずしも學生に衣食の道を授くるにあらず、劣を優となし、缺を完に進め、愚に注入するに智の幾分を以てすれば足れり、黑と青とを辨じ得ざるものをして遂に之れを識明し得るに至らしめたる教育上の功績は、普通學生に拋物形と双曲線形の別を識らしむるに優りて大なり、有名なる教育者

ジエームス、ビー、リツチヤード氏は滿壹ヶ年を消費して一白痴に「チール」(釘)な

教育の目的は進歩にあり

る一語を傳へたりと、而して此事に對する教師の歡喜、父兄の滿足、教育社會の賞讃は如何に大なりしよ、教育の目的は進歩にあり、然れども進歩の度合は學生各自の特性に依て異なるなり、此單純なる理を解せざるが故に世に顯才と稱するものを吹脹して誇大ならしめ、愚鈍なるものを壓抑して失望せしむ、古より識者が批難して止まざる賞譽の害は全く爰に存するを知らざるべからず、優勝劣敗主義を以て學生の進歩を促すの最大勢力となすが如き教育者は未だ教育の大任の何處に存ずるかを知らざるものなり。

教育の秘訣は至誠にあり

教育の秘訣は至誠にありとは何人も能く唱ふる所なり、即ち法令に依るにあらず、學則に依るにあらず、權威に依るにあらずして之に從事するものゝ赤誠至實にあるなり、嗚呼、此言、演說に吐露せられ、論文に筆せられ、教育を耳にし口にするものは之をき[illegible]ざるなし、然るに十九世紀今日の教育は至誠に最大價値を置くものなる乎、[illegible]りとすれば何ぞ教育に關する法令の煩はしきや、今日の教育は機械的にして法[illegible]にして兵隊的にして模式的ならざるなきか、教育の秘訣は至誠なりとの大義は余

罪惡問題

彼の罪は彼自身に歸すべき乎

は米國白痴院に入て始て學びしなり、其前之を知らざりき、其後之を見し事なし、至誠若し魯鈍彼等が如きものに貫徹するを得ば、況してや普通感覺を有する學生に於てをや、今や不敬不遜の罪は多くは學生の頭上に落ちて教師の其責に當るもの尠し、未來の文部省は宜しく白痴院を設立し、之に堪ふるを以て教員の一大資格となすべし、教育事業の革新此時を以て萌まらむ。

二　白痴教育は社會學上の大問題を解拆しつゝあり、罪惡問題なり、監獄問題なり、政治的に、哲學的に、宗教的に、是等難問に最後の判決を下すものは白痴教育ならざるべからず、人の罪行は必ずしも彼の意志の結果なるやとは近世の犯罪學者(クリミノロジスト)が疑て止まざる所なり、彼等の極端なるものは已に罪惡を病疾の中に組入れたり、余は已にハリー某の白痴なる所以を述べたり、即ち彼の生來の性は物を盜むにあり、若し彼が如き者の盜を働く時は社會は彼を罪惡人として取扱ふべきや、墮胎せんと欲して終に成功せずして生れし兒は成長するに及びて殺人罪を犯すもの多しと、彼の罪は彼自身に歸すべきか、又は墮胎を試みし彼の母に歸すべきか、有名なる米國エルマイラ監獄署長

未來學の基礎

愛憐なき懲罰は有害無益

ブロックウェー氏は長く入獄者を檢して彼等に幾何的感念の欠乏を認めたりと、世に數理に疎き人あるも社會は之を罰せざるなり、義理に疎きも若し天性なりとせば社會の之に對する所置如何すべき、貪慾發怒殆んど禽獸視せられし人が外科醫の刀刃を以て腦骨中に突出せし一骨片を醫除せしが故に善人に立戻りし例は佛國にありき、彼の貪慾は道德的と稱すべきか、醫學と倫理學とは緻密なる關係を有す、未來の社會學と政治學と道義學と宗教學とは人身究理の堅固なる土臺の上に基礎を定めざるべからず。」故に白痴教育は吾人に宥恕と寛容とを教ふるものなり、吾人の欠點にして悉く吾人の意志の下にあらざるを知らば吾人は之を裁くに宥恕ならざるべからず、若し罪惡は其原因如何に關せず制裁と懲罰とを要するものなりとするも之を罰するに當て吾人に無量の推察と憐憫なかるべからず、罪を惡むの念は罪は避け得べしとの念より來る、罪若し疾病の類なりとせば是れ惡むべきものにあらずして寧ろ憐むべきものなり、而して愛憐の念なき懲罰は害ありて益なし、悔改を目的とせざるべからざる監獄制度にして之を執行するものに愛憐の念なしとせん乎、國家は其罪人を頑化しつゝあるなり、

君子にして基督教信者

慈悲藏の闊大

天國と稱せずして何とか言はん

白痴院亦た監獄官吏の最善養成所と稱せざるを得ず。

三　我國人は歐米人を稱して貪慾人種と云ふ、或る點より觀察すれば此名稱彼等に最も適切なるが如し、彼等を市場取引の際に檢せんか、彼等は實に利慾の奴隸なり、彼等を其教會に於て探らん乎、僞善の標本なるが如し、然れども彼等を彼等の有する無數慈善院に於て觀察せよ、彼等は君子にして基督教信者なり、彼等の最善は是等建築物の壁内に於て顯はるゝなり、彼等の慈悲藏は我等の想像に越えて闊大なり、余は一の紹介狀を有せずして、襤衣單身彼等の門を叩けり、而して彼等の余を遇する何ぞ夫れ慇懃なりしよ、而して是れ余一人に對する接待にあらざりしなり、印度人なり、支那人なり、暹羅人なり、彼等に來りて余の與かりし待遇に接せざるものはなかりき、山上に一村落を造り、七百の無辜の白痴と一百の慈善家が一家團欒の和睦の内に共に一生を送りつゝあるの景況を想ひ見よ、之を天國と稱せずして何とか言はん、米國慈力の淵源は是等慈善院にあり、其首府の倉庫に堆積する毎年の剩餘金、是れ鰥寡孤獨を省みざる民の有にはあらざるなり。

キリスマス

慈善院に於ける最も幸なる時はキリスマスなり、是れ歡喜と涙の時節なり、幾百の貧見は分外の贈物を夢想しつゝあり、而して米國の社會は彼等を思ふ善人に乏しからざるなり、告げず問はずして贈物は輸送し來るなり、一婦人は書を寄せて曰ふ、

一婦人の書

小婦は一見を有せり、年の始めよりキリスマス祭に於て彼に晴衣を着せんが爲めに些小の金を醵しつゝありし、然るに神は三週間前に彼を取り去り賜へり、我見は今は青山の下に眠りぬ、醵金も今は彼に要なし、故に今之を閣下（院長）に送る、願くは閣下の保護の下にある父なき、母なき小兒に送れ、X婦より、

と、封内に二十弗の爲替あり、全院之れが爲に泣く、是れ其一例たるに過ぎず、米人亦た君子の快樂を有するあり。

ドクトル、クルリン氏

院長ドクトル、クルリン氏は非常なる人物なりき、若し彼をして我國に在らしめん乎、第一等の警視總監を作り、市民の歸服敬慕する所ならむ、彼をして縣知事となさん乎、其二千石彼に越ゆるものはなかるべし、彼は能く州會議員を動かし彼の事業の爲めに年々莫大の支出をなさしむるの技を有せり、彼は豪富の門を叩き、彼の被保護者たる

白痴を根絶せんと勤む

可憐の兒童の爲めに永く其金囊の口を引絞る事能はざらしむ、彼は同時に七百の白痴の父なり、彼は一々彼等の名を記臆す、彼等のうち愁を彼に訴ふるものは一人として聽かれざるはなし、彼等に物足て彼は足れり、清潔無垢の衣類を着し健全なる面貌を以て七百の白痴軍が彼の前に整列する時に彼が家長的の豪氣を以て彼等を檢閲する時の彼の顏貌の美はしさよ。

然れども彼のアムビションは一山の白痴院を以つて滿足するものにあらざりき、彼はペンシルベニヤ州に存在する九千の白痴を悉く彼の翼の下に庇保するの希望を有せり、彼の一生六十年は此目的に向て進めり、彼が三十歲にして院長となりし時は僅に百人に足らざる入院者なりしかども本年一月彼が今世を去るの時は全院の人口千百名に登りたり、然れども是れ彼の目的の一小部分なり、彼は白痴を社會より根絶せん事を勤めたり、而して其方法は彼等を全く社會より遮斷するにありき、故に一大白痴殖民地を起し、先づペンシルベニヤ州の九千を移し、廣く其制度を世界に知らしめ、終に萬國をして彼に則らしめ、社會の此災害を全然排除せん事を勉めたり。

一人も無益なる人間なし

彼は常に余に敎へて曰く「余の愛する者よ、此一事を記憶せよ、余の信ずる所に依れば神は一人も無益なる人間を造り賜ざるなり」と、是れ實に彼の成効の秘訣なりき、十五歳以上の者にして世は如何に不要物と見做すと雖も彼の麾下に來るときは生産的人物とならざるものは殆んど稀なり、彼は二人の白痴に麵包粉を捏るの法を敎へ込みたり、而して全院八百の人口は彼等の手製に係る麵包に依りて食する事爰に十數年なり、彼等は粉を捏るより他に一事を知らず、然れども此一事に於ては彼等は最上の專門家なり、彼は亦た一人の白痴にして無識無藝なるものを取り、之に二頭の驢馬を預けたり、名けて「驢馬のエベン」と云ふ、エベン今は寢食を驢馬と共にし、兩者相親んで離るべからざるに至れり、驢馬を御するの術に至つては近隣エベンに及ぶものなし、其日常野に出で業を助くるに於ては彼の功績決して小少ならず、或は古靴の修繕なり、或は豚群の飼育なり、院内のものは各自天職のあるありて、其整理は深き思慮を要せらるゝもの〻外は全く是等魯鈍の手に依て成れり。

故に院長の遠望は白痴殖民をして全く自給獨立ならしむるにありき、彼は此點に關し

自給的白痴の殖民

ては非常の確信を抱けり、若し彼の政府にして彼の要求に應じて充分の田畑と建築物とを以て彼に任せば、彼は九千の白痴を率ゐ、社會に依らずして獨立すべしと主張せり、自給的白痴の殖民は彼の終生の希望なりき。

彼に尙ほ一つの希望ありき、即ち東洋の日本に於て白痴敎育事業の起らん事是なりき、

余が彼を訪ひし時早や已に此希望彼の心中に浮び居りしにあらざるなき乎、彼は常に余に告げて曰く「汝の余に來りしは神が導きしなり」と、而して余が辭して故國に歸りし後と雖も彼は常に彼の希望を余に傳へて止まざりき、惟り憂ふ余の不肖なる今日に至るも彼の意に酬ゆる能はざるを、彼は日本國に彼の理想の行はるゝを見ずして死せり、只僅かに敎育博物館内彼が曾て我文部省に寄送せし彼の白痴院を寫せし眞景一面が壁上人目の達し難き處に懸りあるのみ。

人は曰ふ今は國民的精神の發揚すべき時なりと、天下の志士は國威振張の策を講じつつあり、而して彼等は富の增加、兵備の整頓を以て彼等の目的を達せんとしつゝあり、余輩は彼等の企圖を喜ぶ、然れども慈善亦國權たる事を彼等は忘却すべからざるなり、

慈善の功用は惠まる〻者よりも惠むものに於て最も多し、穏たる君子の風なり、優たる兄弟同胞の和なり、凛たる猛者の勇なり、是れ吾人が弱者を救はんとする時に當て吾人に來る美德なり、議場の舌戰之を永遠まで打續くるとも國民の和合は來らざるなり。

世に貧者、弱者、痴者の多きは何故ぞ？

＊　＊　＊　＊

何故に世に貧者と弱者と痴者の多きや？

社會が之を救助するに依て相憐推察の情を發揚し、肉慾的の喧爭を去り、君子的の共同團結に進み、以て人類全躰が其理想の佳境に進まんが爲めなり。

流寳錄（二）

新英洲學校生涯

其一　入校

白痴院に留ること八ケ月にして予は其組織精神整理の一斑を學ぶを得たれば、尙も予の流寳の區域を擴めんとし、新英洲に遊ぶに決せり、予の別を院長に告げんと欲するや、彼は笑て予の行を送て曰く、

予の行を送て曰く

汝最早や余の親切なる待遇に安ずる能はざる乎、余の見る所を以てすれば、地球面上平均一平方哩内に含有さる〻利慾心の分量は新英洲を以て第一とす、汝之を心せよ、然れども余の門戸は常に汝の爲めに開かる〻なり、汝漂流、家なきに至らば必らず我家を思へ、

と、予は祝福を以て彼に送り出され、心大に安んずる所ありて新英洲に至れり。

予は頻に大平洋の水に足を洗はん事を思へり、且つは予の道樂學問なる水産學を究め

んが爲めに予は馬洲の東端なるグロスター市に至り、三週の閑日月を其旅店に費せり、然れども先づ滯留の資を得んが爲に「日本魂」と題する一篇を草し、之を一雜誌に寄送し以て僅に乏しからざるを得たり。

馬洲の東岸勝地多し、グロスター漁港、サレムの市街、チハント灣とベベリー園、渠の「ノルマンの悲歎の岩」は新英洲文學より離るべからざるもの、此處に靜居して靈肉共に健ならざるを得ず、大西洋岸に英氣を呼吸する事三週日にして予は秋風立つの頃コンチチカット河岸アマストに抵れり。

十有四の大學

予のアマスト校を撰びし理由は一にして足らざりし、新英洲其廣袤日本の半に過ずと雖ども有力なる大學を有する十有四校に達す、コンチチカットの一流其上流にダートマスあり、下て馬洲に入れば西岸遠からざる處にウヰリヤムスあり、東岸翠峰に圍まれてアマストあり、下流コンチチカット洲に入て西岸にツフニテー、ウエスレヤンの二校聳へ、其吐口より遠からざる處にエール學院あり、一流南下七十里、七大學を其兩岸に擁す、學事の旺盛羨むに堪へたり、尙ほロードアイランドにブラウン校あり、ボストンの近郊にタフト、ケムブリッヂあり、メーン洲にボードインあり、バーモント洲に同洲大學あり、新英洲に遊學を試みんと欲するものは各自の意向に從ひ其欲する所の校を撰ばさるべからず。

二校は予の撰定に供せらる

無資の予勿論己の欲する處を撰ぶの權なし、然れども二校は予の撰定の爲めに供せられたり、即ち「ケムブリッヂ」なり、「アマスト」なり、二者孰れに至るとも應分の援助は予に約せられたり、予は二校の優劣に就て多分の思惟を凝したり、而して遂に「アマスト」に決せり。

アマストに決せり

智識にして若し予の欲する所ならん乎、予は勿論「ケムブリッヂ」を撰ぶべきなり、其規模の大にして其機關の整頓せる、其社交的勢力の强大にして其交際界の廣濶なる、米國大學中「ケムブリッヂ」の右に出づるものなし、智を慕ふもの、名を好むもの、交を求むるものは「ケムブリッヂ」を撰びて他を省みず、米國青年の華は彼處にあり、富者權者智者才子の集合所、重に當世人士の眼を注ぐ處なり。

ケムブリッヂの長所

「アマスト」は全く其趣を異にす、地は僻、校は大ならず、其學風は古式を重んじ、突

アマストの重んずる所

進を忌んで漸進を守る、其地翠巒繞圍の中にあり、南にポリヨークの火山脈巍々として列するあり、東にベラムの一脈蜿々として横たはるあれば、北にトビー「糖塊」の二嶺聳へ、西は河を隔てベリクシヤ脈を望む、校は天造の圓形劇場（アムフイシヤトー）の中心にあり、美麗なる自然は其四面を護り、滔々たる濁流社會の中に此一仙鄉を擁するが如し、市街雜沓の地を去る事遠く、校は周圍を支配して周圍は校を支配せず、所謂「カレッヂタウン」（校村）なるものは其成立を此校の存在に歸し、校風四近を靡かして村落自から君子の風あり、「アマスト」の重んずる所は寧ろ德にありて智にあらず、主義にありて事業にあらず、鍛錬にありて職量にあらず、人を離れて自然と自然の神とに交はるにあり、據典（オーソリチー）に頼らずして獨創の見を促がすにあり、高潔なる主義を慕ふもの、儼然たる獨立を愛するもの、儉を好むもの、峻を悅ぶものは來て此校に學ぶもの甚だ多し、彼國青年間に行はるゝ諺に曰く

「ケムブリッヂ」にある四年にして壯士演劇を學び、後「アマスト」に入り人となりて學位を受くべし

校長シーリー氏

と、以て二校の赴く所を知るべし。

予を「アマスト」に索付けし理由は之に止まらざりしなり、予は其校長シーリー氏に對し夙くより非常の敬慮を表せしものなり、未だ本國に在るの日予は屢々彼の著書に接し、之を誦讀し之を愛吟するを以て無上の快を感ぜしものなり、彼が嘗て故文部大臣森有禮氏（時の米國全權公使）に送りし彼の日本國の教育に關する意見は早くより予の同情を表せしものなり、彼の進化論に對する持説は早くより予の注意を惹きしものなり、予は未だ彼を見ざるに已に業に彼の謙遜なる弟子の一人なりき、此人に會し此人の薫陶に與からんと欲するの念は予が未だ石狩の支流に釣を垂れし時に起りし予の願望なりき、今や思はずして予の敬慕の師に接し得るの機會を得たり、幾多の便益を放棄するは予の決して辭せざる所、予に取ては彼に接するの幸福は凡ての幸福を得るに優れり。

漂然アマストに至れり

秋風已に北面の一枝を染め出せし頃予は漂然アマストに至れり、寂寥たる一夜を旅館寒燈の下に過し、翌朝直ちに予の尊師の門を叩けり、身は日本製の無意氣なる洋服を

學者にあらず人類の友なり

纏ひ、衣囊を檢すれば七片の銀貨は予の此世に於ける凡ての所有品として珊々たるのみ、ギボンの羅馬史五冊を兩手に分握し、吵然たる一小野蠻人、學と德とを以て文明國に隱れなき一紳士を彼の寓居に訪へり、階級的社會に涵養されし予は如何でか基督教的君子の風を知らんや、本國に在て予は數回貴人の門を叩ひて斥けられたり、曰く「事務多端」、曰く「來客あり面語し難し」、曰く「姓名と所用とを聞かん」、襤衣を纏ひし一貧生が大學綜長の門を叩く、之をして予の本國に於てあらしめん乎、予は彼を訪問するの勇氣を有せざりしならん。

予は應接間に導かれたり、暫くにして一紳士の入り來るあり、彼を見擧ぐれば齡已に耳順に近き老君子、軀幹大なるも別に威嚴あるなく、鼻高くして碧眼の一對深く眼腔内に潛むあり、眼光人を射るにあらずして眼球は推察淚の中に浸され、予は一見して彼は學者にあらずして人類の友なる事を悟れり、彼の溫暖なる握手は言ふべからざるの眞情を漂流の異邦人たる余に傳へたり、瞬間にして予は一種異樣の安慰を感じ、予をして彼を師と仰がんよりは友として交はらんとするの念を起さしめたり、彼は凡て柔和にして凡て謙遜なりき、基督教的君子とは予は此時始めて肉眼を以て見るを得たり、曾て聞けり、我國の文部官某始めて此人に會し、後人に告げて曰く、

始めて基督教的君子を見る

シイリー氏に會するは嚴冬去て後に春風に會するの感あり

と、然り暖和は彼の特性と稱せざるべからず、彼れの頭腦は大なりと雖ども彼の心臟の高且つ大なるに及ばず、彼に一面するは百卷の基督教證據論を讀むに優りて功驗あり。

清潔なる談話半時ばかりにして予は彼に導かれて校舍に至りぬ、無資の漂流人如何にして高價を以て有名なる新英洲學校生涯を始むるを得んや、授業料は一年に百十弗なり、室房の借料は最下等にして三十五弗なり、食料は一週日三弗なり、室内の家具を購求せざるべからず、衣服時には整へざるべからず、洗濯料あり、書籍代あり、一ヶ年金貨三百圓以上の供給なきものは身を斯校に委ぬるの權利なきものなり、然るに東洋の一貧生、七弗の銀貨と羅馬史五冊とを以て此多費なる生涯を始めんと欲す、無謀なりし故に大膽なりしなり

無謀なりし故に大膽なりしなり

綜長は如何の方法によりしか予に二年間の授業料を免し無賃にて寄宿舍の一室を予に貸與すべきを傳へたり、彼は舍監某に命じ、寢臺一脚布團二枚を整へしめ、予をして先づ旅館の苛稅より免がれしめたり、予に與へられし房室は北寮五階樓上の一室、曩に同胞小矢野某の住せし處、絨氈は已に剝奪されて床の裸面は夥多の釘痕を殘し、家具として存せしものは抽斗已に去りし机一臺と四隅一脚を欠きし椅子一個なりき、予は自費を以て洗面盤一個と洋燈一臺を供へたり、外にペンあり、紙あり、日本魂ありて、新英洲學校生涯は肇められたり。

第二　課　目

「カレッヂ」の目的

彼國に所謂「カレッヂ」なるものは我國に未だ其例なし、是を高等普通學校と稱するも可ならん、略ぼ我の高等中學校に類するものにして其一段高尚なるものなり、專門家を養成するは「カレッヂ」の目的にあらず、さりとて之れを通過すれば獨立生涯を創むるに難からず、「カレッヂ」の主眼は圓滿なる市民を養成するにあり、故に學課は汎く諸派に渉り、之を修むるに依て諸學相互の關係を了し、專門家たるに先ちて廣濶なる知識の土臺を造るにあり、「カレッヂ」的教育を稱して liberal education（宏濶なる教育の意）と言ふは是に因れり。

今最近の年報に依りアマスト大學の課目表を擧ぐれば大略左の如し、

第一年級

希臘文學○拉典文學○幾何、高等代數、三角術○獨、佛、文學○修詞學、能辯術○生理學。

第二年級

希臘文學○拉典文學○解析幾何、微分、積分、○×獨、佛、文學○修詞、能辯術○×化學、解剖、生物。

第三年級

希臘文學○拉典文學○クヲタルニオンス○獨、佛、文學○伊太利語○論理學○歷史○理化學○生物學○礦物學○英文史。

第四年級

希臘文學○拉典文學○梵語○獨、佛、伊、語○英文史○歷史○哲學○倫理學○經濟學○政治學大意○萬國公法大意○理化學○生物學○星學○聖書文學○討論。

義務科と自由科

學課に義務科あり、自由科あり、前者は各生必ず經過するの義務あるもの、初め二ヶ年は自由科は二三科に過ぎず（×を以て標す）、終り二ヶ年は自由科のみにして義務科なし。

「カレッヂ」的教育は重きを希臘拉典の兩文學幷に數學に置く、是に深遠なる理由の存すればなり。

「カレッヂ」教育の主眼は圓滿なる市民の養成にあり、而して文明國の市民として希、拉、兩古文學の教育は左の肝要なる利益を有す、

希、拉、古文學教育の利益

一、歐羅巴文明の淵源を知るにあり、其宗教を除ひては政治、文學、美術、習俗は悉く源を希臘羅馬の兩文明に發せり。

二、最も公平なる批評的觀念は古文學の攻究より來る、其遠く時事問題を距るが故に吾人の之を討議するに當て偏執的思想を挾むの憂なし、英の憲法學者スタッブス氏が彼の學生に向て十六世紀以後の歷史を講ぜざるは全く此考古的觀念に基くと云ふ、古典的教育を欠く人は超時代的觀察を爲す事甚だ難し。

三、最も健全なる「美」の觀念は希拉兩文學の攻究より來る、是を繪畫彫刻の術に於けるも然り、是を文學に於けるも然り、是を日常の擧動に於けるも然り、科學は自ら殺風景なり、希伯來的宗教に雅訓あることなし、希拉兩國民のみが思想事物の華麗(grace)文雅(elegance)を教へたり、故に所謂 Culture（修文）なるものは是を希拉古文學に求めざるべからず、正しく之を謂へば希拉古文學の教育を受けざるものは未だ野人なり、讀者若し余輩の言を疑はゞ少しく斯學を覗ひ見よ、其吾人の醜を摘示し、吾人をして最美を慕はしむるの効果は歷然として明かなり。

故に學者(scholar)たらんと欲せば、批評家(Critic)たらんと欲せば、君子(gentleman)たらんと欲せば、希拉古文學の攻究は最大必要なり、而して教育の目的たる宜に實際的人物を作るにあらずして、宜に專門家の製造にあらずして、廣量なる批評力、温雅なる風采、聰敏なる觀察力の涵養にあれば、希拉古文學の攻究は決して忽がせにす可

數學の教育的價値

らざるものなり、「已に死したる言語」なるの故を以て斯學を忘るは皮相見の最も甚だしきものと言はざるべからず。

古文學の攻究は人をして人情的たらしむ、然れども彼の理性は科學の攻究によりて發達す、而して數學は科學の原理にして其土臺なり、數理的觀念は科學の精神なり、人を知らんと欲せば古文學に據らざるべからず、自然を探らんと欲せば數理に倚らざるべからず、而して健全なる智能の發達は人と自然とに關する健全なる智識より來るものなれば數理學の教育的價値は古文學に讓らず、古文學と相並んで數理學の教育上肝要なるは後者は自然を吾人に開くの鑰なればなり。

シーリー氏の言

「カレッヂ」教育の半以上を數理學幷に希臘拉典の兩文學に消費するの理由斯の如し、教頭シーリー氏屢々余輩に告げて曰く "Amherst aims to teach its student how to think for himself." (アマスト大學は其學生に獨り攻究するの術を教ふるを以て目的とす) と、ウヰリヤムズ大學前教頭マーク、ホップキンの說に依れば、彼の理想的の學生は十五分間留め針の頭を見詰め得るものなりと、即ち注聚的注意 (Concentrated attention) に堪へ得るものなり、恰も理想的の兵士とは寒暖曝雨に能く堪へ得るものを謂ふが如し、教育の目的を以て事實の暗誦にありとするは誤謬の最も甚だしきものなり、吾人は學問せんが爲めに學校に行くにあらずして學問する法を學ばんが爲めに行くなり、學校を以て事實的智識の問屋と見做し、此に學ぶを以て學問の仕入をなす如く思ふ人あり、如斯人には古文學は勿論無益なり、數理の學亦た深く究むるの要なし。

自撰科の要と利

第三年級に入て課目は悉く自由科 (Optional studies) となり、學生各其望む所に從ひ一週十四時間以上十八時間以下の受業を要求さる。

自撰科を設くるの要と利とは左の如し、

一、專門大學に入るの前備をなすにあり、而して近來專門學課の數非常に增加せしに徇ひ其の之に應ずる爲めの準備も亦從て多端なり、故に我國に於けるが如く法、醫、文、工の諸部に別て高等豫備學校を設くるも專門大學の要求に應ずること能はず。

二、「カレッヂ」は專門大學に於ける事業を輕減し後者を以て專門一途の攻究に從事する處たらしむ、例へば史學を專門とするもの哲學を專門とするものと共に大學に入りてより再び共同學科を修むるの要なく直ちに其特撰の學科にのみ從事するを得べし、即ち「カレッヂ」は我邦の大學制度より其事業の半を削りしものなり。

三、「カレッヂ」は其物自身にて完全なる學院なれば之を卒ふるを以て實際的生涯を創むるを得べし、尋常學校の敎師たらんと欲するもの、新聞記者たらんと欲するもの、其他健全なる常識に加ふるに各自意向の專門に就て土臺的智識を以てせんとするものは「カレッヂ」敎育を以て終るを常とす、「カレッヂ」は高等普通學校にして普通大學なり、而して自由科は專門大學の性質を之に供するものなり。

四、自由科は學生各自天禀の技量を發見鍊磨するの區域を廣からしむ、自由撰定の爲めに供せられし學科は總て二十餘課目、之に義務科を加ふれば三十課目の多きに達す、宏濶此の如き智識的空氣の中に浸されて學生の潛伏力の發顯發達せざるはなし、「カレッヂ」を通過して吾人各自の專修すべき專門學課の撰定最も易し、

「カレッヂ」は實に吾人各自の天職を指定するものなり、專門の誤定は實に狹隘なる普通敎育より來る。

自由科の設立勿論敎師の多數を要し尙て經費の增額を要す、且又學生一般の程度にして高尙なるにあらざれば之を設くるは反て害あるべし、然れども資の之に耐ゆるあり、學生の自撰力の賴るべきあれば自由科は功を奏する最も多きが如し。

其三　課業

予は本國に在て希臘拉典の兩語學を修めざれば新英洲カレッヂに於ける正科を踐むの資格を有せざりし、去りとて數學其他の普通學科に於ては再び之を此處に重複するの要なければ最下級に入るの無益なるを知れり、依て予は撰科生として第三年級に入れり、夫の賤むべき撰科生、級の厄介物、學生の半人前、業を卒へて卒業生にあらず、學んで學位の冀望なし、人生莫作撰科生、是れ晩學者が已むを得ざるに出る一途なれば なり。

然れども予の日本人なる事と、敎師の推察心に富む事と、級友の友情に厚き事とは余

をして此耻辱を感ずる事甚だ微なからしめたり、否な、暫時にして予は例外生たるの感を忘却したり、予は本科生同樣の制服を着し、彼等の有する特權にして一として予に許されざるはなかりしを以て何人も予を目して撰科生となすものなきに至れり、予は基督教國の風俗として此一事を嘆美して已まず、夫の己れ本科生たるの榮譽を以て世に向て誇らんが爲め、撰科生を常に厄介物視し、彼を卑下し、彼に永久の耻辱を感ぜしむることを以て自ら快となすが如きは、余輩は之を評するに言なし。

予の初年の學課

予の初年の學課は史學獨逸語聖書文學の三科なりき、一週各四時間、他に躰操四時間ありたり、予は之に加ふるに佛蘭西語幷に希臘語を以てし、以て予の學生たるの大欠乏を補はん事を努めたり。

史學の事たる是れ本國に在るの日予の決して觀過せし學課にあらず、普通日本童兒の誦讀すべき支那日本の歷史類にして予の通讀せざりしものはなかりき、英語を修めてより泰西の歷史は予の特愛の一課となり、バーレーの萬國史の如きは予の通讀殆んど十餘回に及び、ギゾーの文明史は八回復讀し、グードリッチの英國史ロードの歐洲近世史の如きも幾回か予の全注意を惹きしものなりき。

史學の何物たるかを知らざりし

然れども予は未だ史學の何物たるかを知らざりし、歷史的事實は繪畫の小兒に於けるが如く個々獨立の印刻として予の腦裡に存せり、然れども一度び敎授モース（Anson D. Morse）氏の敎場に入て歷史的精神は予に吹入せられたり、死骨の如く予の腦中に埋沒せし歷史的事實は今は一組織の下に整然列を爲すに至れり。過去は今は活畫として予の目前に浮べり、歷史は現世的趣味を有するものとして予に紹介せられたり。

歷史の定義と目的

彼は第一回の講義に於て劈頭歷史の定義と目的とを述べて曰く、

歷史は人類進步の記錄なり、此進步を扶助せしもの或は之を妨害せしものが歷史的人物或は歷史的國民なり、チャーレマンは文明の進步を助け、アチラは之を妨げたれば同じく歷史的人物の名稱を受くべし、國民に於けるも亦然り、其物自身にて完全なる國家あるなし、國民あるなし、國民の歷史は人類歷史の一小部分たるに過ぎず、國民は滅亡に歸するも歷史的に生存することあり、一國民興り人類全躰に對する其使命を盡して逝く、新國民起りて舊國民の後を嗣き、舊文明に加

歴史的新天啓なりし

ふるに其特質と所得とを以てし而して亦之を後進の國民に讓る、國民各々世界に供すべき寄贈物あり、國民は失す、然れども永久に渉るべき其印刻は決して消へず。

歴史は過去の事跡の年代的配列、即ち事實の目錄として考へられたり、然れども歴史の要は人類の發達を知るにあり、未來を感化せざりし事實は歴史的の價値を有せず、ナポレオンの言行の如きも今日の歐洲社會を感化せしものを除きては歴史的に價値あるなし。

如何に平易にして如何に起題的（ナセツシーナ）なりしよ、是れ余に取りては實に歴史的新天啓なりし、日本を以て世界の中心と思ひし予、歴史を以て昔話の一種と思ひし予、英雄巨人の言行を學ぶを以て歴史の大目的と信ぜし予は此第一回の講義に參して長き迷夢より醒めしの感ありたり、予は直ちに予の無飾の室に歸り、新感激の失せざる前に予の三脚の椅子に寄り掛り、破れテーブルの上にて教授の言を彼の單純なる英語の儘に紙に寫したり、モース氏の講義を筆記せしものは今は二冊となりて予の手にあり、是れ予の歴史的經典なり、予は史學の眞味を初めて彼の教場に得たり、終生の快樂と慰藉とは斯くして予に供せられたり、ニベルト、ミルマンに伴はれて宗教變遷の事跡を察し、モムセン羅馬の振起を談ずれば、ギボンは其敗壞を語り、ランカの健筆能く改革時代の豪氣を寫し、モトレーの雄文新興國の精神を敘して餘りあり、喜んで歴史を讀み得るものは常に觀劇の快と樂とに與かるものなり、弱志男女と席を共にするにあらずして、道德的危險を冒すにあらずして、父兄の財を浪費するにあらずして、當時活劇を觀るの歡は予は予の新英洲學校に於ける歴史學教場内に於て授けられたり。

獨逸語

獨逸語は予は教授リッチヤードソン（Prof. Henry B, Richardson）に受けたり、始めて彼に接して我國に於ける儒者の如き相を見る、然れども外面に老人むさく見ゆる彼は内心秋毫の邪氣を留めず、予輩彼に就て學ぶ滿二ヶ年、予輩の課業怠慢に就て一回も譴責的言語の彼の唇上に顯はれしを見ず、彼は奬勵一法を以て彼の學生を導けり、予輩は終には彼の課業に充分の準備を加へざるを以て甚だ氣の毒に感ずるに至れり、曾て東京なる大學豫備門にあり、外國教師の下に學ぶに際して暗誦の不出來は碧眼先

課業外の讀

生の嘲怒を招き、毎日教場に出づる時は閻魔大王の前に引出さるゝが如き感ありて、戰々兢々實に一日の平和を得る能はざりしを思ひ、彼も米人是も米人、天地も啻ならざるの差別あるを覺へたり、語學は數學に次ぎて最も乾燥無味なる學課なり、之を教ゆるに多量の堪忍を要す、教師の善惡は最も明白に語學攻究の際に識るを得べし、語學を面白く教へ得る教師は教師の職に堪ゆるものなり。

予輩はDeutsch氏のColloquial Germanを以て始め二ヶ月にして是を終れり、Brandt氏の獨逸文典之に尋ぎ、是れ亦た二ヶ月を以て了る、比較的に博言學的に研究するにあれば意を言語の原理に留て其細目に及ばず、第二期に入りてレッシングのEmilia Gallottiを通讀し、第三期に於てシルレルのMaria Stuartを終り、一年は全くゲーテ文學に消費し、殊にファウスト劇は其多分を占めたり、僅々二ヶ年間に獨逸文學の大意を予輩に紹介せんとするにあれば教授の苦心は察するに餘りあり、故に彼は教場に於ける教授時間を以て足れりとなさず、秋冬の二期に於ては彼は彼の學生に供するに毎週一時間づゝの課業外時間を以てし、予輩より課業準備を要求せずして彼の指定せる獨逸文學の講讀に臨席せしめたり、是れ全く彼の好意に出て予輩は之に望むの義務なしと雖も之に臨まざるものは殆んどなかりき、課業外時間に於て予輩に授けられしものはHermann und Dorotheaの愛歌とWallensteins Todの全編となりき、學生を益せんとする彼の熱心は豫想外の智識を予輩に供せり、教師の學生に忠實なる實に斯くあらまほし、身を一校に委ね置きながら職を校外の事業に求め、以て不利を受持の學生に來すが如き先生達はリ氏の行爲に於て大に學ぶ所あるべし。

知識的大世界なり

ゲーテのファウスト劇はリ氏の專門なりき、彼は眞正なる獨逸人の精神を感受し大詩人の名に對し殆んど崇拜的尊敬を表せり、故に彼のゲーテを評する時に或は予輩の賛成し能はざることありたり、然れども崇拜者のみが最も善く崇拜物の心を知るなり、リチヤードソン氏のゲーテ癖は彼をして最も善良なるゲーテ文學の述意者(エキスポジチント)たらしめたり、三學期の長日月、彼はゲーテの辯護人として予輩の前に立てり。

ファウスト劇は其れ自身にて智識的大世界なり、希伯來人の聖書を除ひて一卷の中に人事の凡てを盡せしものは此作を措て他にあるなし、是れ實に世界的聖書(Welt Bibel)

なり、是れ實に新紀元を報ずる曉鐘なり、是れ實に十九世紀の精神なり、基督教的文明を人情化（humanize）せしものなり、世界の精神を辯護せしものなり、吾人は是れに依て人性の如何に憐れむべきものにして如何に貴ぶべきものにして如何に醜なるものにして如何に美なるものかを知るなり、フハウスト劇は吾人を「人」たらしむ、其益此にあり、其害此にあり、吾人は（human）たるの大を知りて神（divine）たるの慾を棄つるに至る、人界の大をフハウスト劇は示せり、其作者は魔術家なり、彼は鳳翼深き人を以て彼れ自身に於て滿足すべきものとして描きたり、妄信者を軟らぐるに偉大の功あり、衆生を導くに偉大の害あり、フハウスト劇に接して予は人として予の有する特權の大なるを悟て天祐の要を感せざるに至れり、――ゲーテ彼れ自身が彼の讀者に對するメフヰストーなり、予が單獨自然と自然の神に向て、

天祐の要を感せざるに至れり」

Erhabner Geist, du gabst mir, gabst mir alles,
Warum ich bat! Du hast mir nicht umsonst
Dein Angesicht im Feuer zugewendet;
Gabst mir die herrliche Natur zum Königreich,
Kraft, sie zu fühlen, zu geniessen; nicht
Kalt staunenden Besuch erlaubst du nur,
Vergönnest mir in ihre tiefe Brust,
Wie in den Busen eines Freunds, zu schauen,

と叫ぶに對しフハウスト劇はメフヰストーの魔言を以て予輩の平和を破りて云ふ

Habt ihr nun bald das Leben g'ung geführt?
Wie kann's euch in die Länge freuen?
Es ist wol gut, dass man's einmal probirt;
Dann aber wieder zu was Neuen!

メフヰストーの魔言

此大著述を學び了して、泣て笑て評して論じて、世界的智識を探り終て、主人公フハウストの生涯は――ゲーテ自身の稱する durch stürmen たるに過ぎず、劇の發端に於けるフハウストの愁歎は其結尾に達して予輩の發する愁歎の聲なり、

予輩の發する愁歎の聲なり

歴史的單記を飜譯せしむ

Habe nun, ach! Philosophie,
Juristerei und Medicin
Und leider! auch Theologie
Durchaus studirt mit heissem Bemühn.
Da steh' ich nun, ich armer Thor,
Und bin so klug als wie zuvor;.....

予は予の尊敬する教師と説を異にしてフハウスト劇を讀み了りたり、予は彼に對して言語外の感謝なき能はず、予は世界の精神を知れり、其美と妙とは爾來再び予を欺かざるべし。

予が校を辭する前リ氏は予に命じて改革者ルーテルの青年時期に關する歴史的單記(モノグラフ)を英文に飜譯せしめたり、三ヶ月の勤勉に依て予は之を譯了して彼に奉ぜり、彼の歡喜と滿足とは譬ふるに物なし、彼は云ふ「余の日本の學生是を爲せり」と、予は實に彼の級中の最難物なりき、彼の特別の援助に依るに非ざれば予は滯りなく彼の受持の學課を了へ能はざりしものなり、彼の歡喜は彼の勞力の結果を表せしもの、予は慚愧の至りに堪へず、予が校を去てより後三年、予の知人某なる日本人が彼を訪ひし時彼は尙ほ予の英譯文を誇り居りしと、鈍愚予の如きものを教導し、其少しく進歩せしを見て喜悅誇て猶ほ未だ已まざるが如き、是を師情の極と稱せずして何をか稱せん、恩授の劇作今茲にあり、日常之を友とするに當て慈師の厚情を懷ふ切也。

* * * * * *

聖書文學は特別科として予一人の爲めに設けられたり、教授神學博士フィールド(Prof Thomas P. Field)氏に閑餘の時間ありし事と予の異邦人にして基督信徒たりし事が此特權を予に供せられし原因なりと知られたり、是れ余の請願に出でしに非ずして教頭と博士との相談より成りしなり、學生一人にして教授一人を持つ事なれば予に取りては無上の特典と云はざる可らず。

聖書文學

教場は博士の勉强室

教場は博士の家に於ける彼の勉强室なり、質問討議は予の勝手次第なり、此の如くにして氏の懇切に接すること一年三學期に渉り、予の彼より得し所實に大なり、予は先

宗教上の討論會

異教の美と眞とを辨ずゝ

最も完全なる傳道は

づ彼と共にカリス氏の有神哲學論を讀み、次にスミス氏の舊約史に移り、ブリッグス氏の聖書研究論を以て終りたり、然れども教科書は常にソッチノケに爲したり、我等二人は一年間宗教上の討論會を續けたり、博士の長所は比較宗教學なりき、而して余は素と儒教を以て育て上げられしものなれば博士に取りては予は得難き科學的標本なりき、是れ我等の討論會が屢々時間の經過の早きを歎じ、口泡を飛し、聲は洩れて隣室の彼の善良なる妻君を驚かせし理由なり、余は彼が予の祖先の宗教なる佛教神道等を輕侮することを許さゝりし、予は無遠慮にも基督教會現時の腐敗を以て彼に迫りたり、齢已に古稀に達せし白髪の老先生は少しも先生振ることなく、快辯壯語を以て余に應答せり、予は彼に向て充分に異教（Heathenism）の美と眞とを辨ぜしと信ず、然れども基督教の原理に就ては予は充分に彼の議論に服し、此點に關する予の確信は彼に由て益々鞏固なるを得たり、最も完全なる傳道は師弟膝を接して討議問答するにあり、米國高壇に於て錚々の名ある一神學博士と斯くも自由に面接するを得しは予に供せられし宗教的特典の最大なるものと云はざるべからず。

親密なる朋友たらしめたり

礦物學と地質學

三學期間の討論會は終には我等をして最も親密なる友人たらしめたり、博士は遂に予の衣食問題にまで干渉するに至れり、彼は種々の名義を附して予の數回の欠乏を補へり、彼は予の心事の解明者となれり、彼今逝て今世の人にあらず、予は彼に報ゆる所なからざらんや、縱令〈高壇の上よりせざるも、縱令〈教師の聖職を帶びざるも、一種の基督教傳道は彼に對する予の義務也。

第四年級に入て予は礦物學と地質學とを授授エヤソン氏に受けたり、彼は善人中の善人、彼の廣濶なる頭腦は礦物と化石と馬洲の地質とを以て滿ち充てり、彼は常に誇て曰ふ「アマスト近郊に於て余の識らざる石塊のあるなし」と、彼は數學攻究の爲めに壯年の時已に頭髪半を失ひ、今は禿頭光を放ちて眩し、彼亦古文學に淺からず、彼はアマスト大學の忠實なる卒業生として曰ふ「古文學（クラシックス）はカレッヂ教育の最要部分なり、予の見にして校にあるものは專ら意を此に注がしむ」と、金石學者の言として重んずべきの一言なり。

教科書として地質學に於てルコント氏の地質原論を用ひ、礦物學に於て博士デーナの

著を用ひたり、最始の四五回は彼は能く秩序的に予輩の課業を質したり、然れども暫時にして彼は詳明解拆の爲めに氣を奪はれ日課あるを忘れし事屢々なりき、是れ彼の學生の最も悅びし所、課業の詰問より免がれんと欲する時は彼等は近郊の土塊數個を持ち來り彼の机上に並べ置き以て彼の解明を乞へば、彼は莞爾として標本に對し、其起原、理化學的性質、功用、配布の精細は彼の腦裡より流れ出て止まる所を知らず、彼の説明に專心なる彼の生徒の或者が教場の一隅一幅の掛圖に日光を遮ぎられて華胥の夢境に遊びつゝあるも彼は少しも意に留めず、教場内を奔走し、是に比し彼に照し、以て一石塊を辨明するの狀は氣の毒にもあり可笑しくもあり、時鐘鳴り渡りて彼は始めて日課に心附くも已を得ずして散級を命ず、而して一週間を出ざるに彼亦彼の學生に欺かるゝ事前日の如し。

二學期にして地質原論は纔かに其四分の一を終へしのみ、金石書は結晶論の一編を誦し終て後殆んど無用に歸したり、彼の教場の亂雜なる實に物の比すべきなし、岩塊化石礦物の類は室内到る處に狼藉たり、予輩は彼の教場に入りて學ばざらんと欲すれば

自由科中の自由科

自然學を教ふるの最捷路

學ばざるも可なるが如し、最も自由なる教授法、アマスト校に於ける地質學科は自由科中の自由科なり。

然らば予輩はエマソン氏に就て少しも得し所なきか、否な然らず、全く然からず、彼は無頓着の如くに見へて決して無頓着ならざりしなり、彼は自然學を教ふるの最捷路を知れり、自然其物に就て予輩のインテレストを起さんとするが彼の目的なりしなり、而して是れ規則的に教科書を暗誦したればとて決して起るべきものにあらず、然り、多くの思慮なき教育者が紀律的に自然學を學生に强ひしが故に學生は終生の敵意を自然學に對して狹さむに至れり、自然其物が自由なり、アガシが瑞西國の淡水魚に於けるが如く、オーヂユボンが、米國の鳥類に於けるが如く、彼等は强ひられて自然と友誼を結ばざりしなり、詩人ロングフェローの言に由れば自然は幼時のアガシに歌て曰く

And Nature, the old nurse, took
The child upon her knee,

自然をして彼女自身の教師たらしめよ

Saying: "Here is a story-book
Thy Father has written for thee."

"Come, wander with me," she said,
"Into regions yet untrod;
And read what is still unread
In the manuscripts of God."

自然をして彼女自身の教師たらしめよ、曾て聞く有名なる博物學者アガシが米國ハーバード大學の教授たりし時一青年彼に來て動物學研究の方法を問へり、アガシは直に立て剝製の魚類一尾を持ち來り、之を青年の前に置き、默然去て室外に出でたり、彼は暫時にして歸り來り青年に問ふて曰く「君は此魚に就て何を見しや」と、彼は觀察の儘を述べたり、アガシ氏曰く「君の見る處未だ足らず再び檢して予の來るを待て」と、彼は再び室外に去りぬ、而して青年は彼に供せられし標本を手にして半日に渉り殆んど爲すなきに苦しみたり、時に先生再び入り來り青年に告て曰く「自然を學ぶの法斯の如し、即ち獨り直に自然物を檢するにあり」と、青年大に悟る所あり感謝してアガシ氏を去りしと云ふ、エマソン氏の精神とは實にアガシの此精神に外ならず。

自然を學ぶの法

野外教育

エマソン氏は書物教育を避けて標本教育を取りし如く、成るべく教場教育を避けて野外教育を擇べり、是れ亦彼の教育主義より來る自然の結果と云はざるべからず、故に彼は凡ての機會に乘じて予輩を近隣の山野に引き出したり、或はコンチチカット河岸に砂礫層積の狀を學び、或はホリヨーク火山脈に地皮皺縮の理を究め、「糖塊山」(シュガローフ)山腹の巖窟、トビー山頂の突岩、「帽野」(ハットフィールド)の鉛鑛、「緑野」(グリンフィールド)の砂原、アマスト近郊方十哩の地にして地質學的に趣味ある場所は予輩の蹠跡せざるは尠し、ホリヨク山頂北面して曲折蜿蜒たる銀河を望みし時、コンチカット河邊鐵鎚一挺を腰にして岩面に古獸の蹄痕を探りし時は、予が西大陸の山野と親交を結びし時なりき、既に親密なりし自然は教授エマソンの紹介に依りて更に親密なるものとなれり。

* * * * *

希伯來語

心理哲學

倫理哲學

其他の學課に就ては予は多く言ふを要せず、希伯來語の二學期は予に神學研究の野望を起さしめ、校を卒へて後終に四ヶ月の永き此非實用的の學問に予の頭腦を惱ましめたり、心理哲學の一學期は予の最も苦戰せし所、予は此學科に於て臍緒切て以來始めて落第てふ厄難に會したり、予は全く之を解せざりしにあらず、予は予の心理的思想を言ひ現はすに言語を有せざりしなり、故に落第は予に取りては無慈悲の刑罰なりと信じ、一學期にして予は心理學を放棄したり、甘きものは甘し苦きものは苦し、然るに「何故に甘し」と問ひ、「何故に苦し」と究む、是を心理哲學と云ふ、故に此學に從事するものは終には甘きを稱して苦しと爲し、善を惡と稱し惡を善なりと唱ふるに至る、人は獸か、獸は人か、宇宙と合躰するとか稱して天を眺めながら泥中に落つ、心理學者とは斯の如きものを云ふなり、予の落第せしも亦無理ならんや(!)

倫理哲學は最要最高の學科として最終學期に教頭より授けられたり、而して幸にして心理哲學に於けるが如く落第の悲運には會はざりしも予は餘り興味を以て此學に臨まざりし、惟其内多くの高潔なる思想に接し、予の心靈を益せしこと尠なからず、「德

フレーベルの言

(Virtue)は勇氣(Virtus)なり」との如き、「愛(Love)は捨つる(Leave)と同意義にして自捐なり」の如き、「人は高尚に獨立して高尚に依頼せざる可らず」(詩人ウォルヅオウスの言)との如き、「汝の言行をして宇宙の運行と和合せしめよ」との哲學者カントの勸言の如きは予に取りては一言千金の價値ありて之を誦讀服膺すれば別に倫理哲學を學ぶの要はなきものと考へたり、然り、予に取りては植物學又は金石學は倫理哲學に勝りて數倍の倫理的價値を有せり、詩人ウォルヅオス言はずや

"One impulse from a vernal wood,
May teach you more of man,
Of moral evil and of good,
Than all the sages can"

有名なる教育家フレーベルは曰へり

水晶學は予に人たるの道と其法則とを示し、聲なきも感じ得可き言語を以て人類の眞正なる生涯を予に教へたり

と、而して是れ亦予が教授エマソン氏の金石室に於ける經驗なりと云はざるべからず、倫理哲學は思惟學の一科として攻研するの大價値ありと雖も之を以て實行的道德を勵まさんが爲めにするは實益甚だ少し、世が倫理學に於て失望するの理由は之を機械學又は測地學の如き實用學と見做すもの多ければなり、予の失望も此に基けり。實德の養成は倫理學教育に於て望むべからず。

世が倫理學に於て失望するの理由

＊　＊　＊　＊

アマスト教育の一にして予輩の爰に特別の注意を要すべきものあり、即ち一學年間毎週一回づゝ上級生の爲めに設けらるゝ教頭の質問會是れなり、其方法たるや生徒より有と有ゆる質問を提起し教頭より即席答辯を要むるにあり、質問の種類に制限なし、政治法律經濟倫理哲學文學宗教學術勝手次第なり、疑問を以て滿ち充ちたる百餘名の壯年學者を相手に縱横微塵に彼等の攻撃を切り拔ける事なれば教頭たるものは非常の博識ならざるべからず。

教頭の質問會

一日級友の一人予の日本人なるの故を以て教頭の日本に關する智識を試みんと欲し「日本の過去、現今、將來」なる問題を出して彼の答辯を乞へり、教頭は微笑しながら予を彼の眼鏡の上邊より眺め、曰く「此處に内村君あり、我等は此問題は彼に讓るべし、然れども予は先づ予の知る所を述べ而る後彼の訂正を乞ふべし」と、言ひ了て彼は日本歴史の大意を述べたり、神武天皇に始め、仲哀神后の征西、天智の中興、藤原家の專横、封建制度の建設、頼朝尊氏家康の事跡より、終に明治の復興に及んで息みぬ、彼は云ふ「予の知る所僅に如斯のみ」と、心大に予の前に慚づる所あるが如し、予は驚けり、彼の陳述せる所にして予の知らざる所甚だ多し、殊に年代の記憶に至りては予の迚も及ばざる所なりし、予は彼の終るを待て起て予の意見を述べ教頭の説く所寸毫も予と説を異にする所なきを陳べたり、是れ其一例なり、以て彼國に於ける大學教頭なるもの、學識の一斑を知るに足らむ。

「日本の未來、現今、過去」

後日曾て予は彼を彼の家宅に訪ひし時彼に問ふに彼の日本に關する知識の出所を以てせり、彼れ曰く「予は十七年前世界漫遊の途次貴國に抵りたり、途上船中貴國の歴史を讀むの快を得たり、爾來新聞紙上多く學ぶ所ありしと雖も予の得し所は重もに彼の

時にありし」と、十七年前の日本歴史を諳ずる彼の記臆は予輩の想ひ及ばざる所、然れども彼は記臆力を以て學者社會に有名なるものなり。

＊　＊　＊　＊

學問の眞味

スカラーとは

學問は予の常性となれり

予はカレッヂ教育に依て學問の眞味を知れり、學問は單に經濟的にのみならず、人情的に心靈的に貴きものとして予に紹介せられたり、エマソンの所謂スカラー(Scholar)の觀念は予に始めて此處に於て傳へられたり、學者必しもスカラーならず、スカラーとは眞理の爲めに眞理を愛する人を云ふなり。哲人プラトーの精神、詩人ゲーテの精神、即ち眞理を戀慕して身を其探究に委ぬる精神、是れスカラーの精神なり、カレッヂ教育若し予輩を實用的專門家たらしめずば予輩をして先づスカラーたらしむ。

予はスカラーたるの資格を感じて後專門大學に入りて之を利用するを得ざりしを憾む、然れども予は二三の專門を獲るに優りて此特權を附與せられしを喜ぶものなり、恰も二三の寶貨を獲るよりも寶藏の鑰を有するの優れるが如し、カレッヂ教育に依て獨學の方法と精神とは予に供せられたり、學問は予の常性となれり、カレッヂ教育の功果豈亦た偉大ならずや。

流寳錄（三）

亞米利加土人の教育

余が米國を去て歸國の途に就くの前週、余の恩人なる費府の慈善家ウヰスター、モリス氏は余に告て曰く、

ウヰスター、モリス

君は我米國に在て多くの慈善事業を視たり、然れども當ペンシルバニア州カライル（Carlisle）に於ける土人教育事業を一見せざれば君の視察は完全せりと言ふべからず、其の監督者なる大尉プラット氏（Capt. R.H. Pratt）は余の親友なり、余は君の爲に彼地への往復旅費を辨ずべければ君往て彼を訪ふべし、余は信ず君の益する所決して尠なからざるべし

プラット氏

と、余は甘じて余の恩人の厚意を受け、旅裝早々カライルに向て發せり。

費府を西に走る百哩にして當州の首府ハリスブルグに達す、此處に列車を轉乘し、南の方メリランド州の方面に向て走る事二時間餘にしてカライル町に至る、南北戰爭に於ける有名の劇戰場ゲチスブルグを去る僅かに十數哩、カンバランド開谷の中央に位し、富饒なる農產地なり、停車場に下車すれば銅色的一人士の叮嚀に余を迎ふるあり、曰く大尉プラットは君を待てりと、蓋し注意深き余の費府の恩人は已に余の行を彼に通知し置きしなり。

偉大漢

余はプラット氏を始めて彼の事務室に見たり、見上る程の偉大漢、彼の體格は紛らふべきなき軍人なり、然れども彼の容貌に軍人たりし一徵候の存するを見ず、柔顏溫容の一君子、上唇下顎共に一莖の鬚髯を留めず、謙厚にして甚だ交はり易き一平民なりき、彼はモリス氏の紹介の故を以てか知友の如くに余を迎へ、余の訪問を以て甚だ悅ぶ者の如し、彼は先づ余に問ふて曰く、

君は何日間余と共にあるを得るや

と、余は答ふるに二十四時間以內なるを以てす、彼は其甚だ短きに過るを歎じ、語を續けて曰く、

然らば我等は甚だ多忙なるべし、余は君に要めんと欲する所甚だ多し、故に我等

「アイノ」

は斯くなすべし、初めの十二時間は君余に供せよ、終りの十二時間は余君に呈せん

と、余は之を諾せり、而して我等の智識交換は始まれり。彼は先づ余に問ふに日本の教育制度を以てし而る後に其宗教慈善等に及べり、余は序に彼に告るに日本に「アイノ」人種なる者ありて其今日の日本人種に於けるは米國に於て銅色人種の白皙人種に於けるが如くなるを以てせり、此時余は彼の雙眼が二倍の光輝を放てるを見受けたり、余は彼の特愛問題に當りしなり、是に優るの重要問題は彼に取ては他にあるなし。

嗚呼然る乎、其數幾千？

大凡一萬六七千なり、北方蝦夷島に住す。

日本政府は之を開明に導かんが爲に如何なる方法を取りつゝあるや？

特別の方法とてあるを聞かず、普通小學教育を施しつゝあるも未だ遍く彼等の内に及ばざるが如し。

問答は益々活潑となれり、彼は「アイノ」人種退減の有樣を聞て涙を流せり、彼は其「アリユート」人種に近きを聞て一層の推察を表せり、彼れ終に叫んで曰く、「余は一度び

は必ず貴國に抵りて余の友人なるアイノを見ん」と、蒙昧可憐のアイノ人、彼等は此處に推察に富める一友人を得たり。

我等の話頭は轉じて日本人種と亞米利加土人との人種的關係に及べり、米亞兩大陸の地理學的に接近するより、兩人種の容貌骨格の相類似するの甚しきより、廉耻を重んじ信義を厚ふする兩者共有の特性より、日米兩人種は相距る遠からざる親類なるを論究せり、談笑に至て對話の興味は益々其深奥に達せり、彼は曰へり

君にして此言をなす、以て余の事業の益々多望なるを知る、余の國人（米國人を指す）は概ね銅色人種を見て殆んど禽獸に均しきものとなし、彼等を文明に導くの愚を嗤ひ、彼等を根絶するの利を說くものなり、然れども誰か日本人と均しき特性を有する斯民を以て文化に誘ひ得ざる者となす、君にして亞米利加土人と類似人種たるを公言するを耻となさず、君の義氣土人の榮譽夫れ幾千ぞや。

と、余は信ずブラット氏の日本と戀ひ慕ふの念は此時に始まれりと、彼は一生を銅色

人種の辯護救濟の爲に委ねたり、彼は永く社會の嘲弄冷遇を斯不幸人種の爲めに忍べり、今や彼は彼の事業を辯明するの一大材料を得たり、亞米利加土人は日本人に類似する民なりとせば前者の開明は期して待つべしと。

プラット氏の履歴

彼は彼の履歴の概略を語りて曰く、

余は武官なり、夙くより土人征討に從事せしものなり、余は屢々彼等の領土に攻め入り兵を指揮して彼等の村落を燒き、彼等の勇者を殺戮せり、然るに曾て南方セミノール族を討ちし時余は料らずも土人の小兒二人を生捕せり、余は之を見て惻隱の情に堪へず、意ふ是亦上帝の子供、余の同胞にあらずや、何ぞ之を殺すを輟めて敎育誘導するを圖らざると、新思想は今は余の全心を奪ひ去れり、日を經て余の確信は益々强固を加へたり、余は劍を放棄して土人の師父となるに決せり、

是れ余の此救濟事業の發端なり、

と、而して彼は尙ほ語を續けて劣等人種撲滅の非理を說き、且つ經濟的に算するも彼等を慈善的に誘導訓化するの遙かに優れるを述べたり、彼の肺肝より流れ出づる是等の言は如何に余の全身全思を刺動せしよ、今や流涙を終り故山に歸らんとするに當て此人道的大福音を聽くを得たり、余は思はず感謝の涙に溢れたり。

所謂會

夕飯を彼の家族と共に喫し、尙ほ數刻の談話の後、鐘聲全校に響き渡りて所謂會の時間に至りぬ、プラット氏は已に余を此夜の辯者と定めたり、彼に導かれて高壇に上れば余の目前に奇異なる面貌の配列するを見たり、敎師職員は悉く敏腕屈指の白皙人種なり、然れども其生徒たるもの〻全躰、其軍服を着けたる軍曹下士の如きもの、是れ白色碧眼の人にあらず、其類骨の角立ちたる、其頭髮の濃黑なる、其眼形の巴旦杏形なる、何ぞ我同胞に肖る酷だしきや、彼なるはアパチー族、フロリダ半島の澤中に住せしもの、是なるはチエロキー、チヨクトウ、チカソウの族、キマロン河邊に彷徨ひしもの、彼はロッキー山頂チエンに獲しもの、是は遠くアラスカより送り來りしもの、全群凡そ六百餘名、銅色人種の全部を代表し、今や余の不完全なる英語の演說を聽かんとて集ひ來りしなり、家鄉を辭して玆に四年、邦人を見ること甚だ稀に、然るに今この類似の民に接す、嗚呼汝も亦白皙人種の橫行に苦しみ、其掠奪を忍び、其貪慾の犧

日本起て亞細亞を救ふの時

性となり、今は逐はれて居を失ひ、山野林澤に幕を張るもの、我何ぞ相憐推察の情なからざらむや、天に正義の神あり、冀望の時は汝に幾し、日本起て亞細亞を救ふの時は亦汝の頭を擡げ得る時にして我今汝に接して我が責任の益々重且大なるを知る、余は二時間餘の長演說に日本の位置と希望と天職とを述べ、心大に滿足する所ありて壇を下れり。

* * * * * * *

巡覽

初めの十二時間は過ぎぬ、余は寢室に送られぬ、プラット氏は曰へり「明朝四時余は君を起すべし、余は十二時間内に余の事業の渾てを君に紹介せざるべからず、我等は睡眠に多くの時間を消費するを得ず」と、客夢一睡するかと思へば、主人公は已に余の寢室の戶を敲けり、余は應じて起ち、燈光に早膳に與かり、直ちに巡覽の途に上る、彼は先づ余を導ひて食堂に抵り、數百の銅色男女が靜肅に朝飯を喫するの狀を見る、次に庖厨、次に麵包燒場、次に洗濯室、次に浴室、次に寢室、次に藥局、次に病室、次に新築の體操場に至れば、百餘の躰格逞ましき壯士が各々兩手に棍棒を提げ、我等の來るを持ち構へつゝあり、我等階段の上に立てば一令下りて二百の手腕は一時に擧り、動作整然勇壯言はん方なし、次て武器室、次に職工場——最も壯宏を極めたり、——終に教場に至れば新英洲より招かれし數人の女教師が簡易なる英語を以て叮嚀反覆普通教育を授けつゝあるを見たり、巡覽了てプラット氏の事務室に至れば終り半日は僅かに二三時間を餘すのみ。

最も有益なる廿四時間

最も有益なる二十四時間は過ぎぬ、余は銅色の兄弟に送られて停車場に至り、グチスブルグよりの列車を取り、東走半日、再び費府に於ける余の恩人の家に投ぜり。

一日にして數年の價値を有する一日あり、一年にして一日の價値を有せざる一年あり、プラット氏と共にありし一日は余に取りては數年の價値を有する一日なりき、そは教育上の新思想は彼に依て此短時間内に余に傳へられたればなり。

プラット氏のカライル主義

所謂「プラット氏のカライル主義」とは他なし、心を訓化するに周圍の感化力を以てするにあり、プラット氏は唯物論者にあらず、否な彼は熱心稀に見る所の基督信徒なり、彼の慈善事業は全く彼の宗教心の發動より來りしものなり、然れども武人たる彼は非

先づ開明的生活を供す

常の實際家なり、彼は野蠻人を導くに教理のみを説くの全く無効なるを知れり、先づ開明的生活を供するにあらざれば開明的思想を注入するの難きを知れり、是れ彼の土人畜陶法の幾多の理想家と全く趣を異にする所以なり。

故に土蕃の一群の始めて彼の許に送附せらるゝや、彼は直ちに其頭髮叢林の如きものを調理せしめ、文明人の衣服を供し、堅く蕃語の使用を禁じ、各自適應の職業を授け、清潔なる、秩序ある生涯に就かしむ、

彼の目的

然れども是れブラット氏の事業の一斑を窺ふに過ぎず、彼の目的は米國土人三十萬を化して悉く基督教的開明人種となすにあり、彼の訓育の下に成長せし銅色人にして今は醫士となり代言人となりて白皙人種と生存競爭をなしつゝあるものあり、彼は開明人を離れて土蕃を住居せしむるの非を唱ふるものなり、人種的區別は米國人たる彼の政治思想と基督信徒たる彼の宗教心が共に激しく反對する所なり、「同一の境遇を供せよ然らば蕃人も開明人たるを得べし」とは彼の確信なり、而して彼は米人の輿論に抗し、開明の中眞に土人學校を設け、開明的境遇の中に蕃兒を訓化しつゝあり、ブラット氏の精神を有せざる教育者にして周圍の改良のみを以て人物養成を計るものは失望せん、然れども徒らに空理を講じ、神學と稱して正直なる人士を欺き、尙武主義とか稱して滋味の効、衣服の儀を忘るものは教育の實を擧ぐるを得ず、新英洲學校生涯は鹽より肉に達するの道を余に教へたり、カライルに於ける一日は肉に依て鹽を化するの原理を傳へたり、人を作るの術は實に此二法の適用にあるなり。

彼の確信

何故に大文學は出ざる乎

時勢と文學　以太利復活の大風雲はダンテを産せりアリオストを産せりダッスを産せり日本大膨脹の下一の大文豪を産するなき耶（國民新聞第千六百十九號）

大文學出でず

大文學は出ざる乎、大文學は出ざる乎、吾人は希臘の古哲に倣ひ、日中提灯を點じて都の大路を廻り歩くも大文學者に接せざるなり、日清戰爭始て大文學出でず、連戰連勝して大文學出でず、戰局を結んで大文學出でず、大政治家あり(?)、大新聞記者あり(?)、大山師あり、大法螺吹きあり、然れども大文學者はあらざるなり。

中文學なし小文學なし

出るものは佛國革命時代の所謂「三十錢文學」なり、否な、二十錢文學なり、十錢文學なり、六錢文學なり（國民之友の實價なり但し割引あり）、掃溜雜誌なり、法螺吹き雜誌なり、乾燥礫を嚙むが如き理屈雜誌なり、青年文學とか稱する懶惰書生の寢言なり、大文學なきのみならず中文學なし、小文學なし、然り若し文學とは思惟の創作を言ふならば今日の日本に文學ありと言ふを得る乎、王子の製紙會社の收益多きは必しも文運隆盛の徵にあらず、活版屋の小僧の繁忙なるは必しも思想界の繁劇を證せず、或人今日の文學を稱して反古紙製造なりとなし、著述業を呼んで活版屋の奉公なりと曰へり、余輩は此言の全く虛妄ならざるを知るなり。

反古紙製造

那威の小なるも尙ほイブセンを有するに非ずや、洪牙利は吾人と人種を同ふして尙ほモラウス、ヨーカイを有するに非ずや、露國の未だ代議政躰を有せざるに已にプーシキン、レルモントフの誇るべきあるに非ずや、然るに膨脹的大日本に一大世界的文學者あるなし、宜なり日本膨脹論者が彼の持說を吹聽するに當て痛く此大欠乏を感じ、聲を張り擧げ筆を尖らかせ、毎日毎號大文學者の產出を絕叫するや。

汝の失望の理由

然れども、オヽ日本膨脹論者よ汝は大文學者を得ざるなり、汝の聲は野に呼べる人の聲なり、余は恐る汝世の終りまで絕叫するとも今日の儘の日本よりは一ダンテ一ゲーテはさて置き一ボーボーゴールドスミスをも得ること難からん、乞ふ余をして爰に汝の失望の理由を述べしめよ。

文學とは高尙なる理想の產なり（汝の能く知る如く）、文字を美術的に併べ立てたとて

憂悶苦痛の中に產出せしむ

文學にはあらざるなり（汝の能く知る如く）、故に理想なき處には文學はあらざるなり（汝の能く知る如く）、大文學は吾人の誇る富士山の如きもの、園藝師の細工にはあらざるなり、天の靈來りて吾人の心靈に宿り、之を擾亂し之を鎔解し、之に形を與へ、終に憂悶苦痛の中に吾人をして之を產出せしむ、內に大魂の動くあり外に大氣の應ずるありて、始めて大文學は產るゝなり、之を出すのプリンシプルなく、之を受るの社會なくして大文學は如何にして產るゝを得んや。

敢て問ふ過る十年間の日本は如此原動力を養ひつゝありし乎、吾人は愛國心の養成と稱して吾人の青年に多くの和文を暗誦せしめたり、故に彼等は源氏物語に倣て能く艶文を綴り得るなり、溫良なる民を作ると稱して吾人は彼等に兵隊的服從を敎へたり、故に彼等に獨創の意見あるにもせよ彼等は謹んで口を開かざるなり、否な、彼等は多くの實例を以て獨創の意見を懷くの不利と危險とを敎へられたれば、彼等は平凡的多數と歩むを知て反俗的小數と共にせざるなり、吾人は吾人の冀望通りに吾人の青年を仕立たり、彼等は能く吾人の命令に聽けり、故に彼等はダンテ、シルレル、カージイルたる能はざるなり、否な決して能はざるなり。

世界的思想の成體

抑も大文學なる者は世界的思想の成體なり、ダンテの作は「歐洲十一世紀間沈默の辯護なり」と云ひ、シエクスピヤの作は「人情の福音」なりと云ひ、ゲーテのフハウスト曲は「世界的聖書」(Welt-bibel) なりと稱す、個人的精神の上に、國民的精神の上に、世界的精神なるものありて、之を吸收し、之を消化し、之を形成して世界的文學は出るなり、常に下界に彷徨し、世俗と交はり、平々凡々他と異ならざらん事を求むる者にして、如何で能く雲層を貫き、三階の天上に登りて其美音を採り來り得んや、肉に由て生るゝ者は肉なり、靈に由て生るゝ者は靈なり、ダンテ、アリオストの世に出しは豈偶然の事ならんや。

世界的思想は吹入されつゝあるや

然るに日本今日の思想界を視よ、世界的思想なるものは何人に由て何處に於て吹入されつゝあるや、博愛は愛國に害ありなどゝ云ふ戲言が堂々たる學堂に於て說かれつゝあるに非ずや、吾人の注意は國文攻究の上に留まれり、支那學の上達は吾人の羨む所なりし、余輩は甚だ之を喜ぶ、是れ吾人の正になすべき事なればなり、然れども所謂

世界文學なる者の攻究に至ては吾人の殆んど全く忘たりし所、幽邃なる印度思想の吾人の中に存するにもせよ是れ佛家少數の專有物たるに止て國民全躰の思惟に上らず、而して世界の公評が許して以て世界思想の泉源なりと稱する希伯來文學は吾人の中に何程の價値を有するや、ダンテを學ぶ者吾人の中に幾人かある、ホーメル、ユスキラスは吾人の研究する所なるか、沙翁の名今や何人の唇にも上ると雖ども吾人の中幾人が彼のハムレット劇を解し得るや、ゲーテ、ゲーテと叫ぶと雖ども民友社の十二文豪を除て此夥しき我國の近刊中彼を論述せし昔は何處にあるや、吾人はテニソンの心を解するや、吾人はローエルの秘密を探りし乎、イブセン、プーシキン、トルスト非の作は我國讀書社會の嗜讀物なる乎。

故に世界的大文學は出ざるなり

此國民に向て世界的大文豪出でよと叫ぶ、オヽ、日本膨脹論者よ、汝は木に向て魚を出せよと叫びつゝあるなり、蕨蕨に向て無花果を與よと叫びつゝあるなり、日本國は世界的精神を養はざりしなり、故に世界的大文學は彼より出ざるなり。

オヽ日本膨脹論者よ、汝は高尚天外に響き渡るが如き凱旋歌を求むる事切なるが如し、

日本勝た

予は今茲に之を汝に供すべし、

日本勝た、日本勝た、支那負た。えらい奴ぢや、臺灣取た、えらい奴ぢや、償金取た、負なよ、えらい奴ぢや（大坂人士の祝勝歌）。

是れ實に夫のミリヤムの凱歌に比敵すべきもの、詩人ブイアントの「自由」の一句も實に之には及ばざるべし、日清戰爭は義戰、人類の爲の戰爭、文明の爲の戰爭、東洋救濟の爲の戰爭、即ちグスタフ、アドルフの獨逸戰陣の如き者、ワシントンの米國革命軍の如きものなりとすればこそ、吾人の心琴に天の美樂の觸るゝありて高尚美嚴の言語は出るなれ。

吾人の浮氣なる事

吾人は然か言ふ、吾人の浮氣なる事は大文學の吾人より出ざる一大理由なりと、Das Leben ist ernst、「人生は眞面目なり」、是れ詩人シルレルの精神なりし、ラベナの人は詩人ダンテを指して曰へり「自身地獄に到りし人を見よ」と、而して慘憺たる彼の畫像に對して誰れか無量の悲涙と憂苦とを認めざるものあらんや、シエクスピヤの常に杭爽なるに關せず、彼の曲作に憂愁言ふべからざるものあるは人の能く知る所なり、

ミルトンの作を解せんとするものは先づ彼とピユリタン派の宗教を解せざるべからず。

"I live, you know where,—in Meshec, which they say signifies *Prolonging*; in Kedar which signifies *Blackness*: Yet the Lord forsaketh me not"

余の住家は君は知る、我は遲延と稱するメシエクに在り、暗冥と稱するケダルに住す、然れども神は余を見捨たまはざるなり、

是れクロムエルの宗教なりし、而してミルトンの傑作は此憂憤愁悶の情を韻文に綴りしもの、彼の淵源に透達してのみ是の淨泉は湧き出しなり。

文人とは「粹なる人」を言ふにあらず、彼は花柳に遊ぶを要せず、否な決して遊ぶべからず、文學とは眞面目なる職業なり、勇者の職業なり、文學は戰爭なり、酬に對する戰爭なり、不義薄情媚俗ゴマカシ主義に對する戰爭なり、筆硯の業を以て隱居仕事と見做し、文人を目して閑雅風流の人となす社會に於ては大文學は出ざるなり、カーライル曰へるあり「雄編大作は常に憂鬱の氣を帶ぶ」と、ユーゴの作然り、イブセンの作然り、レッシングの作然り、カーライル自身の作甚だ然り、ダンテの作非常に然り、山陽の作然り、司馬遷の作亦た然り、深く憂へざる民は大文學を有つ能はず。

大文學の出ざる理由斯くの如し、然れども試に吾人の中に一ダンテありと假定めよ、而して彼は「聖劇」を草したりと假定めよ、オ、大日本膨脹論者よ、汝は今日の日本讀書社會は其世界的大傑作たるを認め得ると信ずるや、よし民友記者の如き先見卓識の人士ありてダンテのダンテたるを識別し得るにもせよ、記者の常に喜ばせんと勉めつゝある日本の思想界はダンテを歡迎するの用意ありや、今彼の「聖劇」を繙き其二三の句を引て此點に關する論者の高說を聽かんと欲す、

（余は十九世紀末期の日本に生れ來りてダンテを彼の原語に於て讀む能はざるを恥づ）、

To rear me was the task of power divine,
Supremest wisdom and primeval Love.

（クリー氏の英譯に依る）、

醜に對する戰爭なり

深く憂へざる民に大文學なし

余を築くは大能者の業なりし、

最上の智慧と原始の愛の、

吾人の「えらい奴」は如何なる感覺を以て此一句に接するや、「宇宙の全力」、是れ如何なる隱語なるぞ、「最上の智慧」とは國會議員の多數決にはあらざるべし、「原始の愛」是れ今日の日本人を樂しむる文字なる乎、ダンテよ汝の寢言を休めよ、吾人は汝を解せざるなり。

So I beheld united the bright school
Of him the monarch of sublimest song,
That o'er the others like an eagle soars.

ダンテよ、汝詩聖ホーメルを吾人に語るも益なし、そは我等日本人は未だ希臘文學を以て野蠻人の文學の如くに思ひ、未だ國民一般に之を研究せざればなり。

For I am pressed with keen desire to hear
If heaven's sweet cup, or poisonous drug of hell,

汝の詩歌は三味線に合すること能はざるなり

Be to their lips assigned.

「天の香はしき盃」、「陰府の苦き毒杯」……ダンテよ、我等はスペンサーを讀み、ベッシルを愛し、ベンダムを誦す、天よ陰府よと言ふことは我等は全く信ぜざるなり、足れりダンテよ、汝の詩歌は三味線に合す能はざるなり！

斯くてダンテの折角の「聖劇」も書店の厄介物となりて存せん、「お菊」「三日月」の類は七版を盡し八版を呼ばん、天下の同情は「お菊」の七八版を重ねぬ、然れどもダンテの「聖劇」は塵埃の裡に蟄居せん。

ダンテ曾てカングランデ公の宴席に招かる、主客相對して飲むの際、幇間某頻りにそのオペッカを併べ立てゝ彼等を娛ましむ、主公はダンテに向て曰へり、

彼れ幇間能く娛樂を此の席に添ふ貴君の才能を以て吾人に一の快樂を供せざるは如何、

ダンテ冷笑公に答へて曰く、

人は凡て己に能く肖たる者を喜ぶなり

ダンテ在るも無用の長物のみ

と、彼はカングランデ公を喜ばすことを能はざりき、彼は今日の日本人を喜ばし得る乎。」

然りダンテの「聖劇」は今日の日本に於ては大々失敗なり、余は彼が十三世紀の伊太利に出て十九世紀の日本に出でざりしを彼の爲めに賀する者なり、縱令親切なる批評家愛山生の如きありて彼の著を社會に紹介するも社會は「お菊」「三日月」の類に行て「聖劇」をば問はざるべし、ダンテ若し今日の日本に在らば彼は無要の長物のみ。

大文豪を出すの思想なく、彼を迎ふるの社會なし、大文學の出ざるは明々白々たり、種子なくして果樹生ずべけんや、田圃なくして穀實らんや、膨脹子よ、大文學を打ち出す大黑天の財槌は此の宇宙には存せざるなり、奇蹟の時代は已に過ぎたり、今は原因結果の世なり、矢鱈に大文學を叫んで余輩に無益の心配を掛る勿れ。

* * * * *

然れども失望する勿れ膨脹子よ、吾人の今日大文學を有せざるは之を永久に產出し能はざるの理由にあらず、「ニーブルンゲンリート」を作り得し獨逸民族は「ファウスト」曲を生じ得たり、エダ (Edda) 作者の子孫はイプセン、ビヨルンソンを出したり、

然れども失望する勿れ

むらさめの露もまだひぬまきの葉に
きりたちのぼる秋の夕ぐれ

を咏ぜし大和民族は無邊の宇宙を歌ひ得るなり、

梅の花春よりさきに咲にけり
見る人まれに雪はふりつゝ

是れウォルツオスの作かと疑はる、

言の葉の玉ひろはゞや秋の夜の
月に明石の浦つたへして

清淨斯の如きの情、是れダーテ、ベーンスの心ならずや。

大文學の地質確かにあり

大文學の地質吾人にあり、確かにあり、要は世界精神の涵養と注入とにあるのみ、如何にして之を爲さん乎、是れ余輩の次回の論題なるべし。

大文學を有するは國家の榮光なり

大文學は天賜なり

如何にして大文學を得ん乎

大文學を有するは國家の榮光にして威嚴なり、英國は其印度帝國を以てするよりも其チヤウサー、シエークスピヤを以て誇り、セルバンテースを有する西班牙は尚ほ世界の尊敬を惹て止まず、カモエンスの「ルシアツド」あるが故に葡萄牙國は賤められず、イブセン出で區々の那威も學者の注意に上り其國語は競て究めらるゝに至れり、歴山王の事蹟は消へてピンダー、アリストフハニスは猶ほ世界を感化しつゝあり、武力の及ぼす所は狹くして短かし、文力の及ぼす所は廣くして永し、兵を增さん乎、文を修めん乎、我若し永久に宇内を斫り從へんと欲せば我は文を修めんのみ。

大文學は天賜なり、吾人欲して之を得る能はず、若し求めて之を得べくんば何物か其價ならん乎、

智慧は何處よりか覓め得ん、
明哲の在る所は何處ぞや、
人その價を知らず、
……
精金も之に換ふるに足らず、
銀も秤りてその價となすを得ず、

吾人を詩神の器となすにあり

博士と政治家とは祿と爵とを以て招くを得べし、而も詩人は神の特賜なり、彼は所て得べし、招きて求むべからず、曾て聞く亞拉比亞人は彼等の中に詩人の降るあれば郊祭を設けて天に謝せりと、只講座を設くるを知て天才を遇するを知らず、空功を賞するに急にして實德を認むるに鈍き國民にして、焉んぞ能く大文學を產むを得ん乎。然も吾人の天より是を授かるの途なきにあらず、大文學を得るの途は吾人を詩神の器となすにあり、我に天來の思惟に接するの資格なかるべからず、之を寫出するの技倆なかるべからず、我にして此資と技とを有せん乎、宇宙は皆な咸く聖樂、我の心琴一たび天の美音に觸れて雅韻我より流れて止まず、詩人ダンテは曰へり、

余は愛の書記なり、彼れ語る時に余筆を執り、彼の言ふ所を余は記載す、

と、然り愛の書記たるなり、如何にして愛の書記たるの資格を得ん乎、是れ余輩の實

文躰

冒瀆の下病
症思想の結塞病

根本的修文術

際問題たり。

文躰

ゲーテ曰へるあり「眺れの美術も多少の機械的鍛錬を要す」と、美術の長たる文學にして此用意習練を要する事は言ふまでもなし、大高源吾の「鶯の初音を聞く耳は別にしておく武士かな」は其意に於ては已に高尚絶妙の詩歌なりと雖とも未だ美術的文字と稱するを得ず、其後彼の技、彼の心に應じて「武士の鶯聞て立にけり」となるに及んで勇壯絶美の俳句は世に出たり、文はかざりなり、生硬無飾の思想に文學の名は附すべからず。

然れども今は文飾欠乏の時代にあらず、今や社會は言語の下痢症と思想の結塞病とを患ひつゝあり、人は美文家を羨んで思考家を尚ばず、然り吾人の思惟は言語饒多の爲めに壓せられつゝあり、曰く誰の文躰、誰の配字法と、流暢華奢の筆を弄し得れば何人も文人たるを得べしと考へらる、此時に方て余輩は多く修文術の緊と要とを語らざるべし、文字素是れ思惟の產なり、思惟を養ふの術是れ根本的修文術なり。

世界文學の攻究

或人曾て英國の論文家ジェームス、フルードに問ふて曰く「君の優雅流利の文、君夫れ何れの文躰に依るや」と、フ氏答へて曰く「余は余の知る事實を最も解し易き英語を以て記するのみ別に文躰の依り學ぶべきなし」と、言語は「ことば」(事端)なり、我に言はんと欲する事實ありて之を言ひ顯はすの語に乏しからず。

世界文學の攻究

世に世界文學なるものあり、是れ一國の產にあらずして世界の共有物なれば然か稱するなり、希伯來人の聖書の如き、ホーメルの二大作の如き、ダンテの聖劇の如き、シエークスピヤの劇作の如き、世界聖書(Weltbibel)と稱せらるゝファウスト曲の如き、其數多分一手の指を以て算すべし、是れ實に人類の有する至大の珍寶、帛玉山を築くも其一の價に當らず、人生は實に是れあるが爲めに貴し、太古時代にして其バイブルを世界に供せざらん乎、七大帝國の興廢は收めて春宵の一夢に過ぎず、アリヤン人種の起原と翼望とは籠めて盲詩人の二作にあり、幽暗千百年の長きに亘りて歐人叫號の聲はダンテの三編一百章となりて存す、海の洋々たるは沙翁の宏濶なるに及ばず、新文

五書を知るは世界を知るなり

明三度世紀を重ねてヴァイマー詩人を産めり、高からんと欲せば希伯來聖書に行き深からんと欲せばダンテの跡を踐み、廣からんと欲せば沙翁の眼に頼り、英氣をオデシー、イリヤットに汲み、圓滿をゲーテのフハウストに覓めん、五書を知るは世界を知るなり、是を解するは人生を解するなり、天地の大氣は粹然として此書に鍾まる、大文學の志望あるものは深く此泉に汲まざるべからず。

希伯來聖書

希伯來聖書は其物自身にて一大文學なり、其記載する事實の眞僞は措て問はず、其文の簡潔透明なる、其意の美麗なる、ダンテ其句を借りて天國を畫き、ミルトンの寇族亦た其記事に依る、マコーレーの文勢は彼の著しき聖書的智識より來れり、リヒテル、ノバリスの奥妙も此の舊記の供する所たり、シエークスピヤなり、ゲーテなり、コレリッヂなり、彼等は皆成く緻密なる聖書學者なりし、我邦の文士にして彼等の宗教的偏執に阻げられて此世界文學に接するもの尠きを悲しむ、是を其原語に於て學ぶは吾人多數の爲し能はざる所なるべしと雖も、吾人に數種の支那譯と雅訓頗る味ふべき日本譯の供せらるゝあり、之を其英譯に於てするは同時に標準的英語を學ぶの裨益あり、其ルーテルの獨逸譯は近世獨逸文學の泉源なりと稱せられ、其佛譯は流利にして最も能く原意を寫すと云ふ、是を究むるの途此の如く備はる、余輩は大方文士の攻學を促がす。

余輩は以上の五大書を指て他に大著作なしと言はず、歴史に於てはヘロドートス、政治に於てはアリストートル、悲劇に於てはエースキラス、歡劇に於てはアリストフハニス、宗教に於てはアウガスチン、能辯に於てはピンダー、デモセニース、近世に下りてはセルベンテスの諸龍竭きざるあり、リヒテルの豐饒量るべからざるあり、カライルの圭角峻峭俗人の膽を寒からしむるあり、余輩は必しも舊を尚んで新を疎ぜざるべし、要は大著作を讀むにあり、小著作を忌み嫌ふにあり、聞く現今世界無數の書中出版後第一年の終りを見るものは千中三百五十に過ぎず、百五十は三年の終りに消へ、僅かに五十が七年の終りを見るを得べしと、(大なる日本は例外なり!!)、故にデクシーは曰へり「年は其文學の葬式を行ふ」と、ホイツプルは曰へり「人は思想の製造者たらずして書物の製造者たるを得べし」と、若し世に存する標準的文學を讀み悉さんと欲せば三千年の時日を要すと、吾人の生命に限りあり、書物の製造に限りなし、然るに吾人は常に多く何を讀みつゝあるか、ベイブルか、ダンテか、若しくは……

要は大著作を讀むにあり

自然の觀察

自然の觀察

思想は思想を透して來る、始めに天よりの直感あり、後は天啓の註釋詳明に止る、ホ

創作は過去完美は未來

ゲーメル一度歌て吾人の之に改善の加ふべきなし、吾人は僅かに新調調を以て彼の秘曲に和するのみ、倫理は猶太に於て悉き、美術は希臘を以て達せり、言ふ勿れ凡ての進歩は未來にありと、創作は過去にありて完美は未來にあり、古き眞理、新らしき學術、是れ進歩なり、全智識なり。

大文學を讀むの要此にあり、自然を究むるの要亦た此に存す、前者は精神を供し、後者は事實を給す、ダンテの人生解は永遠の眞理なり、彼の宇宙觀は今は中古時代の陳腐科學たるに過ぎず、彼の精神を新學語を以て綴らんとする、是れ吾人の事業なり。

自然に關する智識の張大は十九世紀の特功偉業なり、遠きは恒星星雲に及ぼし、近きは地層海底に到り、一莖の草一塊の土、顯微鏡的攻究を經ざるは稀なり、科學は自然の極美と無限大とを示せり、詩歌の區域今や宇宙の極邊に達せり。

昔は山を吟じ川を歌ひたり、今は一滴の水千句の好題目たるべく、一塊のアメーバは哲學的詩歌百篇の價値あり、慧星の運行恒星の配列共に高遠なる新詩題なり、若し地質學を歌はん乎、岩に韻あり化石に雅樂あり、豺狼蟒蛇を讃歌に編し、血液循環を雅

大詩人は自然の觀察者

曲に謳ふに至るも未だ以て知るべからず、花を咏ぜんとするものは吉野に遊ぶを要せず、野邊の雜草に全智の穿つべからざるあり、敬虔以て自然に接する者は石として雅韻ならざるはなく、草として詩題ならざるはなし、悲むべし當代文墨の士、古人を友とすること多くして自然と交はること尠きや。

故に大詩人は常に注意深き自然の觀察者なりき、詩の最も古くして最も大なるものは希伯來聖書の約百記なり、是れカーライルが評して「高潔なる書、萬民の書」と絶呼せしもの、古來より高調未だ曾て是に及ぶものなし、何物か左の壯句に優るものあらんや。

爾昴宿の和氣を繋し得るや、
參宿の帶を解き得るや、
爾十二宮を其時に應じて出し得るや、
北斗と其子星を導き得るや、

ダンテに至ては中古時代の地理天文博物心理の諸學にして一つとして彼の大作に編入せられざるはなし、例せば

群鶴列を亂さず、悲鳴を唱へて空を翔るが如く、余は靈魂が泣き叫びつゝ其悲境に向て進み行くを見たり。

地文學的密察に左の如きものあり

夫のアディゲの河岸トレントの邊、亂石白練を屑にする處、山裂けて柱石の支ゆるなく、醜岩谷を埋めて僅かに一徑を餘すのみ。

若し中古時代の天文學に腦を惱ますことを望む讀者あらば左の一句の如きは好的例なるべし（余はクリー氏の英譯の儘を載す。）

Were Leda's offspring now in company
Of that broad mirror, that high up and low
Imparts his light beneath, thou mightst behold
The ruddy Zodiac nearer to the Bears
Wheel, if its ancient course it not forsook.

ゲーテ

ゲーテが非凡の解剖學者にしてダーウヰンに先つ五十年已に進化論の樞點に達せし事は人の能く知る處なり、然れども彼の特技は氣界の現象を敘するにありしが如し、

Der alte Winter in seiner Schwäche
Zog sich in rauhe Berge zurück.
Von dorther sendet er, fliehend, nur
Ohnmächtige Schauer körnigen Eises
In Streifen über die grünende Flur.

冬已に老ひて力盡き、　山里指して逃げ去れり、　只なり〳〵にいと脆き、
其射る雹の後ろ矢に、　青き野原は白みけり、

北地氷雪の裡に寒を送るものにして誰か此句の適切至當なるを感ぜざるものあらんや、ハルツ山中の夜嵐、アルプス山腹の朝霧はゲーテの描寫を以て物理學的原理を詳明するに足る。

然れども自然の專門詩人は英の詩伯ヰリヤム、ヲルヅヲスなり、彼に因て自然は新註解を得たり、單に例證として引用せらるゝに非ずして、僅かに景を供ふるに止まらずして、自然其物が精靈を有するものとして世に紹介せられたり、人は神に像りて造られ、自然は神の可覺的自現（Self-revelation of God）なり、神は心靈の奥殿に於て拜するを得べく、亦自然の外殿に於て其聖貌を伺ふを得べし、此天此地素と是れ淨土、我

箇は神の聖殿に棲息す、世界の人其前に靜かなるべしと、是れ余輩が解してチルヅチス主義となす處、其吾人の自然に關する思惟を聖化し、吾人をして乾坤抵る所神に接するの感あらしむるや實に大なり、シユークスピヤの所謂「草木に聲あり川流に著作あり」との言はチルヅチスに於て事實となれり。

此心を以て自然に接す、自然何物か詩歌ならざらんや、彼冒て杜鵑を聞て左の句あり、

Often as thy inward ear
Catches such rebounds, beware—
Listen, ponder, hold them dear;
For of God—of God they are.

意を留めよ爾の心の耳朶に反響此の如きものゝ觸るゝ時、靜謐熟思して心に收めよ、是れ神の聲—神の聲なればなり、

春寒漸く去るの候、路傍に蓮馨花の咲けるを見て左の壯句あり、

Sin-blighted though we are, we too,
The reasoning Sons of Men,
From our oblivious winter called
Shall rise, and breathe again
And in eternal summer lose
Our threescore years and ten.

罪に枯死する我等と雖も、亦た道に濟る人の子なり、苦寒堅氷の冬より呼ばれ、起て陽和の正氣に沐し、清爽限りなき夏に、古稀の憂慮を沒せざらんや、

一莖の野草、七十の老詩人に此冀望の讃美歌を供す、有名なるThe Excursion, Laodamia, Evening Ode等皆な此類なり、「全地は冀望の美を裝ふ」、詩人チルヅチス出て自然は靈化されしの感あり。

チルヅチスは千八百五十年ライダル山に於て世を逝れり、後九年にしてダーウヰンの大著作「動植物原種論」出たり、此書一たび出てより自然の秘密は全速度を以て追究せられたり。十九世紀後半期に於ける自然學の進步は人類の歷史過去六千年間に於ける其進步に優ると謂ふべし、地質學は改造され、動植の二學は新たに生れしの觀あり、礦物結晶水理の諸學、生理解剖組織の諸科、一として絕大の張大を見ざるはなし、斯く

て物學は心學を壓するに至り、詩學は科學に呑了せられたり、吾人は自然に於て詩歌的意識を認めざるに至りしのみならず、詩歌に施すに科學的解剖を以てするに至れり、余輩は言ふ詩歌の零落實に今日の如きはなしと、人は迷信的たらん事を怖れて詩歌的羽翼に駕してイマヂネーションの飛翔を試むるものなし、歌へば夏の蝗虫の如く臭土に頭を突き入れて微かに悲鳴を發するのみ、然れども人は尚ほ人なり、彼は萬物の靈にして自然の奴隷にあらず、ヲルヅヲスが彼の時代の科學を詩化せしが如く吾人もダーウヰン、ライエルの學を詩化すべきなり、保羅、彼得の思想は進化論者の學語を以て敘述すべからざるか、ダンテの聖劇は近世科學を以て編すべからざるか、天よりの默示は杜鵑と蓮華花のみに存してアメーバ、バッチルレンスに存せざるか、勇めよ、我が詩歌の友よ、ダンテに勝る名譽の業は吾人の肩に掛るにあらずや。

ダンテに勝る名譽の業

師父ゲルベー(Abbe Gerbet)曰く

用なき抽象の塵は拂はれ、昔時の信仰は新科學の圓光を以て顧はれん

と、而して此冀望今や已に實成されつゝあるなり、テニソンの詩作に新科學の芳味あるは人の能く知る處なり、ダーウヰンの學友進化論の泰斗たるアルフレッド、ワラス氏は彼の自然陶汰論第三百六十八頁に左の一詩を引用せり、

ワラス氏引用の詩

God of the Granite and the Rose!
Soul of the Sparrow and the Bee!
The mighty tide of Being flows
Through countless channels, Lord, from thee.

It leaps to life in grass and flowers,
Through every grade of being runs;
While from Creation's radiant towers,
Its glory flames in stars and suns.

花崗石と薔薇の神よ、　燕雀と蜂蜂の靈よ、　生命の潮流は汝より出て、
無數の受器に充ち、　碧草玉花となりて迸り、　生類各種の中に奔流す、
又日となり星となりて、　造化の高塔に燦輝を放つ、

W. R. Gilder 氏の作に係る左の短編の如きは近世の造化說を歌ひしものなり、原文の儘を記す、

如何にして大文學を得んか　百五十九

ギルダー氏の詩

I.

Star-dust and vaporous light.—
The mist of worlds unborn,—
A shuddering in the awful night
Of winds that bring the morn.

II.

Now comes the dawn—the circling earth,
Creatures that fly and crawl;
And man, that last imperial birth,
And Christ the flower of all.

詩人の天職愛にあり

言を休めよ詩歌は科學の反對にして前者の優雅なるに對し後者の乾燥無味なるありと、科學勿論柔軟文學者の氣儘勝手を許さず、科學に紀律あり嚴則あり、然れども嚴なるが故に愈優なり、婀娜なる小女の美を賞するは「粹人」の業なり、電光に噴火山に地震に颶風に愛と調和とを探ぐるは詩人の職なり、詩歌を科學に求るは愛を律に求るなり、即ち造化の中心に達し變を無變に解するなり、詩人の天職愛にあり、カーライル曰く「深く探れよ萬物悉く美曲なり」と、未來の大文學は敬虔を以てする自然の密察より來る。

未來の大文學

品性の修養

萬卷の書を讀み悉し乾坤を隈なく探り悉して吾人は大文學者たるを得る乎、若し然らば大文學は時日と勉學との結果なり、若し然らば百科全書は詩の最も大なるものなり、若し然らば大文學は貧乏人より望むべからず、若し然らばダンテは奇蹟なり、シエクスピヤは例外なり。

大文學は氣魄なり

否な然らざるなり、大文學は氣魄なり、大人物筆を採りて大文學出づ、吾人身自ら英雄たらざる以上は博士の年金も大學院の攻究も一雄編一大作を生む能はず。

大文學者の特性

人たることなり、人の面を怖れざることなり、正義を有の儘に實行することなり、輿論と稱する嗷々の叫に耳を傾けざることなり、富を求めざることなり、爵位を輕んずることなり、是れ大文學者の特性として最も貴重なるものなり、是れ有て彼の美文は教化の具なり、是無くして彼の修辭は詐僞の術なり、是有て自然は彼に讃歌を供し、

word は worth なり

詩は詩人より大ならず

是無くして造化は怪異たるに過ぎず、才あり筆ありて尚ほ未だ大欠乏の充すべきあり、正しく之を評すれば非德の文は文にして文にあらず、英語の word は worth（眞價）なり、我に眞實の語るべきありて我は言語を發すべきなり、我は咸く胡魔化しにして、我に不拔の確信なくして、我能く文を綴り得たりとて、是れ文にあらず、語にあらず、是れ荒唐なり、虛誕なり。

噴水は水源より高く上らず、詩は詩人より大なる能はず、ダンテ其人は聖劇よりも大なり、文の大なるは其著者の大なるが故なり、ビクトル、ユーゴー自白して曰く

余は半百年間散文に韻文に歷史に哲學に戲曲に落首に余の思想を發表したり、而して余は尚ほ未だ余の中に存する思想の千分の一だも言ひ盡す能はず。

エマルソンはカーライルを評して曰へり、

彼に接せざれば彼の氣力と技倆とを量るべからず、彼を知て彼の著述は僅かに彼の小部分なるを知る。

コッブ夫人詩人テニソンに接して曰く、

テニソンの詩は彼れ自身なり、彼と面晤して彼の詩の益々貴重なるを覺ゆ。

ゲーテを見よ、彼の四十卷の著作は彼の自傳と見て可なり、アポロの如き彼の容貌の下に口以て語るべからず、筆以て叙すべからざる心靈的大戰爭は闘はれしなり、

Vom Halben zu entwöhnen, und in Ganzen,
Guten, Schönen resolut zu leben

半成より脫却し、完全、完善、完美の生涯を送るに決す

と、是れ彼の一生の苦闘なりし、彼の著書は此戰闘線の一部のみ、

Wie das Gestirn
ohne Hast,
Aber ohne Rast,

星の如く、急ぐことなく、休むことなく

彼の使命を全ふして彼の事終はんぬ、彼の心靈的歷史を知らざるものは彼を以て單に天才の寵兒となせり、然かれども天才のみは「ヴヰルヘルム、マイステル」「フハウスト」等を作らざりしなり、心靈的實驗なり、心靈的勝利なり、是れ吾人が彼の著に於て最も貴ぶ所、是なからんか、ゲーテはシエリー、バイロンの輩と類を同ふせしのみ。」

文壇の秘訣

カライルを見よ、リトテルはルーテルの語を評して「半は戰鬪なり」と曰へり、カライルの語も亦然り、文學は彼の甚だ賤しみし所、彼他に活動の道を得る能はずして止むを得ず文筆に從事せしなり、「著書の業亦細事のみ、大なるは勇猛なる生涯のみ」と、彼れ曾て文壇の秘訣を述べて曰く、

汝の心より凡ての浮虛と泡沫とを全く拭ひ去れ、人何人か勉めて自由なる公明なる謙遜なる心を得ることを能はざらんや、汝之を得んが爲に弛まず戰ふべし、語らざるを得ざるの場合にあらざれば如何なる場合に於ても語る勿れ、報酬を思ふ勿れ、單に汝の語らんとする眞理を思へ。

彼の「法黨論」「過去及び現在」は懶惰貴族に對する下民の辯護なり、彼の「佛國革命史」は攝理を義とする大說教なり、彼のコロムウエル傳は誤解英雄の辯明なり、彼のフレデリッキ傳は時の不斷政治を憤りてより成れり、大義に强ひらるゝにあらざれば彼の筆は動かざりき、彼は筆を以てせし慈善家なり、筆の爲めに慈善を裝ふ當世流の文學者にあらず。

筆を以てせし慈善家

プーシキンを見よ、イブセンを見よ、ヂツケンスを見よ、愛と正義に動かされずして大文學の世に出でし實例ありや、心は腦に勝る觀察者なり、才學の見る能はざる所を愛心は透觀す、學は機械なり、情は生命なり、學有て文飾あらん規則あらん、然れども熱情の之を鎔解形造するにあらざれば詩歌なし音曲なし。

愛心は透觀す

文學的僞善、萬言立ろに成て一行擧らず、說を提するを知て之を行ふの實力なく、言語の下痢症、實行の糞づまり、小說家の歡迎、實記者の冷遇、文界此の如くにして大文學は迚も望むべからず、「粹人」は社會に賤視せられて其頭を擡げ得ざるに及んで、「風流人」は月花に痴歌を呈するを止めて、國人悉く誠實を尙び、品性は文に優りて尊敬さるゝに及んで、始て世界を風靡する大文學は吾人の中より望むべきなり、先づ人たれよ、文の友よ、ダンテを讀まざるも屈辱の奴族たる勿れ、文若し汝を虛飾に誘はば取て之を捨てよ、至誠汝を動かすにあらざれば大思想大文字は汝の有にあらず。

先づ人たれよ

汝知らずや、名工利刀を鍛ふるに方ては彼は潔齋沐浴し、淫を遠け、儀を正し、精を盡して鐵砧に對するに非ずや、筆は刀に勝る利器なり、汝の筆頭黑汁に染みて汝の志意を描かんとする時は是れ實に嚴肅なる時ならずや、汝は世を誑ちかさんとする乎、

實に嚴肅なる時ならずや

汝は社會に媚んとする乎、汝は名譽を買はんとする乎、將た亦た世を救はんとする乎、無辜を辯ぜんとする乎、正理を說かんとする乎、天意を盡さんとする乎、裁判の神をして汝の座側に在さしめよ。

インスピレーション

インスピレーション、神來の思想、天意は電氣の如く理化學上工夫を以て招くべからず、是に接するに惟清淨潔白天地に恥ぢざる心あるのみ、「心の清きものは幸福なり其人は神を見ることを得べければなり」、是れ豈惟り宗敎に於てのみ然らんや。

美學、美文學、美は其物自身に於て究むべし、倫理宗敎の啄を容るゝ所にあらずと、故に身を不淨の巷に汚がしても美を探るべし、心に正義を慕はざるも美は論ずべしと、嗟呼美の觀念此の如くにしてダンテは無用人物なり、希伯來聖書何の價かある、二十錢文學にて足れり、繪入小說にて足れり。

美を爲す事則ち美

Beautiful is that beautiful does 美を爲す事是れ即ち美なり、善行を稱して美事と言ふは是れなり、大石內藏之助を演ぜんとする俳優すら尙ほ一七日の坐禪的生涯を試るにあらずや、醜行は直に淨瑠璃語りの音聲に影響し彼の伎倆を傷るにあらずや、文學者獨り放恣にして美を覓め得るの理あらんや、然り非倫非德無主義無節操の文學者は忌み避くべきものなり、彼の文脉の麗利にして彼の句調の優美なるは反て彼の大危險物たるを示す。

古人の大著を究むるにあり、自然に眞理を探るにあり、自己を淸ふして天來の思想に接するにあり、是れ余輩の信ずる大文學を得るの途なり、余輩は此大問題を悉せしと言はず、然も余輩の論ぜし所の全く無益ならざるを信ず。

日本歴史に於ける最大疑問物

國民の特性彼を解するに適せず

日蓮上人を論ず（一）

日蓮上人は日本歴史に於ける最大疑問物なり、彼の特性の峻險劇烈なる、彼の行爲の大膽不敵なる、彼は大奸物として視るを得べく、大英雄として許すを得るなり、彼の如きは非常なる仰慕者を有すると同時に激烈なる夥多の敵を有するものなり、我邦の歴史的人物にして彼の如く激賞を得しものはなかるべく、亦た彼の如く忌避されしものはあらざるべし、彼若し善人ならん乎、多分彼の仰慕家が稱するが如く完全人物にはあらざるべし、彼若し惡人ならん乎、彼の宗敵が示すが如き奸物にはあらざりしならん、眞正の日蓮は最も畫き難き人物なり。

然れども彼を解するの難きは彼の特性の奇異なるのみに非らずして、我が國民の特性たる彼が如き人物を解するに最も不適當なるものなるが故なり、穩便柔和は東洋國民全躰の特質なり、劇性は彼等の最も厭ふ所、彼等の歴史は之を示せり、彼等の美術は其

類似な萬國歴史に見る

宗教的大山師

證なり、國民は風雅禮節を以て世界に誇る、故に偶々峻險豪膽日蓮の如き人物の出で來らん乎、彼は國家異例の産物として見做され、彼を解するに前例あるなく、彼を量るに標準あるなし、彼は單獨歴史紙面に卓立し、激賞激貶せられつゝ今日に至れり。

然れども史學の區域全世界を掩ふに及んで彼の如きも亦た單獨の人物たらざるに至れり、余輩は彼の類似を萬國歴史に見るに及んで彼を解するに大に易きを感ずるなり、余輩の爰に彼を論ぜんとするは彼に關する歴史的新事實を讀者に供せんとするに非らず、余輩の目的は通常世間に知れ渡りたる彼に關する事實を以て比較的に彼の人と爲りを攻究せんとするにあり。

日蓮は惡人なり、大山師、政治的失敗者の宗教家となりしもの、我邦に於ける野望家の張本　是れ余輩が彼に關して幾多の批評家より聞きし所なり、彼は神道家の嘲弄物なり、基督教信徒の鄙視して已まざる所、佛教諸宗の憎惡の中心點なり、彼の頭上に積まれし憎惡、嘲弄、凌辱、傷毒の形容詞は多分日本語中に存する凡てを盡せしならんと信ず、宗教的大山師、是れ彼に對する彼の敵人の觀念を一括せし言なり、彼

れ若し英雄ならん乎、彼は夫のクラレンドンがクロムウエルを評せし如くGreat bad man「惡しき巨人」なりしなり、彼の心事已に惡なり、故に彼の大事業は渾て惡業なりしとなり。

彼の生涯と彼の事業

余輩は彼に關する歴史的事實の眞僞を明かにして彼の心事の善惡を判ぜざるべし、若し夫の瀧ノ口法難なるものにして彼の弟子の揑造に係かる妄譚なりとするも、若し又た法難に際して彼が之を免るゝを得しは奇跡的天變に依るにあらずして彼の大敵たりし良觀和尚の歎願に出でしとするも、佐渡海上の曼陀羅現出は迷信時代の想像に依るとするも、彼の元寇に關する預言は後日の附托(コウタク)説なりとするも、一事吾人の彼に關して少しも疑ふ能はざるあり、即ち彼の生涯と彼の事業是なり、東海僻陬の一出家が終に天下を震動するに至り、彼死して後六百年、彼に歸依するものは百十萬を以て數へられ、多くの正直なる、多くの豪勇なる、多くの勤勉なる我が國の人士が彼に師事するの一事は是れ亦た歴史的大事實と云はざるべからず、而して浮虛に依て身延山與り、瞞着に依て池上成り、野望を懷ふて日照服し、山師を懷ふて日親動きしとせん乎、余輩は云ふ、是れヒューマニチに其物を疑ふ事にして批評的歴史の解剖刀は如何に銳くあるにもせよ吾人の人情に於ける此信仰は容易に動かし得べきに非ず、トマス、カーライル叫んで曰く、「虛人宗教を建てしと云ふか、余は汝に告げん、虛人は土壁をも建つる能はず」と、野望の人が人心を收攬せしの例なきに非らず、然れども虛人が多くの眞面目なる人の心を收攬して綿々六百年後の今日に至りし事は世界の歴史未だ嘗て其例を見ず。

心靈的實驗

抑も宗教的事實たる、其無形の心靈に關するが故に之を全く歴史的記錄に存する事は甚だ難し、宗教は究むるよりは感ずるを要す、故に文明國の宗教なる基督教に於ても之に關する最後の證據は信徒の心靈的實驗を以てす、其經典たるバイブル（特に新約聖書）は歴史的批評に最も能く耐ゆるもの、然れどもバイブル歴史に依てのみ基督を認めんと欲する者は彼を解し得ざるものなり、是れルナン、ストラウス等博識の士が基督を誤解せし理由なり、基督を解せんと欲せば彼の教訓を實行し彼の精神を吸收同化せざるべからず、故に基督彼自身も彼の弟子に教へて曰ふ、

人もし我を遣しゝ者の旨に從はゞ此の教の神より出るか又た己に由りて言ふなるかを知るべし

日蓮自身に接せざるべからず

即ち彼の教の眞理を知らんと欲せば之を實行せざるべからずとの意なり、基督教證據論の磐石は實に其心靈的感化力にあるなり。

日蓮惡人說は信じ難し

宗教家日蓮を解せんとするも亦た日蓮彼自身に接せざるべからず、記錄に存する記事を以てのみ彼の爲人を評せんとするものは眞正なる彼を識認する能はず、是れ何人にとても然りとするも宗教家に於ては殊に然りとす、史學の冷眼のみが彼を圓滿に解し得べしと信ずる人は明白なる心理學上の事實を否定するものにして靈物の長たる宗教家を評するに當て禽獸木石を研究すると同一の方法を採るものなり、日蓮も基督も均しく彼の批評家に告げて曰ん、「我を識らんと欲せば我が言を守れ」と。

日蓮惡人說は最も信じ難き說、恰もモハメッド僞預者者說が業に已に歷史家の思惟外に撤去せられしが如し、余輩は彼の事業を再錄して彼を辨ずるの要なし、歷史家ランカが天主教徒に向つて十六世紀の宗教改革者を辨護せしと同一の論法、トマス、カーライルが二百五十年間大逆無道として英國人の腦裡に存せしオリバー、クロムウエルを辯ぜしと同一の考察法は日蓮上人を宗教的山師てふ淺薄無情の批評に對し充分に辨護するを得べし。

然らば彼如何なる人物なりしや

然らば彼は如何なる人物なりしや、余輩は爾か云ふ、彼は亞拉比亞の豫言者モハメットの如き、伊國の改革者リエンジの如き、西のイグナシアス、ロヨラの如き、獨のマルチン、ルーテルの如き、英のジョージ、フオックスの如き、激烈の性を帶びたる熱誠の宗教家たりしなりと、彼の行爲に不合過失の多き、彼の言語の粗暴亂雜なる、忽にして怒り、忽にして泣き、敵に劇にして友に優なる、强者に對して頑なる、弱者に對して脆き、其志望の莊遠なる、其手段の極端なる、一として吾人の今日稱する Intense character(激性)たるの證に非ざるはなし、彼の如きは世界歷史に於ても稀に見る所、特に平穩柔順を旨とする我が邦人の中に於ては實に奇異中の奇異なり、彼を彼の同類と比較してのみ少しく彼を解し得るも、彼一人として彼を量らんには煩混錯雜たる反對性の集合躰、忽ちにして秀麗の山水を望むかと思へば忽にして開豁の曠野の現はる

激烈熱誠の宗教家

劇烈なる反對性

只だ二途あるのみ

るあり、巍々たる山嶽が洋々たる海面に出沒するの狀、孰れか彼にして孰れか彼ならざる乎、吾人探らんと欲して得ず感ぜざらんと欲して感ず、彼の如きは實に不合中の合、反對中の調和なり、彼を正解すれば無比の美なり、彼を誤解すれば無比の醜なり、彼を解するの難實に彼の劇烈なる反對性にあり。

故に凡人にして彼れを解せんとする乎、只二途あるのみ、彼れを迷信的に崇拜するのみ、彼を恐怖的に排斥するのみ、彼の如きは敵たらざれば友とすべきもの、友たらざれば敵とすべきものなり、彼れ人に對して冷淡なる能はざりし如く人も亦た彼に對して冷淡なる能はず、ツエンヲ然り、サボナローラ然り、ルーテル然り、彼の如きはヤコーレー卿の稱する能く愛し能く惡むものなり。

其二

日蓮を以て激越の宗教家となさん乎、彼の一代の事跡にして余輩の解し能はざるものは殆んどあるなし、彼の幼少時代に關する記事は措て問はず、彼れ歳已に十七、自覺の時期に達し、宗教的疑問に惱まされ、祈願を虛空藏菩薩に籠めて其解疑を求めんとする時、一日憂悶措く能はず、御堂の階段を下らんとするに際し、胸膈氣逼りて多量の生血を吐きて其場に絶倒するに至り、同寮所化の介抱に依りて復活するに至りしとの一事は余輩が彼に就て疑はんと欲するも能はざる所なり、此記事に接して何人か歐洲歴史に載するマルチン、ルーテルの青年時代の經歴を思ひ出さゞるものあらんや、同じく是れ激越の好青年、宗教的疑問は彼の心思を壓し、彼れその解明を望んで得ず、一日憂悶其極に達し、彼の宿房内に絶倒し、終に同僚の扱け起す所となれり、東西二例の相符合する實に一は他の摸寫に係るが如し、モハメッドが砂漠の岩窟に蟄居して

吐血して絶倒す

東西二例

煩悶の中に明を求めしが如き、ロヨラが時々憂鬱の餘り身を樓上より投ぜんとせしが如き、コロムウエルが夜中屢醫師を呼寄せて鬱憂症の治療を乞ひしが如き、激賊の士が眞理を探究するの際此病理的苦痛を感ぜし例は宗教歴史上決して尠からず、日蓮にして此心靈的激戰を經過せずして安心立命の位置に達せしとせん乎、彼の確信の緩漫なる、彼は平凡的僧侶として彼の一生を終りしならんのみ。

宗教的疑問

彼の宗教的疑問は余輩の同情を表する所、熱賊彼が如きものにして如何にして疑問なからざるを得んや、佛に八宗あり、孰れか世尊釋迦如來の眞意に適ひしものぞ、本師は一人なるに何故に八宗十二宗の別あるや、釋迦の宗旨とは眞言か、將た華嚴なるか、禪宗なるか、大海の潮に二味あるなし、如來の教法に二道あるべからず、嗚呼釋迦の佛教なるものは何處にあるや、是れ彼の疑問の第一なりし、是れ尚ほ今日吾人を苦むる疑問なり。

釋迦の佛教は何處にあるや

佛は八宗に止まらずして四萬八千宗ありてとて吾人の思惟を嚇すものあり、然れども熱賊日蓮の如きものにして如何で斯の如き誇大的威嚇に服すべけんや、吾邦人にして

基督教を信ずる者の邂逅する第一の疑問も亦た其宗派の分離にあらずや、而して彼等宣教師輩が多くの附托說を設け此大躓石を除き去らんとするも誠意該教を探らんと欲するものに一として滿足を與へしことなし、基督の基督教なるものは何處に在るや、是れ尚ほ吾人の問題ならずや、日蓮の疑問は當然なり、余輩は世間幾多の宗教家が彼の如き疑問を起さゞるを甚だ怪むなり。

日蓮を苦めし第二の疑惑は彼の宗教思想に最終の判決を與ふべき經典の撰擇なりき、是れ彼の最も難とせし所なるが如し、他の宗教に於ては此の問題を定むること最も易し、回々教に於ては「コラン」を除ては他に憑據的經典のあるべうもなし、波斯教に「センドアベスタ」あり、印度教に「リグビダ」あり、而して路錫が同一問題を以て困めらるるや、彼は彼の寺院内に鎖を以て繫がれありし拉典譯「ベイブル」を見て彼の心に滿足するを得たり、然れども佛教に於ては全く然らず、先づ小乘大乘の別あり、而して大乘中憑據的經典として各派の奉戴する所のもの甚だ多し、天台は般若法華に據り、禪宗は重きを楞伽に置き、眞言は大日金剛楞嚴に基づく、其他華嚴經あり、大集經あり、

彼の性は兩元論に耐ゆる能はず

絶大のレベレーション

涅槃經あり、一切經七千三百九十九卷、其說く所才唇齟齬する事多きは決して他宗教經典に於て見る能はざる所なり、今日の佛教學者が此點に關する他宗の攻擊を免がれんが爲めに佛教一貫論を唱道すると雖も直實なる批評家を滿足するに甚だ苦しむを以て知るべし。

熱誠の日蓮如何で運運的附托說を以て滿足すべき、彼は佛教經典論に就て最も簡單なる最も明白なる解明を要せり、彼の如きの性は兩元論を以て耐ゆる能はざるもの、單純なる一元論のみが彼を滿足し得べし、故に彼が一日無量義經を繙き、諸經の年代的順序と權實兩教の別を示さるゝや、混沌たりし彼の思惟は今は整然たる模型を取るに至り、八萬四千の佛說も簡明なる組織的佛學となりて彼の腦中に收まるに至れり、是れ實にニュートンの思惟界に引力說の浮び出て駁雜なる天躰運動を一單元理を以て悉く解釋するに至りし時の快と樂に比すべきもの、僧日蓮に取りては絶大のレベレーション、無限の新眞理、彼を迷霧の中より救ひ出せしもの、彼に安心を供せしもの、彼の生命を救ひしもの、「宗教家の歡喜雀躍」とは實に如斯ものを云ふものにして此種の經驗なきもの、迚も推量し能はざる所なり、涅槃經は彼に敎へて曰く「依法不依人」と、日蓮今は人言に依らざるべし、印度の菩薩たれ、支那の大師たれ、日本の高僧たれ、彼等の百萬言は聖法の一言に及ばず、宗派の分離實に此に基けり、彼等が人を信じて法を信ぜざればなり、佛徒の無氣力此に存す　彼等が變幻浮雲の如き學說に賴て萬世不易の佛の金言に賴らざればなり、我は法に依て立たん、而して法華經は如來出世の本懷を述べられしもの、此經を以て他經を解し、此經を以て我が信仰の土臺石となすならば我に誤謬の恐れあるなし、怒濤捲き來りて我を擊つとも何かある、我は萬世の岩に賴めり、政權慴るゝに足らず、學識憚るに足らず、我は宇宙の眞理を握るもの、我れ法に在り法我にありて法の貴きが如く我貴しと、無限の勇氣、無限の責任、無限の自重心は今は彼の全心を襲へり、羸弱世に譬ふべきなき彼は法に依るに依て勇敢世に比すべきものなきに至れり。ルーテルの經驗も斯くありし、「聖語に依るにあらず人に依るに非らず」と、サボナロ・ラの經驗も斯くありし、「人說なきが故に神は之に最終の判決を與へんが爲に人類に聖書を賜へり」と。

「依法不依人」

日蓮の結論が近世批評學者の承認する所たるや否やは彼の心事を解するに當て全く不用なる問題なり、彼の尊崇して以て萬世の寶典となせし妙法蓮華經なるものは佛滅後五百年の作にして而も印度國外ペクトリアの蠻土に於て始めて編せられしものなりとは余輩が輓近の批評學者より聞く所なり、而して始の神學思想を形造るに於て最肝要の手引となりし無量義經なるものはペクトリア產の不經的（アポクリフハル）著作を辯護せんが爲に作られしものにして其法華經を贊するは理の最も覩易きものなりとの說あり、余輩は爰に此の批評學上の問題を決せんとするものに非らず、余輩は知る日蓮は十三世紀の始に東洋の日本安房の一隅に生れしものなる事を、彼に梵語を以て批評的に印度文學を研究するの機會と便利とは供べられざりしなり、彼の結論の不當なりしは彼の時代と境遇と敎育との然ちしめし所にして、之を以て彼を責むるは十六世紀の神學の不完全なるを以てルーテルを責むるが加きもの、十七世紀の科學の不合理なるを以てガリリオを責むるが如きものなり、日蓮の神學の粗漏不完全なりしは彼の僞善者たりしの證に非らず、恰も近世の歷史家が「コーラン」に妄譚の多きにも關せずモハメッドの誠實を

彼の解脫は十九歲の時

疑はざるに至りしが如し。

日蓮の解脫は彼の十九歲の時にてありき（ルーテルは二十二歲サボナローラは十九歲）、然れどもその發表は尙ほ十數年の後にありき、彼は鎌倉に遊び、叡山に學び、南都高野に敎勢を察せり、彼の叡山に在るや法華經を以て彼の專門と定め、天臺章安妙樂の釋疏を熟覽し以て大に彼の最始の確信を鞏固ならしめたり、激誠彼の如きものは一度信ぜし事は容易に變更せず、彼の青年時代に於て理性の最も過敏にして印刻し易き時に受けし彼の感動は消滅し得べからざる印象として彼の心に存せり、故に彼の遊學は彼の青年時代の信仰を强むるに止まつて彼を廣濶ならしめざりし、彼は既定說を以て諸經を閱したれば諸經は彼の自說に貢を拂ふに止て之を變化するの力を有せざりし、如斯の心理的現象は決して日蓮一人に止まらざるなり、ルーテルなり、マリア、テラッサなり、スウヰーデンボルグなり、熱誠なる宗敎家の經驗にして如斯ならざりしは稀なり、日蓮は他の宗敎家と同じく熱心なりし比例に狹隘なりしなり、高くして尖く、深くして狹く、銳くして寬ならざりしは彼の特性なり。

熱心なりし比例に狹隘なりし

彼は無謀ならざりし

曠野の試練十有二年

歸鄉

然れども狹隘なりしと雖も彼は無謀ならざりしなり、彼は世の所謂猪武者にあらざりしなり、涙脆き彼は生れながらにして寧ろ憶病者と稱するも猛勇の性には非らざりし、是れ彼の父母に對する感情恩人に送りし彼の書翰の充分に證する所なり、彼の勇氣は單に彼の宗教心より來りしものなり、故に彼は十九歳にして彼の解脫に達せしと雖も孤獨立て彼の確信を天下に發表するに至りし迄は幾多の躊躇と反省と錬磨とを要せり、余輩は信ず、「時來れり」の聲は彼の厳山留學中幾回となく彼の心中に湧き來りしなんと、然れども彼の分別は彼の熱心を抑へ彼の肉情は屢〻彼の感慨に抗せしならん、吾人の所謂「曠野の試練」なるものは彼に取りては十有二年の長きに亘りたり、強ひられざれば起たざるは英雄の一特徴なり、日蓮の激熱性を以て此長年月を忍びしの一事は彼の巨人たるを證するに足る。

彼は留學を終て故鄉安房に歸りたり、彼は先づ彼の非凡の冀望を彼の父母に告げ、彼の行路の多難なるを示し、彼より普通僧侶の安逸生涯を望むべなからざるを乞へり、彼の心は已に決せり、豫言者は故鄉人には受けられざるを常とすれども、日蓮も他の豫

宇宙に向て新主義の宣告をなせり

南無妙法蓮華經

言者と同じく彼の革新的思想の發表を彼の鄉里の人の前に於てせり。

人に告るに先て彼は先づ宇宙に向て彼の新主義の宣告をなせり、建長五年四月二十八日、如來の滅後二千二百一年、即ち末法に入てより二百有一年、西暦一千二百五十三年、ダンテ日光を見る十三年の前、第六「十字軍」の終りし前年、即ち歐洲の熱心と迷信とは其極度に達し、智識的に暗くして心靈的に最も高尚なりし頃、日蓮は獨り安房の東端太平洋に突出する高角の上に立ち、太陽が黄金色の雲裝を纏ふて光輝と生命とを暗黑世界に供せんが爲め波浪的水平上に顯はれし時、僧日蓮は東面して一聲高らかに唱へて曰く、

南無妙法蓮華經

海は彼を聞けり、而して彼の足下に怒音を呈して彼の勇壯なる冀望を贊せり、山は彼を聞けり、而して彼の背後の松樹に琴瑟の微音を奏でゝ彼の心底の祈願に和せり、彼は今厳肅なる儀式を以て宇宙に向て彼の誓約を立てたり、彼の行路已に定まれり、彼れ宇宙の贊助を得て彼一人は世界より大なり、戰は宣せられぬ、戰鬪之より甚だ劇し

彼の起つや年三十二

豫言者は故郷より逐はれぬ

かるべし。

彼の起つや彼れ年三十二、基督釋迦の出世に後るゝ事二年、エマルソン氏の所謂「丈夫の起つべき年齢」なりき、彼は彼の里人に向ひ彼の獨特の宣言をなせり、曰く「正法千年像法千年已に過ぎ去て今は末法に入りてより二百年法華經の流布さるべき時は至りぬ」、曰く「念佛は無間に墮る惡法、禪宗は天魔の眷屬、眞言は國は滅す邪法、律宗は國賊なり」、曰く「諸宗無得道墮地獄法華獨一の利益に依るに若かず」、曰く「今は法華經流布の時代我は是れ如來の使なり」と、彼に忿怒あり、熱涙あり、狂ならざれば信、信ならざれば狂、聽衆の多數は狂と決せり、豫言者は故郷より逐ひ出されぬ。

嗚呼是れモハメッドが始めて彼の沈思の結果を彼の故人に告げてメッカを逐はれてメヂナに遁れし時の狀、是れキリストが彼の使命を彼の村人に告げし時會堂にありしもの之を聞て大に憤り、起てイエスを邑の外に出し投下さんとて其邑の建ちたる崖にまで曳き往けり、

との樣なり、人物に大少の別あらん、然れども激烈なる誠實の士が世に現はるゝや同一の待遇は免がれざる所、日蓮の罵詈的說法の適否は余輩は知らず、然れども一人の激に過て徳つものあれば千萬の優柔に過て惡弊を摘示し能はざるあり、余輩は日蓮の勇氣を歎賞するの餘り彼の他宗駁擊の度に過ぎしを怨せん事を欲す。

鎌倉に赴く

日蓮最大の時

迫害今は彼の身に迫り來りぬ、然れども是れ彼の覺悟の上なり、故郷を逐はれて彼は時の日本國の都會なる鎌倉に赴けり、彼れ曾て曰へり「鎌倉は當時日本の大都會なれば法を弘むるには宜しく、道を學ぶに益なし」と、是れ實に深遠なる觀察、彼れのナポレオン的眼光は法敵を衝くの燒點を彼に示せり、彼は山に於て法を究め都に於て之を流布せり、彼の冀望は已に天下を併呑せり。

余輩は常に惟へらく日蓮の最大なりし時は實に此時にありしと、彼の立正安國論は彼れ已に同意者を得て彼の勢力已に天下を靡かすに至りし時にありき、彼の佐渡流竄は彼れ已に天下の注目する所となり彼の退讓は衆人の許さゞる所となりし時にありき、然れども彼れ年始めて三十二、無名の脚僧獨り大志を懷き、飄然鎌倉に入り、地を名越の山腹に卜し、土を均し地を坦め、「杣木の柱に竹搖ひわたし、尾花を苅りて屋根を葺

獨立なるかな彼

き」、妙法一卷を懷にして彼の立脚地を此處に定む、獨立なるかな彼、天下を教化せんと欲するものは先づ彼の如くならざる可からず、彼の林間に峙つ建長寺何かある、政權に恃み虛威に誇り、七堂伽藍高く聳て、衆愚の歸依する所たるも、是れ空中の樓閣たるに過ぎず、彼の大佛殿何かある、天下の富を投じて銅像を鑄る、是れ何人も能ふ所、下民の救濟是より來るなし、我に一片の心あり、至誠山をも拔くべし、我に政權に依るの要なし、我に富貴に屈するの要なし、我は獨り立て世界を化せん、我は世尊本師の使者、彼れ我と共にありて我一人は世界よりも强し、

彼は精神の實力を知れり

"With one voice, O world, though thou deniest,
Stand thou on that side—for on this I am!"

日蓮を笑ふものは笑へ、然れども彼の獨立を眞似よ、彼は彼の宗義を擴むるに當て富貴と威力とに依らず、彼は空海最澄の如く朝權の庇保に與からず、彼は精神の實力を知れり、彼は宗教の本躰を解せり、宜なるかな彼に無限の生命力ありしや、他年身延となり、池上と立ち、宏殿巨刹空に聳へ、五千の寺院國内に起り、二百有餘萬の平民

至誠の一塊

的信徒を蒐め、四千有餘の僧侶を使役し、日本的佛教として我國土を化するに至りしものは實に名越の草庵内に籠りし至誠の一塊なりとす、エマルソン云へるあり曰く

人若しその本能の示す所に據り其上に屹立せば大世界は來て彼を補翼すべし

と、日蓮は彼の本能の上に立てり、故に二百萬人の日本人は彼に歸依せり、夫の俗世界の嗜好に投ぜんとし、夫の外國宣教師の補助に與からんとする宗教家は日蓮と日を同ふして語る可きものにあらず、余輩は合理的宗教を唱へて卑屈軟弱なる近世の宗教家千百を有せんよりはペクトリヤ的經典に依り賴みし一日蓮を得んことを望むものなり。

其三

天下の宗敵に對して孤陣を名越の山腹に張りし僧日蓮は尙ほ一年間沈默を守れり、彼は鶴ヶ岡の經藏に入り獨學獨考して彼の心思を養へり、此時に當て攝理は彼に一人の貴重なる共働者を供せり、即ち敵山の學僧成辨と稱するもの、齡は日蓮に一歲を加へ、沈毅温良靜寂の士、志望學說の同贊を慕ふて遠路鎌倉に抵りしものなり、二者性を異にして目的を共にせり、成辨は守るに善くして日蓮は戰ふの人なり、前者は內を整へて後者は外に張り、前者は柔に失し後者は剛に過ぎ、一は他の補充性にして一を欠て他は其目的を達する能はず、成辨名を改めて日照と稱し、日蓮第一の弟子となれり、日蓮宗の建設は實に二者の共同事業なり、世が日蓮を稱して日照を思はざるは前者は多く外に現はれて其行爲の顯著なりしが故のみ、恰も獨逸宗敎改革事業に於てルーテル現はれてメランクソン隱るゝが如し。

貴重なる共働者

日照

ノーベリス曰く「若し一人の余に贊同するものゐる時は余の確信は千百倍の强を致す」と、求めずして得たる日照の贊同は如何に日蓮の確信を强からしめたりしよ、彼れの進取的運動は實に日照を得て後に始まれり、彼は今は建設事業を悉く日照に委ね、回顧の配慮を去て專心他宗の攻擊折伏に從事せり、彼は實に我邦に於ける路傍說敎の率先者なり、彼は日々鎌倉辻町の東小町往還の路に立て「諸宗無得道墮地獄」を呼び、彼の獨特の宗義を傳布せり、人あり彼に往還に法を說くの非禮を責むるものあれば、彼は云ふ、「人間は坐して食するを禮とすれども亂軍急場の場合に於ては立て食するも非禮ならず」と、彼の激烈なる他宗駁擊を非難するものに向て彼は云ふ、「出家の身は元來佛の使なり、世を畏れ人に媚て之を云はざるは道に非らず」と、彼は戰時の觀念を宗敎に適用せし者、余輩彼の例を求めんと欲すれば舊約時代の預言者に非らざればルーテル彼自身に抵らざるべからず、詩人リヒテルがルーテルを評して「彼の言語は戰爭なり」と云ひしは我の日蓮に適用すべきものなり、自重抱負日蓮の如きは彼を措て他に我が國史に載せざる所、基督敎國に於けるジョン、ノックス、ジョージ、フォックス等

路傍說敎の率先者

戰時の觀念を宗敎に適用す

有力なる信徒を得たり

の勇敢熱心に比してのみ日蓮の當時を思ひ得るなり。

彼は路傍説教に依りて多くの有力なる信徒を得たり、四條頼基なり、進士春善なり、工藤吉隆なり、池上宗仲なり、荏原義宗なり、南部實長なり、皆な忠武を以て聞へし東國異數の武士なり、北條時代の日本人は今人の如く宗教に冷淡ならざりしなり、彼等は身は豪族の中に算へられ政府樞要の位置を占めしものなりと雖も、路傍説教に耳を欹て、一度び真理と信ずるに至れば世の嘲弄誹謗を顧みず、直に彼等の信仰を表白するに躊躇せざりしなり、試に思へ、工藤吉隆は房州天津の領主なりし事を、四條頼基は北條の一門江馬遠江守の近臣なりし事を、池上宗仲は東國屈指の豪族なりし事を、而して日蓮の恩人にして終に彼に信服するに至りし富木播磨守胤繼は諸侯の一人なりし事を、是等が名越の貧僧を信じ彼に師事するに至りしなり、日蓮の豪と遇とは感ずるに餘りあり、然れども是等豪直の士の行爲は我邦の今日の社會に於て求めんと欲して能はざる所、余輩の祖先も一時は真面目なる宗教家なりしなり、彼等に不人望なる味方に組するの勇氣ありしなり、彼等は交際社會の批評を恐れざりし、彼等は宗教的熱心を以て恥となさゞりし、明治の日本には鐵道あり、電信あり、シャムペーン酒あり、花骨牌あり、然れども建長文永時代の誠實熱心真面目は其封建政治と共に今は全く失せて迹なし、今日は批評の時代なり、宗教哲學時代なり、「新神學」時代なり、然れども名譽生命を悉く賭して一宗教に歸依するが如きは今人の敢てせざる所、僧日蓮は狂人なり、彼の徒弟は迷信家なり、如何となれば彼等は今日の眼鏡的批評學者の如く冷淡にして無情ならざりしが故に、彼等は真面目なりしが故に、彼等は實に誠に宗教を信ぜしが故に。

直接傳道に從事すること六年、彼の信徒の益增加するに及びて彼の確信は益强きを加へたり、彼の心中に十數年間存せし彼の假説は今は生靈の土に試みられて其實果を結ぶに至れり、諸宗無得道説佛法惟一説は今は多くの賛同者を得て全く疑ふべからざるに至れり、時に康元元年關東に大洪水あり、其年六月十四日には鶴ヶ岡八幡宮の社震動せり、同日白晝に飛星を見たり、翌正嘉元年には月蝕日蝕共に異例なり、五月十八日大地震と共に海水泥に變じたり、夏旱魃甚しく田畑涸乾して野に一株の生草なし、

立正安國論

八月再び地大に震ひ人畜死傷夥し、十月天に五色の雲現はれ鉾の如き電光八方に散亂す、翌正嘉二年奇異の現象尙ほ息まず、五月廿八日彗星現はれ一天の星皆な光を奪はる、春惡疫流行し秋大風大洪水あり、諸國の大飢饉は延て翌正元元年に渉り、鎌倉市内に人其兒を啖ふものあるに至る、是れ何等の徵候ぞ、日蓮未だ氣象學を識らず、地質天文の諸學は彼の未だ夢にもせざる所、異現を解するに彼は單に彼の宗敎あるのみ、故に彼も亦た多くの宗敎熱心家と同じく自然的現象の註釋を古代聖經の中に覓めんとせり、彼は彼の凡ての經文學に徵して自然的異變の意味を探究せり、而して尙も彼の考察を確めんため彼は弟子日照を從へ、駿州富士郡岩本實相寺に至り、其經藏に就て彼の意見に經典的證據を求めたり、而して彼の默思と考察との結果は有名なる立正安國論と成れり、是れ日本文學中唯一の書、之に比すべきものは世界文學中伊國サボナローラの著「哈基(ハガイ)の聚言の註釋」あるのみ、二者同一の眼光と同一の攻究法を以て自然的現象と社會的變動を論ぜしもの、歷史家シモンドが彼れの有名なる「伊太利文學復興史」に於てサボナローラの著を許して「是れ心理學的異象(A psychological phenomenon なり」と云ひしは亦た立正安國論の適評なるべし。

立正安國論の要たる先づ金剛明經大集經仁王經藥師經の四經に據て、災異の來るは世の正に背き人の惡に歸し、善神は去り正法は蔽はるゝより惡魔厲鬼の來つて爲す所なることを明にし、次に法然が選擇集を破斥して正法を蔽ふものなることを辨じ、富に淨土を冀ひて三部經の他の餘經をば捨閉閣抛の四字に付するの甚しく非なるを喝叱し、次に正法を誇るの大罪過なるを說き、次に法華經の眞實敎大乘敎最勝敎たるを說き、結末に法華を尊信し念佛を抛下せずんば災異は今よりも猶ほ多く來らんことを示して終るまでを問答躰に書き綴りしなり(幸田露伴氏の「少年文學」に於ける明晰なる解剖に依る)。

是れ日蓮の論法、中古時代の歐羅巴人の論法、即ち所謂「依法不依人」的論法にして科學以前の人には惟一の論法なりしなり、「是れ我が言にあらずして釋迦牟尼世尊金口の佛說なり」と、古代誠實の士は如斯論法を以て滿足せしなり、日蓮は自然的災異は日本人が彼の尊崇する法華經を奉戴せざるが故なりと論定せり、而して猶ほ「自界叛逆難」